

同志社時報

2019.4

No. 147



特集 ■

■ 学生ボランティアの本質と同志社が果たすべき役割を考える

■最も辛いときにこそ、神は共におられる

(原文英語：We are sure that the Lord will be with you
in your most trying hours.)

生田 香緒里(女子中学校・高等学校教諭)

1889年(明治22年)8月22日、松尾音次郎(1889年6月、同志社神学校卒業)宛ての新島裏の手紙にある言葉である。なお、この手紙は日本語で書かれているが、祈りの部分は英語で書かれている。音次郎は病気が再発し大変な状況であることを手紙で伝えており、それを読んで驚いた新島が返信したものである。

新島はその手紙の中で、病気で辛い思いをしている音次郎のことを気遣い、決して失望することなく、困難な状況であっても神の御手に任せ、前に進んで行くべきである、そして、その困難な状況も神が与えたもので、その中でこそ人は成熟していくのだとも述べている。病気や様々な出来事で大変な思いを経験していた新島は、音次郎の思いを受け止め、彼に励ましの言葉を伝えたいと思ったに違いない。

この英文の祈りは、新島がクリスチャンであり牧師でもあったから出てきた言葉である。困難な状況であるからこそ、辛いときであるからこそ、神と共にいて慰め、励ましてくださるのだという神への信頼と信仰の深さが分かる言葉でもある。新島は同志社に関わる一人一人あるいは出会った一人一人に対して、この祈りを捧げていたのではないだろうか。新島のように、ゆるぎない神への信頼をもつて、力強く歩んでいきたいものである。



Doshisha college song

Words by W. M. Vories Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name

Doth signify; one lofty aim:

To train thy sons in heart and hand

To live for God and Native Land.

Dear Alma Mater, sons of thine

Shall be as branches to the vine;

Tho' through the world

we wander far and wide,

Still in our hearts thy precepts shall abide!

同志社よ、その名は一つの目的を意味する。

その学徒の精神的、肉体的に、

神のため、祖国のため、生きんという

一つの崇高な目的を。

親愛なる母校よ、同志社の学徒は、

ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。

たとえ、世界くまなく、広くはるかに、

われらさまようとも、汝の教訓は、

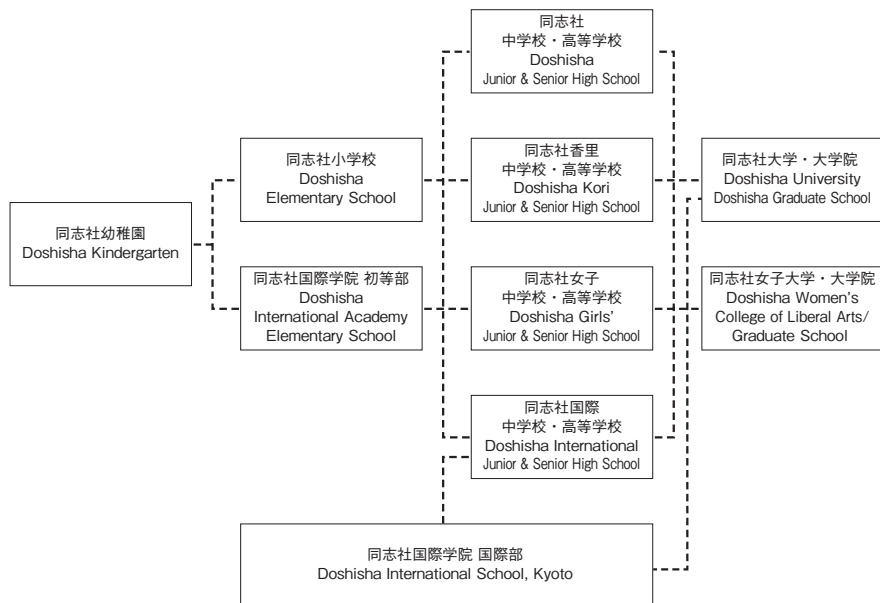
われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

(訳：児玉 実英)



同志社の一貫教育体制

The Integrated Educational System of the Doshisha



* 一定の条件があります (帰国生の要件)

『京都国際調停センターオープニングセレモニー 「国際紛争解決の新時代：京都国際 調停センターの使命」を開催』2018年11月20日

2018年11月20日、同志社大学を本拠として、公益社団法人「日本仲裁人協会」(JAA)が設置・運営する「京都国際調停センター (Japan International Mediation Center in Kyoto, JIMC-Kyoto)」が始動しました。

この日、「国際紛争解決の新時代：京都国際調停センターの使命」と題したオープニングセレモニーが開催され、ニューバーガー英国最高裁元長官、寺田最高裁元長官、川村日本仲裁人協会理事長、門川京都市長、そして松岡学長、その他来賓・関係者が、寒梅館ハーディーホールの壇上でテープカットを実施しました。

京都国際調停センターは、日本初の国際調停センターとして、日本企業等はもちろんのこと、世界各国の企業等に対して、友好的かつ安価で迅速な紛争解決の場を提供するものです。日本では、家庭裁判所での調停は知られていますが、国際ビジネス紛争の解決方法としての「国際調停」については、馴染みもなく、国際調停センターも存在していませんでした。京都国際調停センターは、日本初の国際調停センターとして、「国際標準の調停」を提供し、紛争解決をサポートする調停文化の新時代をつくることを目指しております。

※詳細については本誌「同志社クローズ・アップ」にて掲載



『The 68th Shakespeare Production公演』

2018年11月2日・3日

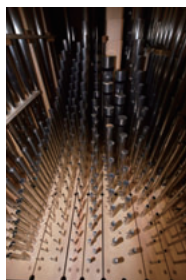
本学英語英文学科3・4年次の2年間にわたるシェイクスピア作品研究の集大成として、4年次の秋に原語(16世紀の英語)劇を上演しています。キャストをはじめ、字幕、衣装、大道具、照明、演出等すべて学生の手によって作り上げる伝統ある取り組みです。68回目を迎える今年度は、*The Winter's Tale* 『冬物語』を栄光館ファウラーチャペルにて上演しました。ディレクターである担当教員の指導の下、キャスト・スタッフ総勢41名のメンバーが約1年7か月の取り組みの成果を披露しました。



■ 中学校・高等学校

『チャペルコンサートシリーズ2018』

2018年度から宿志館グレイス・チャペルにて、新たに「チャペルコンサートシリーズ」をスタートさせました。「学外にも開かれた本格的な演奏会シリーズ」をコンセプトに、2017年に新しく備えられたパイプオルガンを中心とした多彩なプログラムで、初年度は4回の演奏会を実施しました。プロの演奏家を招いた演奏会から生徒と共に創りあげるステージまで、多様で幅広いレパートリーを今後のシリーズでも展開させていくつもりです。



『第一グラウンド人工芝全面改修』

2018年度夏休みに、第一グラウンド人工芝、陸上走路タータントラック等を全面改修いたしました。人工芝は、現在ラグビー競技で一番よく利用されている最適なモデルを採用、タータントラックは記録が伸びる青色にえんじ色から変更いたしました。徽章、ネームも同窓会とPTAの寄付により描いております。



『学園祭』

2018年10月2日～6日

2つの台風通過にはさまれながらも、体育祭・文化祭およびバザーを実施することができました。今年の文化祭テーマは「Girls' Power」です。自分たちでつくりあげる学園祭に、皆一人ひとりが様々な形で力を結集し、今年もまた、心に残る体育祭や文化祭・バザーとなりました。



『文化祭』

2018年9月22日



ダンス部の発表をコミュニケーションプラザにて行いました。

『ハローウィン』

2018年10月31日



生徒がそれぞれ工夫したコスチュームで生徒会行事のハローウィンを盛り上げ楽しみました。

■小学校

『台東大学附属小学校との交流会』

2018年11月13日～15日

11月13日から15日にかけて、小学校と友好協定を締結している台湾の台東大学附属小学校から児童22名、教員6名が来校し、全校集会で歓迎会を行いました。



国際部：『Field trip to Kyoto Railway Museum』

2018年11月1日

As a provocation to the unit How We Organize Ourselves, Grade 2/3 went on a field trip to Kyoto Railway Museum on Nov. 1st. The field trip aimed to pique the interest of the class as to how transportation systems are developed and how they are connected to the community and its needs.



初等部：『5年生宿泊学習 ～東京・群馬～』

2018年10月30日～11月2日

5年生では、東京群馬に宿泊学習に行きました。群馬では、新島襄旧宅を訪れ、新島襄の足跡をたどりました。東京では、国会議事堂と最高裁判所を見学し、皇居前ではグループごとに分かれてインタビューを行いました。平成最後の東京に触れることができ、大切な思い出の1ページとなりました。



幼稚園

『ホームカミングデー』

2018年11月10日



同志社幼稚園後援会の主催で、ホームカミングデーを開催しました。同志社女子大学心館食堂にて、約140名の卒園生とその家族が参加し、幼稚園の懐かしい写真が詰まったスライドを鑑賞したり、同志社香里高校吹奏楽部による演奏を楽しんだり、盛況な会となりました。再来年度の園舎移転の前に、名残惜しうに現園舎や園庭を撮影する参加者の姿も見られました。

『クリスマス礼拝・祝会』

2018年12月19日



イエス様のお誕生をお祝いするクリスマス礼拝を寒梅館にて行いました。年長組は降誕劇、年中組は聖歌隊、年少組はハンドベルの演奏と、それぞれの役割を担い、祝会では全園児で音楽に合わせてパフォーマンスを披露しました。「メリークリスマス!」子どもたちの声と心がつになり会場を包みました。

インタビューの2人

私の志

(本文4〜7頁)

藤えりかさん

1970年大津生まれ、京都育ち。93年、同志社大学法学部政治学科卒業、朝日新聞社に記者として入社。東京・名古屋の経済部や国際報道部、ロサンゼルス支局長などを経て、編集部長GLOBE編集部長、記者教育機関ポインター研究所で記者研修受講も。世界の政治・経済・社会問題に斬り込むシネマ・ア・リポートをウェブ版GLOBE+で連載、取材動画を踏まえ裏話や世界の問題を読むと双方方で議論する「シネマ・ア・リポート」を主宰。テレビ朝日・朝日放送・名古屋テレビ系の日曜朝放送「サンデーLIVE!!」に随時出演。著書に『なぜメル・ストリープはトランプに噛みつき、オリバー・ストーンは期待するの?』ハリウッドからアメリカが見える「幻冬舎新書」ツイッターは@erika_gashi



社会の frontline に立ち、まだまだ知られていないことや、考えるべき問題について、後世のためにも記していく。それが記者という仕事のひとつの役割だと思います。

宇山賢さん

1991年香川県生まれ。中学校入学と同時にフェンシングを始める。2004年同志社大学商学部卒業後、大手家具メーカーに就職。2015年8月、JOCがトップアスリートの就職を支援する制度「アスナビ」を活用して三菱電機に入社。最近の主な戦績は、2017年7月世界選手権ドイツ大会個人エベ7位、同10月ワールドカップスイス大会団体エベ3位、2018年8月アジア大会団体エベ優勝。189センチ、67キロ。好きな言葉は「孔明の畏」。



フェンシング選手として成熟する時期に自国開催される東京五輪。東京五輪で結果を残し、これまでお世話になった多くの方々に恩返ししたいです。

同志社 時報

No. 147

2019.4

私の志 INTERVIEW

独自の視点で世界取材 藤えりかさん

可能性を止めないで。人生に無駄はないから。

東京五輪代表の有力候補 宇山 賢さん

思考の読み合いを制して頂点を目指す。

特集

座談会 学生ボランティアの本質と同志社が果たすべき役割を考える

上田雅弘／小山 隆／小崎 眞／鎌田伸一

同志社の歴史にみるボランティア

―災害時の救済活動を中心に―

同志社社史資料センター

ボランティア・マインド

山本 真司

同志社教育の中でのボランティア―香里中高ボランティア部の活動から―

工藤 尚子

「同志社チャリティーコンサート」寒梅館」

目次

〈表紙〉

知証館

中谷隆志(大学心理学部事務長)

〈表紙裏〉

新島 襄の言葉

生田香緒里

(女子中学校・高等学校教諭)

〈口絵〉

■大学 京都国際調停センターオープンセレモニー「国際紛争解決の新時代：京都国際調停センターの使命」を開催

■女子大学 『The 68th Shakespeare Production公演』

■中学校・高等学校 チャペルコンサートシリーズ2018

■香里中学校・高等学校 第一グラウンド人工芝全面改修

■女子中学校・高等学校 学園祭

■国際中学校・高等学校 文化祭／ハローウィン

■小学校 台東大学附属小学校との交流会

■国際学院 国際部：Field trip to Kyoto Railway Museum／初等部：5年生宿泊学習 ～東京・群馬～

■幼稚園 ホームカミングデー／クリスマス礼拝・祝会

「私の志」インタビューの2人

第23回 同志社国際主義教育講演会「グローバル感覚の常識、非常識」	真山 仁	29
建物案内 紫塩館(同志社香里)		37
建物案内 訪知館(同志社大学)		38
同志社の逸品 新島襄肖像画	同志社史資料センター	39

同志社ナウ

『イタリアの黒死病関係史料集』が日本翻訳家協会から「翻訳特別賞」を受賞	石坂 尚武	41
生命医科学部10周年	小林 耕太	42
法人内中学校・高等学校職員合同研修会とPLAYFUL MINDSET ー女子大学上田信行ゼミ生によるワークショップ協力	鎌田 伸一	43
中高ともに関西吹奏楽コンクールで金賞受賞！	藤本 千佳	44
第42回全国高等学校総合文化祭(信州総文祭) 日本音楽部門出場(箏曲クラブ)	羽倉 由記	45
ユースエンタプライズトレードフェア2018にて特別賞を受賞	関口 英里	46
同志社国際学院初等部 オープンスクール〜PVP Exhibition 2019〜	太田 哲男	47

私の研究・私の授業

障害者スポーツへのまなざし	河西 正博	48
良心教育としてのソーシャル・イノベーション学	今里 滋	50
生徒が主体的・対話的になる授業への試み	酒谷 貴史	52
シェイクスピア研究の現在	塚田 雄一	54
カルチャー・インフラとしての学校をめざして	井口 和之	56
Songs, Culture and Community	Felicity Greenland	58

「研究者は薬剤師でなくても良いが、薬剤師は研究者でなければ ならない」をコンセプトに据えた研究と教育の実践	森田 邦彦	60
--	-------	----

同志社クロースアップ

京都国際調停センター始動「始動の瞬間」	瀬領 真悟	62
パイプオルガンがもたらす新たな可能性	佐川 淳	64
「同志社香里における半世紀」	吉川 康雄	66
トレーニング探究	加地 尚樹	68
総合的な学習の時間から総合的な探究の時間へ		

特別 寄稿

同志社初の女性オリンピック	横田みさを(1932年LA大会)	本井 康博	70
---------------	------------------	-------	----

新刊紹介

中国山水画史研究―奥行き表現を中心に―・河野道房著／苦難と心性―イタリア・ルネサンス期の黒死病―・石坂尚武著／信託取引と信託課税の法理・占部裕典著／古代物語としての源氏物語・廣田收著／A Passage to Self in Virginia Woolf's Works and Life・臼井雅美著／EUにおける政策過程と行政官僚制・原田徹著／電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか―技術とジェンダーの日独比較社会史―・石井香江著／金融商品取引法への誘い・川口恭弘著／生き物はどのように土にかえるのか―動植物の死骸をめぐる分解の生物学―・大園享司著／始まりの知―ファノンの臨床―・富山一郎著／新編同志社の思想家たち上・沖田行司編著／軍事的暴力を問う―旅する痛み―・富山一郎著／良心学入門・小原克博他著／政治家はなぜ質問に答えないか―インタビュの心理分析―・Ofer Feldman他著／いま大学で勉強するということ―「良く生きる」ための学びとは―・松岡敬・佐藤優著／古典歳時記・吉海直人著

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学Ⅱ同志社大学、女子大学Ⅱ同志社女子大学、中学校・高等学校Ⅱ同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校Ⅱ同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・女子中学校Ⅱ同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校Ⅱ同志社国際中学校・高等学校、小学校Ⅱ同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部Ⅱ同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園Ⅱ同志社幼稚園
●執筆者等の役職・職位は2019年3月15日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。



藤 えりか さん
新聞記者

独自の視点で世界を取材 可能性を止めないで。 人生に無駄はないから。

朝日新聞社でロサンゼルス支局長などを務め、現在は朝日新聞「be」兼「GLOBE」記者。世界の映画人へのインタビューを連載するなど大活躍中の卒業生です。記者としての志と、志が導いた貴重なお仕事などを伺いました。

「ナパーム弾の少女」の秘話を
世に送り出す

——新聞記者を志された動機をお聞かせください。

藤 子どもの頃から政治・経済や社会問題に関心があり、記者になりたいと思っていました。きっかけの一つは、映画好きの父の影響もあってアメリカ映画に親しむうちに見た「カプリコン1」です。NASAが絡む国家的陰謀を新聞記者が暴く物語を見て、幼心に、記者つてすごい仕事だなと。世の中に未来永劫知られないうちかもしれない重要な問題を、世に知らしめる。意義ある仕事だと思いました。

——入社後はどのようなお仕事をしてこられたのですか。

藤 水戸支局や北海道支社、東京芸芸部、経済部、国際報道部と、多様な部署を歩きました。それによって分野横断的な取材力が養われ、幅広い地域と分野を担当したロサンゼルス支局でも非常に役立ちました。北米やラテンアメリカの事件や移民問題、IT、大統領選にハリウッド。ハリウッドは政治と密接な世界です。映画好きも手伝い、ハリウッドを単なるエンタメ産業として捉えるのではなく、映画を通して政治や経済、社会を見ることが

がアメリカ社会を理解する一つの入り口になるのではと考えて取材しました。その経験を生かし、今は映画人の取材を通じて世界の政治・経済や社会問題を掘り下げる「シネマニア・リポート」を「朝日新聞GLOBE+」に連載しています。

——特に印象に残ったお仕事は何かですか。

藤 ベトナム戦争時、ナパーム弾で焼かれ、泣きながら裸で逃げる少女の写真が、ピュリッツァー賞を受賞しました。少女の名はキム・フックさん、撮影者は当時AP通信記者だったニック・ウトさんです。私がロサンゼルスにいた2012年、そのウトさんとアジア系アメリカ人記者協会のイベントで知り合いました。それを契機に、キム・フックさんとウトさんの二人三脚の米国行脚を取材して記事にしました。恨みを乗り越えて戦争に関わった人々をゆるし、戦争の悲惨さを伝える講演活動です。記事を読んでくださった名古屋の元大学学長の方から連絡をいただき、翌年キム・フックさんの来日を実現。東京などで講演が行われました。

——ロサンゼルスでの出会いが大きな広がりを見せたのですか。

藤 この話には続きがあります。当時も含め、キム・フックさんはカナダに住んでいます。実は亡命していたのです。詳しく

あり続けたいと思います。国際報道部で内勤・遊軍を担当していた頃、ソマリア海賊の襲撃が世界的に問題化していました。日本企業に被害はないと言われていたものの、実は身代金を払った日本企業もあるという話を耳にした。関係した可能性のある日本企業に片っ端から取材しました。身代金は支払っていても絶対に認めないのが常ですが、警鐘を鳴らすために諦めずにいると、匿名を条件に取材に応じてくれる当事者が現れた。記事は1面トップを飾りました。日本で取材できる国際問題はたくさんあることを実感し、疑問は見逃さず当たってみるという記者の基本の重要性を改めて感じました。

——今後はどのようなお仕事をしたいですか。

藤 現場の記者であり続けながら、「個」としての発信も増やしています。例えば2016年から読者イベント「シネマニア・サロン」を主宰していますが、「シネマニア・リポート」の取材裏話を踏まえ、背景の諸問題を紹介し、参加者のみなさんと討論しながら、世界について関心を深め合うのが趣旨です。読者の方々と双方向でつながるのは、記者の役割の一つとしてますます大切になっていると思います。私の発信手段は今、紙、ウェブ、

テレビ、リアルの4つと言えます。だからここ数年、話す力も鍛えるようにしています。同時に、折に触れ、取材以外のインプットも増やしたい。今は世界の大学の様々な講義をオンラインで受けられる時代。仕事をしながら学べる機会を活用しようとしています。

——大学時代の思い出を教えてください。

藤 ゼミは麻田貞雄先生の日米外交史でした。英語の原書もたくさん課される指導は厳しかったですが、結果的にアメリカ赴任時に生きました。第二外国語はスペイン語です。これも、ラテンアメリカも担当したロサンゼルス時代に役立ちました。関心の赴くままに行動していけば、やがて取れんされていく。人生に無駄なものはないのだと実感しています。

——新卒生にメッセージをお願いします。

藤 ひるむことなく、やりたいことに向かつて突き進んでほしいなと思います。「そんなの無理」とつい思ったり、誰かに言われたりすることも多いですが、諦めたら実現するものも実現しない。可能性を自分で止めないで、と思います。同時に、語学の勉強も続ける。自分の可能性を広げる手助けに、きつとなりますよ。

4つのツールを駆使する
新時代の記者に

——お仕事をされる上で持ち続けたい志とは何ですか。

藤 諦めない、日和らない、ブレない人です。

知りたくて昨年トロント近郊で彼女と再会し、衝撃的な経験について聞きました。戦後も心身の痛みと戦っていたにもかかわらず、彼女はベトナム政府によって反米プロパガンダの象徴にされ、政府の監視下に置かれていたのです。キューバに留学しても監視が続く中、現地で知り合ったベトナム人留学生と結婚。新婚旅行帰りの機内で亡命の意思を夫に打ち明け、トランジットでカナダの空港に降り立った。決死の思いで探し当てたドアの向こうに二人で駆け込み、亡命に成功。移民・難民をめぐる状況も踏まえて昨年、大きく記事にしました。ロサンゼルスでウトさんに話しかけた時はそんな物語に辿り着くなど考えもしなかったのですが、あの有名な写真の撮影者と出会って、とにかく話を聞いてみたいと思った。だからこそ、キム・フックさんの奇跡的な亡命譚まで読者に伝えることができた。出会うの大切さと、どこにでも歴史的な物語の糸口はあるのだと実感できた経験でした。



うやま さとる
宇山 賢さん
フェンシング選手

東京五輪代表の有力候補 思考の読み合いを制して 頂点を目指す。

12歳でフェンシングを始め、今や男子エペ団体の日本代表として活躍中の長身の剣士。ナショナルトレーニングセンターを訪ね、2020年東京五輪出場を目指す心境とフェンシングの魅力について伺いました。

プレースタイルは進化中

東京五輪が2020年に開催されます。現在、代表権争いではどのような位置におられるのですか。

宇山 個人戦でメダルを狙うのはまだ難しいのですが、団体では既に日本代表チームのメンバーとして出場しています。

世界で勝つため、現在はどのような取り組みをされていますか。

宇山 私がベースとする戦法はフェイントで相手に先にアタックさせ、そこへカウンターでポイントを奪うという比較的ディフェンシブなスタイルです。ところが1年ほど前、海外の選手からかなり研究されました。相手が先にオフフェンスをしてこなくなったため、自分のスタイルでプレーしにくくなった。そこで今は自ら攻めるオフフェンス技術を磨くと同時に、長年の課題だったフィジカルの底上げに取り組んでいます。負傷リスクの低減や全体のバランス強化のために身体の可動域を広げる、上半身のパワーを強化するなどです。それらの修正がようやく実を結び始め、自信を持つてオフフェンスに自分の力を出せる段階になってきました。プレースタイルをどう変えるのですか。

宇山 以前は9割近くをカウンターで返していましたが、今は世界で戦うためにディフェンスとオフフェンスが6対4くらいを目指しています。それができれば、試合の戦略が格段に広がります。私は学生時代に剣の握り方を変えました。確実に握れて力強く振れるベルギアンスタイルから、グリップを長く取るフレンチスタイルへと変えた。こうすることで剣を振る時の力強さは減りましたが、相手と長い距離で戦うことができるようになりました。しかし、先ほど話した通り、世界の舞台でそのスタイルで戦うと、海外の選手の目には「グリップが弱く守り中心のスタイル」と映り、彼らはパワーでどんどん攻めてくるようになりました。そこでディフェンシブなイメージを払拭するためにオフフェンス強化に取り組んだわけです。イメージが変わるだけで相手は警戒し、戦いにくくなります。個人戦でメダルが取れると翌日の団体戦で相手は慎重になってくることもあるので、このディフェンスとオフフェンス6対4のスタイルをすることで戦い方の幅が広がると思います。

本格的に世界で戦うようになられたのはいつ頃ですか。

宇山 シニアのナショナルチームに初めて入ったのは大学2、3年生の時です。3、

4年生の時にはアジア選手権や世界選手権の代表メンバーに入れていただいていた。個人では結果が出ていない状態でしたが、私自身は団体で五輪に出たかったので、団体戦に貢献することを最優先にできました。団体戦は喜びを分かち合えるし、個人戦とはまた異なる達成感があります。いろいろな要素の積み重ねがあつて結果が出てくるのが、団体戦の面白いところです。

フェンシングの魅力をお聞かせください。

宇山 読み合い、探り合い、駆け引きの妙味です。ポイントが入る瞬間は反射の問題ですが、そこへ至るまでの動作は読み合いの連続です。一つ試して相手に印象付けておき、脅威を与える、あるいは裏をかくなど、試合の後半でうまく活かせます。一つずつの動作における駆け引きと、試合の流れを作る駆け引きの両方があります。リードされても最後に逆転できるよう、布石を置いておくやり方も。フェンシングを続けて観察眼が養われました。

家族と会社の支援を得て 2020東京を目指す

「所属先の決まらない期間がありました。ご自身の支えは何でしたか。」

宇山 前職は一般枠で採用されたので、一般社員として勤務した上で競技を続けるという立場でしたが、練習と仕事の両立が困難になりました。その頃に東京五輪開催が決定し、両親が「当面サポートするから、新たな所属先を探しながら五輪を目指してはどうか」と言ってくれた。両親の支援が大きかったですし、その間も団体の日本代表メンバーだったことでモチベーションを保てました。

競技生活の中で壁に当たった時はどう乗り越えてこられましたか。

宇山 どんな壁にでも何らかの変化を与えることは可能です。あるいは壁のすき間を見つけ、ここなら自分の領域で戦えそうだと見抜く。そういう眼も必要でしょう。考え抜いてやってみても、だめなときはあります。そのときは仕方がないと思うことにしています。

現実的になるといいますか。

宇山 理想を追わない訳ではありません。理想や目標はあつていい。例えば高校球児が「イチロー選手のようにになりたい」と言う。でも、それは「イチローになる」とことは違うから、自分のプレースタイルとはまったく違うことをやり始めるのは違うでしょう。フェンシングでも本来持っている自分のリズムや剣筋というものがあるの、それらをどう組み立てて目

標とするレベルに達するのかを考えることが大切だと思います。理想へたどり着く道は何通りもあつていい。その道を絞ってしまわないことです。

東京五輪を目指す現在の心境をお聞かせください。

宇山 今の所属会社には強固なアスリート支援体制があり、私たちが勝てばもちろん喜んでくれます。経済面でのストレスもほとんどありません。今は恩返しではないですが、結果を残そうという意欲が強くなりましたし、それなら東京五輪に出て結果を残すということに自身のビジョンを置こうと。代表になれば当然国からの補助も出るの、日の丸を背負う自覚が必要だとも思っています。

新卒生生の皆さんにメッセージをお願いします。

宇山 会社から「やらされている」という感覚を持つのではなく、いま置かれている環境を、いかに自身の中にポジティブに落とし込むかを考えてほしいです。そのために必要なのは将来的なビジョン、広い視野と観察眼を持つこと。そうして徐々にキャリアアップを図っていただければと思います。(2018年12月26日、東京にて)

学生ボランティアの本質と 同志社が果たすべき役割を考える

●出席者

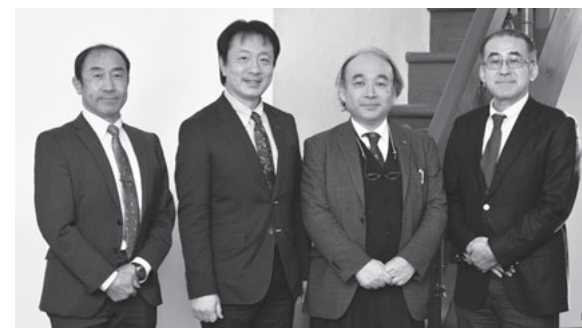
うえだ まさひろ
上田雅弘氏 (大学ボランティア支援室室長、商学部商学科教授)

こやまたかし
小山隆氏 (大学社会学部社会福祉学科教授)

こざきまこと
小崎眞氏 (女子大学ボランティア活動支援センター長、宗教部長、生活科学部人間生活学科教授)

●司会

かまだ しんいち
鎌田伸一氏 (同志社中学校・高等学校事務長)



学生への支援活動の現状と
同志社に脈打つ
ボランティアの歴史

鎌田 ●2018年は自然災害が全国で多発し、「今年の漢字」には「災」が選ばれました。災害ボランティアの活動についても数多くの報道がなされ、「スパーボランティア」という言葉が流行語大賞にノミネートされました。2020年の東京オリンピックを控えてボランティアの募集も行われました。グローバル化社会では国際協力ボランティア活動も盛んです。このように近年「ボランティア」という単語を耳にする機会が増えました。そもそも「ボランティア」とはどういうもので、どのような方が望ましいのでしょうか。本日は法人内でボランティアの支援に携わる先生方にお集まりいただき、ボランティアの根底にある本質を考えると同時に、同志社が私立学校として果たすべき役割を模索したいと思います。最初に各校におけるボランティア関連部署の活動状況をお聞かせください。社会福祉学科の小山先生からは、専門家としてのご

意見をいただければと思います。

小山 ●ぼくは15歳からボランティアをできました。当時の感動や驚きがきっかけとなって社会福祉学科へ進みましたので、一つにはボランティアをしてきた一個人として、二つ目は社会福祉学科の教授として、ボランティアをする学生を応援してきた立場からお話をさせていただければと思います。

鎌田 ●ありがとうございます。では同志社大学ボランティア支援室で室長をしておられる上田先生、そして、女子大学ボランティア活動支援センター長の小崎先生、お願いします。

上田 ●支援室は2016年4月に開設しました。本学の建学の精神の一つである徳育を重視してボランティアを積極的に支援することにより、学生の自主性、社会性を育むことが目的です。主な活動はボランティアを希望する学生への情報提供と、学生の活動状況の把握。ボランティア活動を通じて学生の成長を促すことが一番のモットーです。大きな活動の一つとしては「同志社ボランティアネットワーク」、通称「V-NET」を支援して

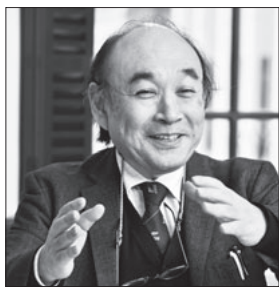


上田 雅弘氏
大学ボランティア支援室室長、
商学部商学科教授

います。同志社大学に所属する学生ボランティア団体のさらなる活性化を目的とした、学内横断型のボランティア団体ネットワークです。一例として2016年の同志社EVEでは、熊本地震の被災地支援に関わるパネル展示や物販を行いました。翌年夏には九州北部豪雨災害に関する呼びかけをしました。また、昼休みやキリスト教文化センターのチャペルアワーで、学生有志が募金活動を行いました。直接現地に行かなくても何か力になりたいという、学生たちの強い気持ちの発露です。その呼びかけに、また別の学生が足を止めて協力してくれる。思いを同じくする学生同士がつながるのは、彼らにとって良い経験になったようです。体験ボランティアプログラムも継続的に

実施しています。和東町にある荒れた茶畑の復旧作業を手伝うもので、草引き、施肥、お茶摘みなどをします。学生にとっては新鮮な農業体験にもなっているようです。学生と地域の方々との交流を月1回のペースで行う「同志社つながる@カフェ」というイベントもあります。

小崎 ●同志社女子大学のボランティア活動支援センターでも関連情報を収集し、ボランティアに関心のある学生へ情報提供を行っています。設置は2015年4月でした。女子大学の中長期計画において今後の大学の成長やいわゆるブランドینگが議論されていく中、2011年頃から学内にボランティア支援センター設置の議論が始まったと聞いています。現在センターでは、手話講座、京大病院の心臓疾患患者のボランティア、いのちの電話、児童養護施設での学習補助ボランティア、女子大学の卒業生がインド・ムンバイで行なっているスラムの子どもの自立力向上支援活動などの情報を提供しています。同志社大学とのネットワークにも参加して、京田辺ではYWCAとの活動にも



小山 隆氏
大学社会学部社会福祉学科教授

鎌田●百年以上も前からボランティア活動の実績があつた同志社ですが、学生ボランティアはどのようなあり方が望ましいとお考えですか。ボランティアの本質とは何でしょうか。

学生ボランティアの意義

鎌田●ボランティアの代表です。百年以上前、そして昭和の初めにも、同志社の人たちがボランティアを行っていたのです。また同志社大学には、視覚障がい学生を支援する学生団体が早くからありました。戦後の学生団体の記録によると、当時日本の視覚障がい学生の3分の1は同志社にいたそうです。病弱な学生を支援する団体もありました。そういう活動が脈々と受け継がれています。

鎌田●同大経済学部出身、大学の際はアメリカンフットボールに熱中し、ボランティアとは無縁だった私でしたが、同志社中高に就職し、キリスト教精神、良心教育にふれ、滋賀県の養護施設「湘南学園」に図書館をセルフビルドした事がきっかけとなり、様々なボランティア活動を実践してきました。私からは、法人内の小中高で実践されている様々なボランティア活動をご紹介します。小学校では、フィリピンの「ミンダナオ子ども図書館」の支援（図書館の主宰者である松井友さんは児童文学者で、福音館書店の元編集長だった父・松井直さんが同大の卒業生というご縁）。神学部卒の福井達雨先生が創立された『止揚学園』に、収穫感謝礼拝で集まった野菜や果物を届けたり、

モンゴルへの物資支援など。国際学院では、花の日礼拝の花やクリスマスの時期に老人ホームなどへのキャロリングや支援など。香里中高にはボランティア部があり、釜ヶ崎での炊き出し、J O C S 使用済切手運動、献米運動、など。中高、女子中高、国際中高でも、収穫感謝礼拝や花の日礼拝、クリスマスの献金、その他、宗教部主催の学校行事を通して、様々なボランティア活動が実践されています。

同志社の小中高では、日常的な教育活動の中で、良心、ボランティアスピリッツを自然に学び、育ち、成長する事ができます。また、「同志社チャリティーコンサート」は全同志社によるイベントであり、法人内の全ての学校が関わっており、第14回目のイベントが今年6月16日（日）に寒梅館で実施されます。教職員、保護者、同窓生等が実行委員会を結成し、法人内の小学校から大学・女子大まで、児童・生徒・学生・教職員がボランティア出演、全てがボランティアによる企画です。クラシックコンサートにも関わらず、障がいを持った方が、歓びのあまり声を発し、会場が一体となつて音楽を楽しむ

場面など、毎回、涙と感動を経験できる同志社らしいコンサートです。ここに参加し、活動を共有すると、同じ志を持つ仲間である事を感じ、キリスト教精神や良心教育が、同志社教育のベースとなっている事を理解できます。同志社全体に流れている優しさ、温かさを感じる事ができる素晴らしいイベントです。

小山●1891年に起きた濃尾地震の時、同志社の学生は現地に駆けつけて救助活動にあたりました。被災して、両親を亡くした子どもたちを救済し、のちに作られた孤児院（現在の児童養護施設）に預けています。他にも1935年頃に使われた「北海道大水災義援金募集」というのぼりが、多くの研究室にあります。おそらく京都の街中で募金を呼びかけたのでしょう。まさに、現地に行かないボラ



「北海道大水災義援金募集」ののぼり

小山●力関係や上下関係があるのはいけないし、「してあげる」ものではないかもしれませんが、できる人が、それを必要とする人と関わるのがボランティアだと思っています。例えば小中学校の生徒たちに対して、大学生ができることは山ほどある。障がい者や認知症高齢者の世界へいきなり飛び込むのは難しくとも、小学生たちに何かをすることは大いに可能だし、学生の成長になります。子どもたちもお兄さんやお姉さんと遊べて、良い経験になる。相互にメリットがあります。あるいは世の中には、生きづらさを抱えている子どもがいます。学生がそういう子たちをお世話することで学生自身も支えられ育てられ、救われる側面が山ほどあります。法人を活かせるなら、そのような体験を学生や子どもたちに作ってあげるのはどうでしょうか。縦と横のつながりを作つてあげたいですね。ただ、正解は複数あることが大事です。本質を考えることは大切ですが、本質を定義するのは不正確な営みであるという気がします。

上田●私も今のお話のように、ボランティアを通じて学生が何を学ぶかが大事だ

と考えています。学生は何を求めてボランティアをするのか。友だちをつくらうとして参加する学生も多いのですが、最初は利己的だった動機が、活動に参加するうち、誰かのために何かをしたいという利他的動機に変化する。その気持ちが増幅し、発展していく。社会とのつながりも徐々に考えるようになる。利己的動機、利他的動機、社会的動機という3つのパターンを通じて学生は成長していくのではないかと。自分とまったく異なる他者と触れ合うことで、誤解していたことを理解に変えていくことを学べるのではないのでしょうか。自尊心や自分の存在感、は、人とのつながりの中で感じるもの。社会や誰かの役に立っていることを気づきにしてほしいです。

小山●今のお話は多くの学生時代の経験に、まさに合致しています。ぼくがボランティアを始めたのは、たまたま誘われたからでした。いいことをしようという気持ちで始めるのが、ボランティアの第一段階です。そこで出会いがあり、友や仲間を得る。当時のぼくは高校生でした。ボランティア先には、制服のままタ

バコを吸うような高校生もいました。真面目な高校生だったばかりにとつては、同世代でも、普通なら接点のないような異質な人たちでした。でも、その人達が障がい児のお世話をしているその姿に、ぼくは惹かれました。異質な人たちとの出会いの感動、これが第一段階です。次にぼくは障がい児と出会いました。差別する意識は頭になかったけれども、少し気後れました。その子たちと一緒に、楽しく過ごせる自信がなかった。異質すぎる出会いは受け止めきれない、これが第二段階。しかし参加して数日が経ち、お風呂も一緒に入るようになると、次はすれ違った人が障がい児か他の関係者なのか分からなくなつた。同質ではないけれども、異質すぎることへの抵抗を乗り越えた。その第三段階の感動がすぐくて、ぼくは社会福祉学科に進学しました。

上田 ●どんな学生にも目覚めがある。
小山 ●そう、気づきがあります。
鎌田 ●ボランティアを端的な言葉で言い表すとすれば、何でしょうか。
上田 ●一字で言うなら「覚」でしょうか。目覚める、覚醒する。自分に目覚め、社

会に目覚める一つのきっかけがボランティア。自分に気づき、自分と他者の大切さ、社会の大切さを知ることがボランティアの本質ではないでしょうか。
小山 ●阪神淡路大震災の時には、同志社では（もちろん個別に活動した個人も多くいましたし、独自に活動した学部もありましたが）社会福祉学科の学生が中心になって、全学的に数百名のネットワークを作つて活動しました。大学としての協力はなかったため、学生は研究室の空き部屋を借りて活動しましたが、それは期限付きでした。つまりぼくは逆に、たとえ邪魔をされても実行していくくらいがボランティアではないかと思うのです。大学から「してください」と言われて実践するのはボランティアではない。それは教育体験。教育にはある意味の強制性が含まれると思いますが、そうするとボランティアとは言えない。ボランティアは自発性のあるものです。最初のきっかけは先生からの示唆や誘導だった。もちろんそれは教育として良いことですが、それはボランティアではない。しかし2回目以降、学生が自分の意思でボランテ



小崎 眞氏
女子大学ボランティア活動支援センター長、宗教部長、生活科学部人間生活学科教授

ィアに参加したとき、それはボランティアになる。教育が、ボランティアという花を咲かせたのです。大学側は、もう少し立ちほだからないといけないのではないかと、少しします。

学生ボランティア支援の課題

鎌田 ●そのような本質を損なうことなく学生ボランティアを支援するために、課題があればお願いします。

小崎 ●ボランティアの支援組織ができ上がったことによつて、今まであつたものが活性化することもあれば逆もあり得ます。例えば群馬でのワークキャンプは、何かをしたいと思う学生たちが自主的に参加する活動です。うまく行かないときは挫折し、種々の体験を経てリカバリーす

るという貴重なプロセスが、キャンプの1週間があるとはほぼ完結します。カリキュラムとしてプログラム化されていないからこそ起きることだとも言えます。そのような土壌が同志社教育の中にはあるように思います。中高一貫を含めて考えると、多様な生徒がいて、上へ進学する礼拝でも、キリスト教色を抑えた話をされる先生もいる。だから多様な人が住めるし、考えの違う人もいることを学べる。大学や女子大学にも、多様な学生の動きをあまり制限しないでおこうという暗黙の了解があるのではないか。そこへ文科省や教育現場が一定の旗振りをする、戸惑いが生まれる可能性もあります。

小山 ●組織ができると末端がいきいきしなくなるという欠点はあります。支援室やセンターが全面的に面倒を見てしまうと、「大学がすべてやってくれる」と感じる学生がいる。受け身になってしまう問題点がある。また、「ないところには現れる」という法則があります。支援室ができたことによつて、大学では社会福祉学科の拠点力が弱まりました。どういふことか。以前の被災地支援活動では、

同志社大学をはじめ社会福祉学科のある大学では、そこが拠点となつていました。社会福祉学科のない大学では、多くの見るところ他の学部、例えば法学部が中心でした。ずっと昔の関東大震災の時は、東大の学生達が帝大学生救援団と後に名付けられる活動を早く行つていました。そこに必要があれば、活動する学生がどこからかきつと自然発生するでしょう。この事実を視野に入れておきたい。本来の誰かの役割を支援室が取っているのかもしれないと意識しておくことは、重要だと思えます。その上でぼくたちは過保護になりすぎず、学生たちをボランティア活動へつなげていきたいのです。

小崎 ●女子大学ではボランティアをキーワードとして、座学以外の学びの機会を提供したいと考えています。その上でボランティアの単位化の仕組みを、もちろん単位化の是非を含めて模索中です。群馬でのワークキャンプも単位化はしておらず、学生の自主的な参加のもとで1週間、さまざまな人との出会いを通じてお互いにサポートし合うことの意義を学びます。それらをまとめながら、ボランティア活

動のあり方を慎重に考えている状況です。
小山 ●社会福祉学科の推薦入試の中に、ボランティア等社会的活動をしていることが条件になる制度があります。しかし、その受験資格のためにボランティアをする生徒がいる。時間割にボランティア活動を組み込む高校もある。老人ホームに1回行っただけの経験で受験するような生徒もいますが、それは違うのではないかと。かといって、こちらは回数の問題にするわけでもありませんが。
上田 ●ボランティアという言葉の意味を、「義務」と勘違いしている子もいますね。
小山 ●ぼくたちがボランティアに対して明確な見解を持っていないから、そうなつてしまうのではないのでしょうか。大人たちがしつかりしないといけない。意見は違つても、大きな根底では共有していないといけません。学生のサポートも必要ですが、まず学生に与えたいのはチャンスです。支援室が日常的にきつかけを作り、そのあとで育てる。
上田 ●そういう意味では、大きな災害があつたからボランティアをするのではなく、学生が将来的にどんな形で志を育て

ていけばいいのかを自分でつかむきっかけを、大学が与えることが大切ですね。背中を押す役割です。

学生ボランティア支援への展望

鎌田 ●きつかけがあり、そこから一人ひとりが成長できればいいですね。

上田 ●先ほどもお話に出ましたが、異なる存在と触れ合うことが大切です。ボランティア活動でも、異文化や異なる状況に触れることで人の気持ちを考える姿勢が増幅されていくところに、成長の種がある。**小山** ●そういう状況を意図的に作れたらいいですね。人によつては、それが異質なもののへの共感を育てることにもなるでしょう。ぼくが自宅の大阪市で阪神淡路大震災に遭った時、ニュースで震源地が神戸だと知り、すぐに駆けつけようとして旧知の障がい者施設に電話をかけました。施設長からは「明るくてやる気満々の人に来られたら、利用者も職員も今は気持ちが悪くなっているから受け止められない」と言われました。「ありがとう」と言う元気もないから放つておいてくれと。ボランティアという異質なものを、

被災地側が受け止められなかった。ボランティアをする側は、それをどう乗り越えるかも課題です。現地で拒絶されて傷つき、二度とボランティアをしないと思つてしまう人もいます。学校側にもできることがあるとすれば、生徒や大学生それぞれの成長段階に合わせて必要な支援を行うことでしょうか。

小崎 ●医師であり、ご自身も障がいがある熊谷晋一郎さんによる『ひとりて苦しまないための「痛みの哲学」』という対談集があります。その中で共感というものの暴力性、押し付けに言及しておられます。だから、共感し得ないことを前提に出会ふのだと言つておられる。被災地に、学生はどのような立場で行けばいいのか。それを大学がサポートする態勢ができるといい。

小山 ●ボランティアをする側は当事者にはなれないが、登場人物にはなれる。それを教育側が、学生に対してしっかりとサポートしたいものです。学生のボランティアは、出会いがあり、他者との関わりがあり、ある種のしんどさがあり、それを乗り越えて育つていく。そういう成長をこちら側

が教育に意図的に仕込んでいいのか、または偶然や自発性を待つのか。大学ができるのは、その中間あたりでしょうか。

上田 ●そのニーズを束ねるのが、やはり大学の仕事ではないかと思えます。どうしていいのかわからない学生に対してガイド的な存在となり、入口を示してあげる。今は多様な情報が社会にあふれ、雑音もあるでしょう。その中で学生自身のニーズがどこにあるのかを的確に示してあげられればと思います。

小山 ●道を少し舗装してあげる。そして学生は、行きたい道を選べばいい。

鎌田 ●各校の活動が、同志社全体の一つのネットワークによつてつながると、さらに良いですね。

小山 ●上田先生が最初に紹介された大学のネットワークは、非常にいいですね。社会的な孤立や疎外は福祉にとつて敵です。社会にとつても敵です。そして、ボランティアをする側にも同様の危険性があります。ネットワークやコーディネートは昔からあり、阪神淡路大震災の時も関西の大学の社会福祉系学科がネットワークを作りしました。しかし現地では、ボ



鎌田 伸一氏
同志社中学・高等学校事務長

ランティア団体の間で縄張り争いみたいなことが時に起きていたんですね。例えば大学間で、ボランティアグループ同士の競争とも言えるできごとが起きました。朝一番に起きて水を運ぶ競争もありました。連携のなさがあつたわけです。当時、そんな状況の中で、導入がはじまつたインターネットが役に立ちました。被災地のどの小学校にどの物資があふれているなどの情報を掲示板に投稿し、アクセスした人が自由に見られるようになりました。それまではテレビニュースに映つた避難所ばかりに支援が偏るなどの問題がありました。インターネットの普及によつてリアルタイムに需給調整ができるようになった。それと同じで、同志社の中でバラバラに行われていたこと

がネットワークによつて組織的にできるようになったのは非常に良いことです。

上田 ●災害地などにおけるボランティア活動で最も重要なのは、コーディネート、マッチングだと私も思います。2016年のゴールデンウィークに、同志社の学生と職員の計10名が熊本市の災害ボランティアセンターへ行きました。その時学生たちが行つたのが、資料の整理、現地ニーズの受付、作業確認という、まさにコーディネートの役割でした。また、法人内の小中高でのボランティア活動を大学が知ること、非常に大事な事だと思えます。学生たちの考えや思いを聞くのも大事ですね。

鎌田 ●ここで紹介したボランティアは、ほんの一部の事例であり、その他沢山の実践が埋もれています。ネットワーク拡充のために、今後どのような取り組みが必要でしょうか。

小山 ●各組織の代表者が年に数回集まり、報告会をしてはどうでしょう。今回の座談会をきっかけとして、各セクションの交流が始まるといい。

上田 ●各学校のネットワークを法人全体でつなげていきましよう。

鎌田 ●バラバラに存在していた点が、線がつながり、面になつていく。今回の座談会がきっかけとなり、法人全体のネットワークとして発展していくなら、本当に素晴らしい事だと思えます。

小山 ●ボランティア支援室やセンターのない学校でも、日頃から地道な活動をしていただいている先生に参加していただけたらいい。法人全体のボランティアネットワークの構築は、大学や法人の教育力を高めることにもなると思えます。

鎌田 ●同志社には長くボランティア活動を行つてきた土台がある。それを社会に知つてもらふということですね。

小山 ●何かを新たに始めるといふより、現在の活動を知つてもらふことも重要です。必ずしも変わらなければいけないことはないですが、他校の活動に何かを感じたら、真似をしてもいい。変わつてもいいのです。

上田 ●小中高学生がしていることを知つて、大学生に驚きや気づきが生まれるといいですね。

鎌田 ●この座談会での出会いに感謝いたします。本日はありがとうございました。

同志社の歴史にみるボランティア—災害時の救済活動を中心に—

同志社社史資料センター

同志社大学ボランティア支援室

二〇一六年四月、学生支援センターにボランティア支援室が開設された。支援室の活動は、災害、防災、復興支援、地域連携、子ども、環境、国際といった多岐にわたる分野で実施されており、合わせて講演会等により、ボランティア未経験者への手引きだけでなく、活動の深化を期している。各分野における具体的な活動は支援室が発行する『活動報告書』（同志社大学ボランティア支援室HP参照）を見れば、具体的な実践を確認することができる。

支援室は、その開設目的を、本学が創立以来重視してきたキリスト教に基づく德育の一環として「学生によるボランティア活動を積極的に支援し、学生の自主性、社会性および奉仕の精神を育むと

もに、市民社会の一員としての自覚を促すこと」（上田雅弘「ボランティア支援室の開設にあたって」『同志社大学広報』No. 473、二〇一六年、二頁）としているが、このような目的を持つて実施された活動は、支援室開設以前にも確認できる。近年で、とりわけ国内外で発生した自然災害の被害に対する活動として、比較的に容易に確認できる記録はキリスト教文化センター（以下、センターと略す）の年報である。一例を挙げると、二〇〇八年五月に発生した四川省大地震、ミャンマーを襲ったサイクロン、同年六月に発生した岩手・宮城内陸地震、二〇一一年三月の東日本大震災を対象とした募金活動の記録がある（『二〇〇七—二〇一一年度同志社大学キリスト教文化センター年報』二〇一二年、四七頁）。こうした活動は、センターが募金活動を始

め、学生が協力して実施された。ただし、同種の活動に個人やグループが自主的に取り組んでいる事例はいくつも存在するであろう。そもそもボランティアは「自由な意志で判断し、自らの意欲で参加する人たち」であり、「自らの関心の赴くところにしたがって考え、行動する」人々であるとするれば（田尾雅夫著『ボランティアを支える思想—超高齢化社会とボランティアリズム—』アルヒーフ、二〇〇一年、九—十頁）、その活動の記録は意図しなれば残されることはまずない。同志社の歴史において記録が残る具体的な活動の記録は多くはないが、三つの被災地への支援活動を、同志社におけるボランティアの意義を考える事例として紹介する。

濃尾大地震被災地での医療活動

最初に同志社の創立期の事例として、一八九一年（明治二十四）に発生した濃尾大地震の被災地における医療活動を紹介しておきたい。

一八九一年十月二十八日にマグニチュード八・〇の大地震が岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方を襲った。この直後に同志社病院院長J・C・ベリーら九名が被災地の岐阜県大垣市で医療活動に従事した。その具体的内容は、岡山寧子「災害看護…そのはじめ」（同志社女子大学HP「教員によるコラム」、二〇一四年九月十九日）に詳しい。ただし、当初ベリーらは愛知県での活動を考えていたようである。一八九一年十月三十一日付の愛知県知事宛京都府参事官の書簡には「今回非常之震災ニ依リ負傷セシ者救護之為メ当府下同志社病院雇ドクトルベリー医員看護婦等数名引率シテ御県下へ出張致候ニ付到着之上ハ諸般御指示本人之目的ヲ達セシメラレ候様致度本人之懇囑ニ依リ一書相添ヘシ候也」（新島遺品庫上〇一八八、以下特に明記のない限り同

志社社史資料センター蔵）とある。この書簡から、ベリーが自主的に被災地へ向かったこと、そして、京都府の協力を得て、被災地での医療活動が適切に実施できるように愛知県に配慮を求める準備をしていたことがわかる。

室戸台風と大学文学部 社会事業学専攻学生の活動

次の事例は一九三四年（昭和九）九月二十一日に近畿地方を襲った室戸台風による被災地での活動である。この大型台風は死者二七〇二名、全壊家屋三八七七戸、流水家屋四二七七戸という被害をもたらした（国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所HP「昭和九年（一九三四年）室戸台風」より）。この時に発生した水害に対し、大学文学部社会事業学専攻（一九三一年開設）の学生らによる被災地での援助活動について、同専攻の教員竹中勝男が、報告書「本学社会事業学専攻学生大阪風水害救援状態報告」（一九三四年十月二十三日付、和田琳熊文学部長及び同志社本部宛）を残している。この報告書には被災地への救援決定に至

る経緯が次のように記されている（引用文は原文どおり）。

九月廿一日、近畿一体を襲ひし大風水害は特に大阪府に於て著るしきを知り、同廿九日（土）大阪府災害の一部を視察し、府庁社会課に岸田享君（本学社会事業学専攻卒業生）を訪ひ、詳しく実状を聴取、帰学後和田文学部長に報告したり。十月四日、和田部長より同地救護事業に対し、本学社会事業学専攻生をも参加せしめ、同志社として救護援助に奉仕すると共に、学生の現地実習の訓練に資しては如何との助言あり、他にも同様の意見を聞きたれば、直ちに専攻学生全部に参集を求め之を計りしに、一同熱心に参加を希望したり。依つて学業に差障り無き限度に於て救援に参加を決定し、直ちに三課程学生西尾、武田二名を大阪に派して、大朝社会事業団濱田光雄、小島公子、府庁社会課岸田享、水上隣保館中村透の諸侯に面会、本学々生救援につき意見を徴し適當の場所団体への交渉を依頼す。

学生の従事せし仕事は雑多なるも、主として罹災児童の家族、生計状態の調査、放課後小学生の指導、託児児童の保護、配給、栄養、衛生の指導の如きものにして、各自よく同志社学生として、又、特に社会事業専攻者としての責任を自覚し、奉仕と共に実習精神を失はず、惨害の中心に潜入し、悪臭塵埃不衛生極まる環境を意とせず、よくその救援機能を遂行したり。或ひは

西日本水害が発生した時点で大学では発生直後の「二九日学生部を中心に大学としての救援方策を計画し、学生自治会と連絡をとり、救援に乗り出した」（『同志社社報』No.42、同志社庶務課、一九

竹中の報告によれば、学生らは主に被災した子どもたちへの救援活動に率先して動いていた様子がわかる。なお、こうした学生らの活動資金の一部は、法人本部、大学、専門学校の各教職員と学生有志らが拠出した被災地への義捐金の一部の一五円七〇銭が活動費に充てられた

五三年七月二十五日発行、九頁）として
いるが、実際に被害に対する救援活動を
実施した団体は同志社救援会である。救
援会は学友会が中心となる組織で、一九
五二年（昭和二十七年）九月に組織され
たと考えられる。そもその設立目的は、
「同志社学園生徒・教職員及びこれに関
連あるものの民主主義運動の犠牲者の救
援」（同志社救援会の発足について「一
九五二年九月」）であるが、西日本水害を
受けて最初に救援措置を講じたと法人本
部も認める組織である。しかし、相次い
で発生した南山城水害、台風十三号によ
る京都府下の深刻な被害は、大学の学生
や教職員の生活を直撃する、足下の無視
できない被害となった。そこで、法人本
部が救済会に協力することで一九五三年
十月一日に時限措置で「水害救援対策委
員会」が発足した（「水害救援対策委員
会解散に当りて」一九五四年四月二十七
日）。この委員会では救済会が実施した
罹災学生数の調査などを元に、再試験の
段取りや学費免除といった経済的支援の
具体的方策を協議した。なお、委員会は
年度末の一九五四年（昭和二十九）三月

西日本大水害、南山城水害、
台風十三号と水害対策救援委員会

最後の事例は一九五三年（昭和二十八）に西日本を連続で襲った水害に対する対応である。同年六月二十五日から二十九日にかけて梅雨前線を要因とする集中豪雨が発生し、九州全域と山口県で死者七五九名、全壊家屋三四四一戸、流出家屋二四九三戸という甚大な被害をもたらした西日本水害が発生した（九州大学附属図書館電子展示第四十四回中央図書館貴重文物展観「昭和二十八年大水害写真・資料展」参照）。八月十四日から十五日には寒冷前線の停滞により京都府南部から滋賀県南部、三重県西部が豪雨に見舞われ、京都府下の相楽郡及び綴喜郡で土石流が発生し、堤防が決壊するなどして三三六名の死者と行方不明者を出した南山城水害が発生した（京都府HP「山城の災害記録（昭和二十八年）」より）。その一ヶ月後九月二十四日には台風十三号

おわりに

以上紹介した三つの活動は偶然に残された資料の記録である。当時はボランティアという言葉は存在せず、救護や救援という言葉が代わりに使われていた。こうした言葉の背景には、時代によって、社会背景によって、思想によって、また関わる人たちによって、異なる考え方が根底にあつたことがうかがわれる。一方で、全てのケースにおいて共通となる行動原理も見出せるのではないだろうか。

ボランティア・マインド

国際中学校・高等学校教諭

山本真司
やまもと しんじ

人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

マタイによる福音書7章12節

【はじめに】 マタイによる福音書7章12節は、キリスト教を建学の精神に掲げる学校がボランティア活動に取り組む根拠となる聖書の言葉のひとつです。

ボランティアはいつでも徹底して自発的でなければなりません。また、わたしたちは多様な課題の全てを担うことはできないでしょう。中等教育機関である中学校、高等学校で生徒たちとどのようにボランティア・マインドを育んでいくのか、どのような活動に取り組んでいくことが適切なのでしょうか。

まず、本校のボランティア・サービス部のこれまでの部活動を紹介いたします。

【「Trash Talk」】「そこにゴミが落ちているから拾おうゴミ拾い」という理念で始められた「NPO法人ゴミンゴ・ゴミ拾いネットワーク」の活動に和歌山県の無人島友が島や木津川清掃活動に参加し、環境汚染の実態を知り、学校生活にある問題と結びつけることを意識した時期がありました。



【フェアトレード】 文化祭ではフェアトレード



セフの物品を委託販売してきました。

【京田辺】 京田辺市との関連では、むつみ会総会に出席し、食事給仕などのお手伝いと企画を担当しています。さらに、毎月、バスデーカーをお一人おひとりに送る活動を担っています。あるいは、社旗福祉協議会で実施されている「おもちゃライブラリー」での紙芝居や子供たちとの交流に参加したこともあります。

長期休暇を利用して、「京田辺市子育て広場NPOでふてふ」でのボランティアにも出向いています。

【日々の糧】 次に、日常的なボランティア・マインドの育みについてご説明しましょう。東日本大震災の被害が報じられた日々、礼拝を使って、私が見聞した状況を語った日のことでした。高校生が訪ねてきました。「毎朝の礼拝や報道で大きな被害が出ていることを知って、居ても立ってもいられません。連休を使っても何かボランティアをしたいのですが、どうしていいか教えて下さい。」すぐに私たちの属する日本キリスト教団が責任を持つていた「エマオ」と連絡を取り、保護者の許しを得て、仙台に送り出しました。これは学校の枠組みではなく、被災地にある教会との連携で紹介したものです。

この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。

マタイによる福音書25章10節

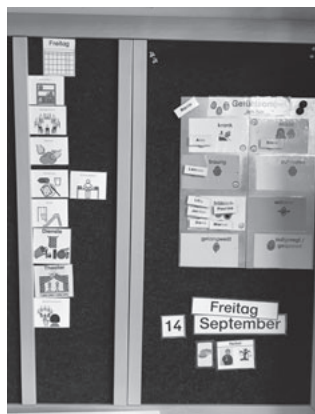
【キリスト教教育】 毎朝実施している

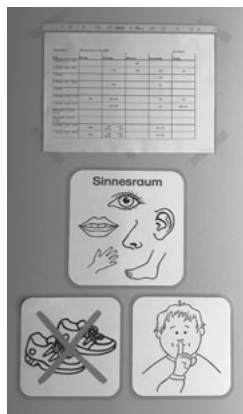
「学校礼拝」は聖書に基づく説教や講話を通して、人生を考える時間であると同時に、信仰が現実の課題にどのように活かされるのかを知る場でもあります。わたしたちは知りえた情報を生徒たちに伝える努力を怠りませんし、助言しますが、具体的に指示を出すことはしません。発信されたことばや熱意を感じた生徒たちが自主的に課題に取り組んでいくことを願っているのです。中学生や高校生にふさわしいボランティアの方法と一緒に探していく作業が「ボランティア・マインド」を育むことになると考えています。

【リソース】 もちろん、校外の方々との連携はボランティア活動には不可欠です。同志社OBが始めた「NPO法人そら」とは授業を通して相互理解を図り、その延長線上で生徒が長期休暇を利用して、お手伝いするなど、永くお付き合いさせていただいています。全国レベルでは公益社団法人日本YWCAとも良い関係を築いてきました。久しぶりに横浜を会場に再開された「YWCA全国高校生カンファレンス」に参加したことを契機に情報の提供を受けることで活動の幅が広が

っています。

【SGH スーパーグローバルハイスクール】 また、2015年に文部科学省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されたことで、これまで以上に多くのリソースを利用することができるようになっています。本校はテーマを「持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム」に設定し、SGHに指定されました。科目名をGUS（Global Understanding Skills）と名付け、高校1年全員を対象に1単位でGUS-Basicを、2年生、3年生継続を前提とする2単位の選択科目としてGUS-Ⅰ、Ⅱを設定、課題研究を実施しています。多岐にわたる学習の中からボラ





ンティア領域としては、「フード・ロス」と「インクルージョン（統合教育）」を取り上げました。

2018年12月に実施した、欧州研修では、ドイツの環境施策のみならず、先進的なインクルージョンをBliefeldのBethel（「ベートル」てんかん、知的障害、精神疾患を持つ人々、高齢者、社会生活に困難を感じる人々、ホームレスの人々などが生活するキリスト教の活動であるディアコニーのひとつ）とFreiburg in BreisgauのHimmelreich（「天国」様々な行き難さを共有する共同体）で「共に生きる」ヒントを得ることができました。**「フードバンクと子ども食堂」** SGH一期生が京田辺市で活動されている「チームせせらgoosマイルダイニング（子ども食堂）」を見学し、すでに学び、生



徒会で実施したことのある「フードバンク」との連携に思い至りました。この着想は「京田辺フードバンク設立準備会」への参画へ継がり、具体的活動実現への糸口を見出しています。

【さんさん山城】 2018年9月に実施した文化祭では、山城就労支援事業所「さんさん山城」の製品を委託販売することができました。地域に繋がるボランティアの道がまた一本開けたのです。こ

の模様は、NHKテレビ「ろうを生きる 難聴を生きる」の冒頭部分に紹介されています。（2018年10月13日放送）**【隣人となることを目指して】** 同志社の指針である聖書の教えにある「善いサマリヤ人」（ルカによる福音書10章25節以下）という有名な記事を常に心に刻むこと、正確な情報をもとに自発的に必要なボランティア活動を展開できる、これが豊かなボランティア・マインドを育む原点であると思うのです。

ここに私はいます、ホームレスの眠る街。ここに私はいます、凍える子の涙にも。

あなたは？

ここにはいます、仕事さがす列の中。

共に私はいます、変革よぶ人々と。

あなたは？

共に食卓かこみ、パンを分かち群れの中。共に私はいます、みことばに生きる人と。

あなたは？

讃美歌21 563番

同志社教育の中でのボランティア

―香里中高ボランティア部の活動から―

本校に勤めて13年、入社当時から「ボランティア部」というクラブの顧問として関わらせていただいている。本稿ではボランティア部の活動内容、教育活動の一環としてのボランティアの捉え方、今後の展望などについてご報告したい。

香里中高ボランティア部の取り組み

釜ヶ崎での炊き出し

本校ボランティア部が最も長く継続的に取り組み続けているのが、釜ヶ崎「いこい食堂」での炊き出しへの参加である。「いこい食堂」は1974年頃から金井愛明牧師（西成教会）によって労働者のために始められた食堂であったが、失業者の増加などに伴い、近年は主に炊き出しを行っておられる。

本校に礼拝奨励に來られた金井牧師の呼びかけに応え、1994年から本校教職員、生徒の炊き出し参加が始まった。現在も1年に3回、長期休暇ごとに、ボランティア部生徒を中心として炊き出しへ参加している。部以外では、6月には中1新入生保護者代表による炊き出し参加、文化祭やクリスマス行事で「献米」を募るなどの定例活動もある。

20年という長期にわたる活動であることから、「香里中高としてのボランティア」と表現することもできる。だが炊き出し参加経験のある生徒、教職員の割合は、実は全校のわず



か1%にも及ばない。「ボランティア部を中心とした活動」であることが、「ボランティア部の活動」という認識を生み、他の生徒、教職員を「無関係」にさせてしまっているのかもしれない。活動の内容や意義を学校全体に周知し、より多くの人に当事者として関わってもらうようなアピールの必要性を感じている。

香里中学校・高等学校教諭

工藤尚子

同志社チャリティーコンサートへの参加

2018年に第13回を迎えた「同志社チャリティーコンサート」で、バザー出店される福祉施設のお手伝いとして参加している。

出店は障がい者支援施設が主体なので、参加するボランティア部生徒は、日頃あまり接する機会の無い「障がい者」、そしてそこに寄り添う職員の方々との出会いを経験することになる。「施設の方たちが準備された品物をより良く売りたい」と、その日限りとはいえ「仲間」として共に働く中で、生徒の心の中にあつた「見えない垣根」のようなものが、徐々に取り去られていく様子が毎年感じられる。

施設訪問

かつては、児童養護施設を訪問して子どもたちの遊び相手をさせてもらう活動をしてきた。しかし入所している子どもたちの精神的な安定を第一に考える上で、本校のような訪問頻度の低いボランティアは却って良くないということで打ち切るようになった。また、部の生徒がハンドベルを練習し、高齢者や障がい者の入

所施設で演奏披露する慰問をしていたこともあったが、一時期部員数が低迷したこともあって現在は行っていない。今は6月の「花の日」に、礼拝献金から調えた花束をお届けすべく、近隣の高齢者施設、福祉作業所をお訪ねしているのみである。現部員からは「ハンドベルをやってみたい」「そういう活動で喜んでくださる方がいるなら練習したい」という声が上がっており、近々復活の兆しもある。

ハンセン病療養所への訪問、研修合宿をしていた時期もあるが、これも部員数低迷と重なって立ち消えになってしまった。だが、差別と人権について考える上で非常に大切な課題であること、キリスト教関連団体などとの関わりも深いことから、できれば数年に一度でも良いので研修や訪問の機会を設けられれば、という希望を持ち続けている。

文化祭でのクッキー販売

近隣の福祉作業所が作るクッキーを大量購入し、秋の文化祭模擬店で販売している。購入単価に数十円上乗せして販売し、その利益を全額献金にする。購入そのものが作業所へのわずかな支援になれ

ばということと、利益分の献金で誰かをお支えできればという思いで継続している活動である。

献金先は毎年部員たちが話し合って決める。この数年は東日本大震災の被災地支援のためにお送りしてきた。今年度は縁あって、校内の文化祭模擬店ではなく近隣の教会バザーに出店させていただいたので、その教会のバザー趣旨にのつとめて、利益分は北海道地震被災地への献金とした。教会の方々との出会いという新しい喜びも与えられ、思い出深い経験となった。

その他の活動

日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)へ使用済み切手や書き損じはがきを送り、海外医療支援に役立てていただくための収集活動を行っている。ただ、活動と結果の繋がりが見えにくいこともあって、あまり力を入れていたとは言えない現状である。部員たちと共に「もう少しこの活動の具体的な内容を学び、私たちがより意欲を持って校内に呼びかけられるようになるう」と、活動活性化への模索を始めている。

大きな自然災害が起こった時には、生徒自治会（生徒会）と連携しながら校内募金活動を随時行ってきた。東日本震災の直後には、街頭での募金活動も行った。また、一部生徒のみではあるが、他団体との共同で被災地訪問にも参加した。

「キリスト教主義学校」での教育の一環として

キリスト教主義学校が教育活動の一環としてボランティアを行う以上、それはキリスト教精神、隣人愛に根差したものであるとして意識される必要があるだろう。単なる「利他」や「道徳的な善行」に留まったとしたらいささかの外れである。

その際、キリスト教の隣人愛における、「主があなたにしてくださったように」という前提を、できるだけ生徒にとつて分かりやすい形で伝えるよう心掛けていく。その上で、「行つてあなたも同じようにしなさい」と主に促されて共に歩み出す者でありたいと願っている。

一般的にボランティアは「自主性」「無償性」「社会性」の要素をもって定義されるようである。「自主性」「無償性」は

教育活動におけるボランティアにも大きな差は無いように思うが、「社会性」においては少し重点が異なる部分があるかと思う。

ボランティア部員たちは活動の中で様々な年齢層、経歴の人たちと出会う。中高生は日頃均質化された集団の中で過ごしがちであるが、部の生徒は活動を通してこれまで出会ってこなかったような立場の人たちと出会い、対話し、協働する経験を得る。「世間にはいろんな人がある、いろんな生き方がある」と実体験を通して知るのは、他者に対する寛容はもちろん、自己肯定感の源泉ともなっている。

また、様々な立場やニーズを持つ人たちについて「知る、学ぶ」ということも、中高生においては大きな意味での「ボランティア」に含まれるのではないかと感じている。活動を通じて見聞を広げること、彼らが社会に向ける眼差しが深くなり、「共生」の意識を大切に生きる一社会人として世に出て行くことが期待される。その意味で、現在の本校ボランティア部においては、活動のみでなく研

にも重きを置くようにしている。一例として、昨夏は京都ライトハウスで点字体験、手引き体験に参加した。

これらに加え、本校ボランティア部では「継続性」を重視している。「継続性」とは頻度や期間の問題だけを指すのではなく、「その経験をどのように大切に温めていくか」ということを含んでいる。ボランティアは基本的に「相手」のい



今後の展望

る活動である。「自分がやりたいから」だけでは、その相手を自己満足の道具とするにもなりかねない。生徒たちは好奇心旺盛で「あれもこれも」となりがちであるが、それが「相手を食い物にする」ことになっていないか、「相手を尊重する」ことに繋がるかどうかと問う視点を投げかけるようにしている。

たとえば表向きの活動としては一回限りであつても、関わった者として忘れず、「祈り続ける」こと。そこから何かを考え始め、自分の内面や仲間との対話を通じてその経験を胸の内で大切に深めていくこと。そうすることで、先の「社会性」とも合わさって、その後の彼らの歩みに自ずと変化が表れてくるだろうと思う。

一方、頻度や期間の「継続」のためには「無理をしない」ということも重要である。そのため、頻度や活動内容については教員主導にせず、生徒たちの力量と意欲を彼ら自身と共に見極めつつ考慮するように自戒している。

「同志社香里中高でのボランティア」について報告するに当たり、「ボランティア部」の活動を主に記してきた。しかし、建学の精神としてのキリスト教主義教育を重視する上では、部活動に留まらず、より多くの生徒、教職員が参加していく形が理想であると考える。今後、ボランティア部の生徒が活動の核やコーディネーターとなるような形で、広く生徒の参加を呼びかけていく働きができればと願っている。

また、同志社には4つの中高がある。各校単独では部員数の変動に左右されるなど、参加人数や活動規模も制限されがちであるが、横の繋がりを活かすことで、人数の確保、活動の幅の広がりが期待できるのではないか。あるいは、幼稚園から大学までの一貫教育の利点を活かし、校種を超えて協働するような取り組みも可能かもしれない。異年齢集団との出会いは、「社会性」の向上という意味でも生徒にとって大変有意義であるように思う。読者の中に「ぜひ一緒に」とご興味

を持ってくださる方があれば、ご一報くださり、生徒へのより良い機会提供のためにお知恵を貸していただければ幸いです。

2019.6.16 (日) 13:00～ バザー開始
14:00～ コンサート開演

出演者として、スタッフとして、観客として、協力の形は様々です。障がいをもつ人たちが置かれている状況を紹介し、支援し、理解し、手をつなぎ、共に歩むことを目的とするこのコンサートに、一人でも多くの方がご協力頂ける事を願っています。

[illegible][illegible]

27

日産事件で司法取引が 使われた理由

本日は「グローバル」という、難しくもあり、やや漠然としたテーマをご一緒に考えていきたいと思っています。日本人は厳密には単一民族ではありませんが、単一民族に近い習慣、価値観、言語を持っています。例えば大きな災害やスポーツでは、他国より非常に強い一致団結感が生まれます。逆に言うと、一つでなければいけないという、目に見えない強制力のようなものがある。それが、グローバルな視点でものを考えるときに邪魔をしているように思います。

日産のカルロス・ゴーン元会長が東京地検特捜部に逮捕されました。今回は最初の発覚から色合いがくるくる変わっていく、不思議な事件です。まずゴーン氏は、メディアも待ち構えている羽田空港に降り立ったところを逮捕されました。日本の検察庁も警察も外国には一切捜査権も逮捕権もないので、日本で逮捕する必要があったからです。まるでドラマのような、捕物的な場面から始まりました。次に司法取引の話が出ました。日産の

レクチャー

第23回 同志社国際主義教育講演会

「グローバル感覚の常識、非常識」

講師 ま やま じん
真山仁氏



ある幹部が特捜部に内部告発したのです。日本の刑事訴訟法に司法取引というルールは、条文としては少し前からありますが、ほんの数カ月前までは実行できませんでした。日本の文化からすると司法取引はずるい、道徳的におかしいという理屈があつたのです。ロッキード事件で外国人から証言を得るのに非常に苦労したのも、司法取引ができなかったことが理由の一つです。その司法取引を使つてゴーン氏を逮捕した。この瞬間、様相は捕物帳から検察物語になりました。一般的に特捜事件は政治家が対象であるにもかかわらず民間企業のトップが対象になったのは、5年で50億円の不正という金額の大きさが理由だったのではないかと言われています。新しい法律を作った時、捜査関係者はいかに派手な事件で最初に施行するかを大事にします。日産事件はそういう意味で非常に好都合だったわけです。

次に出てきたのが日産のクーデターという話でした。日産幹部という個人での告発ではあるが、これは完全に会社ぐるみの告発です。そこに視点が移った。浪花節的な、歌舞伎のような話になりました。

た。通常会社のトップが裏切られて告発されるのは、会社がだめになった時です。バブル崩壊時、日債銀や長銀の頭取は銀行や債権者から訴えられて逮捕されました。しかし日産は絶好調の時に自社のトップを、しかも一時期は倒産寸前まで行った会社を救った人を告発した。そこに非常に大きな矛盾があり、ここからグロ



ーバルな話へと展開していきます。その前にもう一つ、この事件のポイントがあります。ロッキード事件を最前線で捜査した堀田力さんという元検事の方と、日産事件について話す機会がありました。堀田さんは司法取引制度がようやく実現したことには感無量でしたが、日産事件のような形で司法取引を使われるのは非常に残念だと言います。なぜか。本来、司法取引を行う最大の理由は、証言しか証拠がないからです。つまり、対象のほとんどは汚職事件です。ある目的で密かに行われたお金のやりとりを立証するには証言しかありません。しかし日産の場合は、おそらく社内の人が物証を持っていたはずで、時間をかければ簡単に逮捕できたという読みを、堀田さんはしました。私も同感です。なのに捜査を速くやらなければいけない理由があった、一足飛びにゴーン氏を逮捕したかった、だから本来の使い方ではないが司法取引で逮捕したのだろうと、私たちは考えました。この、一足飛びでやりたかったというところに、日産事件の大きな理由があるのではないかと考えました。

日産事件の構図を解く

日産の経営危機はルノーの融資によって救われました。ルノーは日産株の43パーセントを持っているので、日産はほぼ子会社に近い。あと7パーセント強の株をルノーが持てば日産は完全にルノーの子会社になってしまう状態が、10年以上続いてきた。そのルノーが、日産を本気で子会社にしようとしていたようだという話が出てきました。

普通ならこれはルノー対日産という民間企業同士の話ですが、ここで国際色が出てきます。ゴーン氏の逮捕時、日産は西川（さいかわ）社長が記者会見しましたが、ルノーは社長ではなくフランスの財政経済大臣が出てきました。そして「これは冤罪だ」と、日本を非難しました。

なぜフランス政府が出てくるのか。国がルノーの株を持っているからです。ただし十数パーセントしか持っていないので、強い発言権はないはず。それにもかかわらず、国が後ろからルノーを支持している。そこで、フランスという国家がルノーという企業を使ってフランスの国

益を上げようとしているという構図が、徐々に見えてきます。一方で、日産は業績が絶好調の時に、なぜここまで拙速に司法取引をしてゴーン氏を告発したのかという疑問が見えてきます。

ゴーン氏は2018年2月にルノーの会長兼CEOを退任するはずでしたが、本人は統投を望んだらしい。その時にフランスの大統領が、ゴーン氏の任期延長の条件として日産の買収を求めたのではないか。43パーセントの株を持つていれば市場論理からすると買収は簡単ですが、なかなかそれが進まなかった。M&Aで本当に大切なのは、買収した後です。もしここでルノーが日産を買ってしまうと敵対的買収になるので、極端に言えば日産の技術者が全部辞めてしまう可能性があった。あるいは一部の事業を、他の会社売り払うかもしれない。一例があります。日産はルノーが大株主になった時に、宇宙開発の会社を売却しています。長年温めてきた事業でしたが国益のため石川島播磨重工に売ったのです。こういう逃げ道が買収の場合はある。だからルノーとしては友好的に買収したい。しかし日産は、友好的に買収されるつもりは

ない。現在ルノーは全然儲かっているからです。このあたりから、フランス政府が前のめりになったのではないか。

フランスに見る 国家資本主義

しかし自動車業界は今後10年くらいで、百年、二百年規模の大改革が始まるって言われています。ヨーロッパはCO₂を排出する自動車はやめる方向です。ドイツはその最先端にいます。エンジン音で車ファンを魅了するボルシエまでもが電気自動車を作り、ガソリン車をやめると断言している。しかしフランスは、その対応が遅れていた。このままではルノーは絶対に敗北します。しかし、フランスが死んでも負けたくない国はドイツです。だからフランスは、三菱の電気自動車技術を吸収した日産が欲しい。

経済畑の人から見れば、ビジネスへの国家介入は邪道です。今までそういうことをするのは、表向きは中国とロシアだけでした。フランスには昔ジスカール・デスタンという大統領がいましたが、彼は外国へ行くたびにフランスの一流企業の社長を連れていったものです。外交交



渉の合間に兵器や車売り込む。外交交渉と交換にビジネスの話することもあった。そのやり方を今、フランスは加速させています。民間企業の株を買ってコントロールし始めた。エール・フランスがそうです。以前は世界一だったアレヴァという原発メーカーも、民間企業から国営企業になりました。

中華思想を持つ国が世界に3つあると言われます。中国とアメリカ、もう一つはフランスです。ヨーロッパ諸国中、フランスは別格に自意識過剰です。食糧もエネルギー・発電も、自給率は100%を超えています。電力も輸出している。他のヨーロッパ諸国が太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギー事業を展開していますが、あれはバックアップに原発があるからできることです。そのバックアップをアレヴァが行っていた。フランスは明日戦争が起ころうと、絶対に自分たちの国は守るという気質を持っていると思います。知らんふりをしながら、いつも相手の喉元に匕首を突きつけて、欲しいものはちゃんと手に入れるのがフランスです。

日本人はフランス人の、そういう発想を知りません。日産事件で日本では西川社長が出てきて、フランスでは政治家が出てきた。ちょうどフランスにいた世耕経済産業大臣は「日産問題に日本政府は関与しない」と言った。私はここに、日産があの段階でゴーン氏を告発した答えのヒントがあると思いました。

M&Aをされる日は近いと、日産は分

て株安にしてたくさん買っておき、上があれば売り払うということを遠慮なくやっている。今の日本企業はそこが弱点です。これもグローバル化が原因です。

本当に優良企業になれば世界中からお金が集まるし、あるいは外国の投資家が多いということは、投資家の多い国へ進出してほしいと協力を頼まれることもあります。しかし日本は、そういうことをしたことがない。株主は株主であり、企業経営は企業が行うものと考えています。その考えは本当の意味で、企業の利益になつていません。今回の日産の問題をモデルとし、世界が弱肉強食の国家資本主義になつていく中で今後また外国政府が日本企業を買収しようとしたとき、日本政府はどう対応すべきなのかを皆で考えないといけない。さらに、こういう情報をもつと国内に知らせないといけない。政府だけでなく民間企業も、「グローバルとは何だろう」と考えないといけないのです。

「違い」を理解するために 必要な態度

「グローバル」とは何でしょうか。英

かつていた。こういう場合企業は、普通なら経産省あるいは官邸に相談します。

しかし官邸は、自分たちで何とかしろと言ったのではないか。ただし逐一の報告は求めた。だから政府はあの構図を全部知っていたのです。日産の株が暴落しなかったのも、経産省が証券会社や国内の投資家などに何気なく情報を流したからだだと思います。国内向けには「政府が知っている情報だから」と言っておきながら、外国では「あれは民業だから政府は関係ない」と言う。そうすると日産は自分の会社を守るために、恩人に刃を突きつけねばならなくなつた。それがあの告発になつたのではないのでしょうか。

日本に欠けている 視点と危機感

日産事件のようなことがまた明日起きても不思議ではない時代になりました。我々は、その危機感を認識することが大切なのです。今回、フランスが国家資本主義を露骨に見せました。EUになつて得をしたのは、おそらくドイツだけです。フランスは追い詰められています。もはやフェアな外交とか、民業に国家が関与

語力ではありません。言葉は入り口にすぎません。私は英語があまり得意ではありませんが、外国に行つても通訳がきちんと仕事をしてくれば良い取材ができます。重要なのはコミュニケーション力です。この人たちは何を考えていま自分の前にいるかを考えられること、彼らとの違和感や違いを汲み取る力を持つことが、グローバルなのです。

私は海外ミステリーが大好きで、特にイギリスのミステリーや陰謀小説は何百冊と読んできました。だからイギリス的な感覚がよく分かります。イギリスの小説では、アメリカやフランスを悪く書いています。ただし、その背景もちゃんと書いてある。何冊も読んでみると、日本人と向こうの人間との価値観の違いが分かってくる。小説を読むだけで、それぞれの国の特徴が吸収できます。

同じように相手との違いを理解することは、たつた一つの問題を克服できれば、誰にでもできるようになります。必要なのは「聴く力」、リテラシーです。聴くことによって、相手との価値観の違いが分かります。

聴く力とは何か。上手な聴き手が行つ

しないとかいう時代は終わりました。アメリカも今、露骨な国家資本主義を見せています。おそらくインドもやるでしょうし、これから新興国は皆、自分たちの国益を上げようと思つています。

しかし日本は、国益とは税収だと思つている人が多い。この勘違いの影響は大きい。国益とは日本の企業の売り上げの総額です。この国益に、外の国家が手を伸ばしている。フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ、イスラエルは、諜報機関が企業の調査をしています。産業スパイです。その最たるものがフランスです。国益を得るための国家干渉がそこまで来ているのに、日本だけが旧来の資本主義を信じている。日産事件で日本はフランス政府に「内政干渉だ」と抗議しないといけないかつてのに、黙っています。

黙つたままだと、何が起きるのか。日本企業に手を出しても日本政府は助けないと、他国は考えます。日本の優良企業が今後、盛んに外国企業に買われるかもしれない。現在、日本の一流企業のおそらく半数以上で、株主は外資の方が多いです。外国の投資家たちは、株が下があればすぐに売る。あるいはわざと仕掛け

ているのは「黙っている」ことです。人は沈黙を嫌がるからしやべります。こちらはずなずかない。すると相手は不安になるから、もつとしゃべる。こちらは知りたいのを我慢して、まだうなずかない。そうして相手がどんどんしゃべるようになる。こちらから質問を切り出す。向こうは既に「聴いてほしいモード」になつているから、こちらの質問に対して的確に答えるようになる。これがコミュニケーションです。日本人がもつと学ばないといけない課題です。最近の若い人たちは非常に弁が立ちますが、他人の話を聴きません。今の日本人の、最大の欠点です。

もう一つ、「話せば分かる」という考え方をやめましょう。話せば分かると思つてるのは、世界で日本人だけです。「分からない」から話すのです。例えばアメリカでは民族、宗教、出身国、収入が違うから、各自の抱く願望、欲望、怒り、喜びも違います。だからそれぞれの代表者が、絶対に譲れない点や譲歩して合意できる点を探すためにコミュニケーションをとるのです。

ところが日本では「話せば分かるだろ

う」と言う。共通するものを求めて話す。氣質的に、我々は常に一つでありたいと思っているからです。合意できないものはないと考える単一社会だから、その中でそれなりに忖度しながらバランスよく生きていきたいと考えている。対して世界の他の国では、理不尽を何回も克服して戦っている。そこが違っていると感じます。

本当に大事なものは、価値観はバラバラだけど、仕方ないから何となく一つになつて同じテーブルにつこうという姿勢です。それが世界の常識です。

アイデンティティを深く知ろう

多くの日本人にもう一つ共通するのは、「我々は何者であるか」が言えないことです。日本人はどういう人ですかと問われると「おとなしく、勤勉で平和的」と言う。本当でしょうか。そのような抽象的なことは本来、アイデンティティでも

何でもないはず。日本人は争いが嫌いだから、長いものに巻かれる。だからバブルがはじけたらアメリカにみんな持つていかれてしまった、というような経験は何回もする。おそらく日産はもつと持つていかれます。でも長いものには巻かれるのだからいいよねと、思えるかどうかです。

自分たちが何者かを知るために、グローバルに行動したり、いろんな人に会ったりするのはすごく大事です。無自覚のうちに我々が常識だと思っていることが世界の常識だと気づくからです。我々の特徴を知らない、世界との差は見えない。だから常に、我々は何者なのだろう、なぜこういうことに国民は怒っているのか、または怒らないのかを考え、根っこのあるものを見るようにしたいものです。

例えば、京都とはどんな街なのか。

「京都ってこういう街だよ」と言うのと、多くの人は「そうですね」と同意するでしょう。私は最近、取材されることも増えてきましたが、若い記者の中には頻繁に「分かります」と相槌を打つ人がいます。しかしそこは「分かります」ではな

く、「なるほど」と言わないといけない。言葉を間違えている。彼は善意から「分かります」と言っているのですが、この言葉は、日本人の不安の象徴なのです。「分かります」と言うのは寄り添っていることだと、多くの人が思っています。しかし本当に寄り添うには、一度相手を追い詰めないといけないのです。追い詰



めておいて、「でもそれはあなたの本意ではないのでしょ」と言うから、相手は「この人は分かってくれる」と思える。日本人は、言葉がものすごく「いい人」すぎます。外国人は初対面でも「それは私には分からないよ、異文化だから」と、平気で言います。

アメリカ人にとっての「強欲は善である」とは

最後にもう一つ、日本人の苦手なものがあります。「道徳」です。宗教の代わりに日本では道徳観が大事になります。ルノーの日産買収でも、「フランスともある国がそこまでやるのか」「人としてどうなのか」という言葉が出そうになる。以前、私は『グリード』という小説を書きました。「ハゲタカ」シリーズの主人公鷲津が、リーマンショック時にアメリカの巨大企業を買うというストーリーです。これを書いた時、私はウォール街に取材に行きました。リーマンショックから3年ほど経った時です。

取材のテーマは一つ。「Greed is good (強欲は善である)」という言葉です。「ウォール街」という映画で主人公のカ



リスマ的な投資家が言ったのが、この言葉です。それがウォール街の強さの象徴であることを描いた映画だったので、私は「あれは嘘だった、失敗だった」「我々は欲をかきすぎてリーマンショックを起こした」と言わせたくて、現地で約40人に取材しました。しかし私の目論見は全員から否定されました。彼らは、やはり

「Greed is good」と言うのです。「Greed はアメリカン・ドリームの原点だ」と言います。

もう一つ尋ねました。聖書では七つの大罪の中にgreedがある。greedを戒めなさいと書いてある。だから本当は「Greed is bad」ではないのかと。すると「聖書の意味を分かっているのか」と言われました。「なぜですか」「戒めるなんてできないから書いてあるんだ」。なるほど、さすがアメリカだと腑に落ちました。

勝者は道徳など語らないのです。道徳は、敗者が負け惜しみで口にするものであるとすら彼らは言います。「もしかしてgreedはモチベーションという意味なのか」と聞くと、「さつきからそう言っているだろう」と言われました。彼らは、生き残るためには何でもする。自分たちの代表がだめになっても、ちゃんと次のgreedな人間が行動する。そういう人とアメリカでは生きていけないのだと言います。それが結果的にアメリカの強さと呼んでいるのだと。私はその時、自分は知っているつもりだったが、全然アメリカのことを知らなかったと思いました。アメリカでは道徳や感情より、現実

の方が大事なのです。

一人ひとりに必要な 「世界を見る目」

アメリカにとつては、自国のやつていることはアメリカのためにやつていることであるから、すべてが正しい。日本にとつて正しいかどうかは、彼らはあずかり知らない。でも日本が自国の正しさを訴えるのなら、それは聴こうという態度です。ところが日本は今まで一度もアメリカに対して、自国の正しさを訴えてこなかった。おそらくヨーロッパにも訴えてこなかった。日本の外交は何をやっているのだろうと思います。

だから外国から向こうのルールを示されると、戸惑いながらも日本は「これが国際協調だから」と思つてしまう。しかし協調とは本来、戦つた後に生まれるものです。日本人は戦う前に協調モードに走る。こうした我々の価値観や常識は、おそらく世界では正反對です。となると、外国の言うことに懸命に耳を傾け、彼らの価値観や正しさはどこにあるのかを知らない、その国のことは理解できない。ビジネスもできません。

さらに、政治とビジネスはもはや同一に動いていることを我々は覚悟しないといけない時代が来ています。だからこそ、グローバルを学ぶことは大事です。今までみたいに「国際派になりたい」というためのものではなく、生き抜くために、グローバルに価値観の違いを知る。これがおそらく21世紀前半の、それぞれの国民の幸せを左右します。

ゴーン氏逮捕から3日目に、事件の背景を話してほしいとTV番組への出演を依頼されました。しかし今日お話ししたようなことを全部言おうとすると、「過激だから」と阻止されました。時間的な都合もあつたのでしょうか、現代の世界の動きをメディアが言えなくなつたこと、私は非常に残念でした。だとすると、一般の人がもつと世界で起きていることによく耳を澄ませて、自分は本当に彼らを分かつているのだろうかという目を持つていただくことが重要です。そうすれば、おそらく非常にグローバル的な視野が広がるのではないかと思います。

紫塩館

(同志社香里)



同志社香里創立60周年記念事業の一環で、2011年3月竣工、同年4月より利用開始の特別教室棟です。地上三階、地下一階（倉庫）の建物です。

紫塩館という名称は、生徒、保護者、同窓生等から広く募りました。結果、多数の候補名が寄せられ、キリスト教学校としてふさわしい聖書に基づくもの、あるいは校祖新島襄に由来する名称を、ということで選定し、聖書から「塩」を引くことによりキリスト教主義教育の一つの姿を示しそれを新島襄の創立した同志社で実現するということで、「紫」と「塩」を組み合わせたものとなりました。

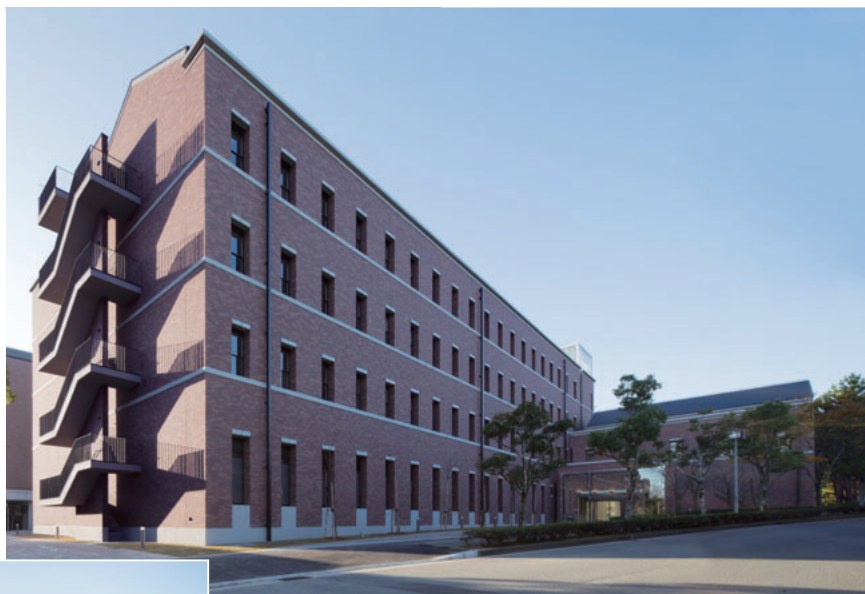
左記校舎案内図のとおり、美術科、技術科、家庭科、音楽科、理科の各教科教室があり、生徒たちの探究心と感性が満ちあふれている建物です。窓を可能な限り大きくとることで外光を取り入れ、自然光の明るさで授業をおこなえるように工夫しております。

校舎はコの字型をしており、中心には巨大な楠が鎮座しております。

樹木の多い学園を作り、生徒たちが自然に直接触れてもらうことを願って、建築前からあつた楠を残しております。

また、紫塩館エントランス横の前庭には同志社香里創立60周年記念事業募金に賛同いただいた方々の銘板を設置しております。





訪知館は、2012年度に策定された複合的研究施設基本構想に基づき、京田辺キャンパスにおいて既存の学部・研究科が関連する学問分野で密接に連携し、「身体・生命、先端技術、情報、文理融合」に係る研究を一層深化させるための施設の整備を目的として、2014年11月に竣工しました。

地上4階建て、延床面積が5,000㎡を超える同館は、医心館、恵喜館をはじめとする理系研究棟に囲まれた場所に位置し、館内は脳科学研究科及び博士課程リーディングプログラム（グローバル・リソース・マネジメント）の拠点スペース並びに全学共用の実験・研究スペースで構成されています。全学共用の実験・研究エリアには、プロジェクト型研究室、スタートアップ型研究室の他、動物飼育室・実験室を設け特殊実験も実施可能とするなど、プロジェクト型研究や萌芽的研究を支援できる仕様となっています。

また、2階および3階には研究者の交流スペースであるラウンジを設けるなど、快適な研究環境と交流空間を創出し、高機能性と柔軟性を合わせ持つ研究環境となっており、本学大学院教育の充実、研究力の向上に資する施設として大いに活用されています。

館名は、旧約聖書の箴言2章10節「知恵があなたの心を訪れ、知識が魂の喜びとなり」に由来しています。

新島襄肖像画



同志社には、多くの肖像画が所蔵されているが、なかでも創立者・新島襄を描いた肖像画が最も多く、15枚保存されていることが確認されている。しかし、その全てが新島永眠後に描かれたもので、数多くの肖像画が残されているとはいえず、いわゆる「寿像」はない。また、それらの肖像画や、肖像画のモデルとなった写真から作られた複製が額装され、至るところに飾られている。

2018年夏、今出川キャンパスにあるハリス理化学館同志社ギャラリーにおいて、「新島襄のかお」という展覧会を開催し、企画展示室に同志社所蔵の新島襄肖像画12枚を一堂に集めて展示した。大学で開催した企画展としては初めて「若年層向け」にターゲットを絞り、法人諸学校の園児、児童、生徒へも周知を行った結果、夏休み中の会期であったことから親子連れの来場者が目立つ

た。その会期中、展示と並行して「新島襄のかお総選挙」というイベントを開催し、出陳した12枚の肖像画の人気投票を行った。その結果、1位となったのが、今回紹介する肖像画である。

この肖像画は、新島ゆかりのグレイス教会（アメリカ・ヴァーモント州ラットランド）から、1984年に同志社へと寄贈されたものである。1874年4月14日、アメリカン・ボード日本ミッシヨンの準宣教師（Corresponding Member）に任命された新島は、9月19日にボストンのマウント・ヴァーノン教会で按手を受けて正式に牧師となり、名実ともに宣教師となった。日本に派遣される直前、ボードの年次総会で挨拶に立った新島は、日本にキリスト教主義の教育機関を設立するための資金援助を求めるアピールを行い、5,000ドルの募金の約束を得た。いわゆる「ラットランド演説」である。この演説が行われた場所がラットランドのグレイス教会（※演説当時の正式名称はラットランド東教区会衆派教会）で、当時の地域紙にも新島の演説の要約が掲載されている。

グレイス教会では、新島永眠（1890年1月23日）から半年後の7月に「日本を記念する礼拝」が行われ、その場でこの肖像画が教会へと寄贈された。作者は不詳

だが、教会員であると言われている。当時は教会内に掲げられていたのであろうが、時代を経てお蔵入りしてしまったようである。1976年6月27日にグレイス教会で「同志社記念礼拝」が行われ、同志社関係者を迎えるにあたって、再発見されたこの作品が再び飾られるようになった。その後さらに1983年夏の海外キャンプで同志社の学生らが教会を訪れたのを機に、当時のD・デイン牧師から、同志社に贈られることとなった。現在、肖像画の原本は新島遺品庫で保管されている。

作者がこの作品のモデルとしたのは、1884年3月に京都の写真館で撮影した写真で、41歳（満年齢）当時の新島の姿である。この年の4月から翌年12月まで、新島は静養と大学設立募金活動の目的で、2度目の外遊へと出かけた。長期の不在前に撮影した写真の裏には、*"My dear wife your H. Joseph"* とサインがあり、うち一枚を妻・八重に贈っていることが分かる。

グレイス教会で新島が寄附約束を得た5,000ドルは、同志社設立の原資となった。同志社の「萌芽の地」とも言えるラットランドのグレイス教会で大切にされてきた肖像画が、現在は同志社で高く評価され、最も普及している肖像画となつて受け継がれているのである。

『イタリアの黒死病関係史料集』 が日本翻訳家協会から 「翻訳特別賞」を受賞

同志社大学名誉教授 石坂尚武

日本ではあまり研究されていない黒死病の歴史。この史料集が「日本翻訳家協会」（ユネスコ傘下の国際翻訳家連盟に加盟）に注目され、二〇一八年度の「日本翻訳出版文化賞翻訳特別賞」を与えられてびつくりしています。史料はイタリアの14〜15世紀の年代記、手紙、法令、遺言書など、ラテン語の史料40点、イタリア語の史料11点、計51点です。助かったのは、今出川図書館のレファレンス・カウンターの親切な館員の方々、また、さすが同志社大学、その神学部が所蔵する豊かな蔵書！また今出川図書館の司書だった有能な中村恵美子さんには、イタリアのサン・ジミニャーノの史料館に何度も手紙を出して戴き、議会の議決書のマイクロフィルムを入手してもらいました（イタリア在住の娘も催促の電話でプッシュしてくれました）。また、私の在外研修先のミラノ大学のマウリー教授からはローディの司教館の遺言書の写しを手

渡してもらいました。日常的には中世史の井上雅夫先生に気軽に色々相談ができました。毎年、入手したばかりの黒死病関係の史料と悪戦苦闘。そして、文学部の紀要雑誌『人文学』など）にこのこと翻訳と研究成果を掲載——その数42点。特にフィレンツェの『死者台帳』の場合は、165頁にもなりました。研究環境としてとても幸いだったことは、研究推進のための「大学の紀要」を「卒業論文」と勘違いして「規定原稿枚数を守れ」などと、場違いなことを言うような人がこのリベラルな同志社大学に一人もいなかったこと。また研究支援課の青山弘和さんには、多難な出版作業への深い理解のおかげで、3年間に3冊（本書は2冊目）続けて出版ができたこと（3冊合わせると1888頁）について、その機構と共に、深く感謝しています。中世史の大黒俊二氏に800頁にもなる本書を謹呈すると、こんな手紙を戴きました―

「重量1・3kg（量ってみました!）の大著を手にして、これまでの研究の重みを感じました」。

何より本書の成立の生命線は北イタリアのコモの音楽博物館長の故アレックスサンドロ・ピッキさんの存在でした。助言を得るために13年間、毎年欠かさずコモに通いましたが、このピッキさんとの「かけがえのない思い出」（本書「あとがき」）は、涙なしには振り返りません。

しばしば神は、人生においてすばらしい出会いを用意してくれませんが、この出会いこそは、その類い希なものひとつにはかならないと思っています。



左が本書を出版した刀水書房の
中村文江社長、右が日本翻訳家協会
の平野裕理事長

生命医科学部10周年

生命医科学部 准教授 小林耕太

去る2018年11月3日、生命医科学部が開設10周年を迎えたことを祝し、記念講演会「生命医科学部のあゆみと今後の展望」が京田辺校地恵道館において開催された。出席者は、学部教員、在学生にとどまらず、大学総長、学長、京田辺市長や卒業生およびご父母など約500名にのぼった。講演会は二部構成で、第一部は、日本医療研究開発機構理事長・末松誠氏による「AIによるがんの診断に向けて…人智を超える技術の力、技術を超える信頼の力」、続いて、奈良県立医科大学理事長・学長細井裕司氏が「MBT医学を基礎とするまちづくり・産業創生をめざして」をテーマに講じ、最後は本学部特別客員教授石浦章一氏による「君が生命医科学部でできること」と題した講話で幕を閉じた。それらに通底するテーマは、現在および未来の医療技術が直面する課題と、学生としてそれらに望んでいく方針や態度で

ある。「生命医科学」は、学問の名称として決して一般的なものではない。この10年間は新米教員であった私に限らず、多くの学部教員にとって「生命医科学」とは何かを模索する期間であったともいえる。今回の公演で語られた内容の多くは、生命医科学部が目標としている「医学と工学の融合」が今後一層重要になっていくことを示しており、本学部の成功が、日本の将来をも照らすものであることを予見させた。

第二部は、学部・研究科卒業生6名と教員とが登壇し、大学での学びが、社会に出た彼・彼女らの現在にどのように役立っているかについて語られた。印象的だったのが、「知識や技能より、研究活動を通じて主体的に研究課題に取り込む態度や、ゼミや学会発表を通じて学んだ自分の意見を伝えるための考え方が、実社会で役立つ」と語る卒業生が多かった



こと。学部・研究科の教育が、着実な成果を上げつつあることを示す良い機会であった。卒業生が社会で活躍し始めた現在、彼らの成長に負けぬよう、来たる10年間は生命医科学部も社会に定着していく期間になることを期す講演会ともなった。

法人内中学校・高等学校職員 合同研修会とPLAYFUL MINDSET —女子大学上田信行ゼミ生によるワークショップ協力—

中学校・高等学校事務長 鎌田伸一

第7回目となる法人内中高職員合同研修会が2018・7・28(土)午後、良心館RY306教室にて実施されました。この研修会は2012年より、法人事務部長、法人事務室、総長、理事長先生はじめ、各部長の皆様にもご協力頂き、中高職員の企画、運営による研修会です。各中高から研修委員が選ばれ、10回程の事前打合せを経て、当日の研修会を迎えました。八田総長・理事長先生より『第4次産業革命と新たな学校職員像』と題して、基調講演を頂き、その後、女子大学現代社会学部現代こども学科上田信行ゼミの皆様にもご協力頂き、有意義なワークショップを持つ事ができました。

AIやロボットにより象徴される第4次産業革命を迎え、社会の変革の波は、教育界にも大きな影響を及ぼし、教育改革が、今まさに進みつつある中、あらかじめ回答が用意されていた時代は終わり、新たな学びのかたちを想像、創造されていく時代に突入していきます。これまでの

FIXED MINDSET (固定的な考え方、思い込み、心の姿勢)では対応できなくなり、GROWTH MINDSET (成長的、改革的)な姿勢が必要な時代となり、更に、PLAYFUL MINDSET (前向きで楽しく取り組む)姿勢が重要となります。ワークショップでは、LEGOの高積みを通して、目標を明確にし、仲間と協同しながら取り組む姿勢、失敗しても折れず、更に挑戦していく姿勢などを学ぶ事ができました。

また、CUBEという一つの道具(材料)を使い、仕事の充実感、やりがい、問題点、改善点、などを話し合い、仕事に対する「気づき」、向き合う姿勢を検証する事ができました。また、ゼミ生によるスクライビングを通してのパネルディスカッション



など、様々なワークショップにより、新たな学びを体験する事ができました。

ネガティブなルーチンワークに陥りがちな事務の仕事、単にこなすだけではなく、ポジティブで創造的な仕事に変えていく姿勢こそ大切である事を、学生の皆さんから学ぶことができました。

(2018年度中高研修委員…谷村仁(国際)、秋葉建吾(女子)、田村奈保子(香里)、古城郷(中高))

中高ともに関西吹奏楽
コンクールで金賞受賞！

香里中学校・高等学校教諭 藤本千佳

2018年8月20日に第68回関西吹奏楽コンクールが行われ、本校吹奏楽部は中高それぞれで金賞を受賞しました。猛暑の中、練習に励んだ甲斐があり、保護者・生徒ともに喜びを隠せませんでした。本校は、一校30人までの小編成で出場しています。近年は小編成で出場する学校も増えており、関西吹奏楽コンクールへの出場も、地区大会、大阪府吹奏楽コンクールを勝ち抜いて、ようやくかなったものでした。

吹奏楽部は中高合わせて60人余りで、日頃は中高合同で練習し、学校行事等で演奏を披露しています。ただ、夏のコンクールは中高別々に出場しています。2014年以降、毎年中学または高校で関西出場がかない、2015年は中高ともに関西出場が実現しました。2018年は、事情により外部指導者に中高それぞれ指揮を依頼しました。中学はサクソフォン奏者の佐々田剛先生、高校はクラリネ

ット奏者で、2015年にも中学の指揮をお願いした井谷一美先生です。お二人とも非常に熱意ある指導をしてくださいました。また、生徒達も非常に意欲的でした。とりわけ2015年に関西銀賞だった中学生が、3年経って高校生となり、前回は上回る結果を出そうと積極的でした。その結果、29人ながら、「歌劇『トゥーランドット』より」を圧倒的な迫力で演奏しました。中学生も過去2年間地区大会で敗退したため、何としても上位の成績を目指そうと佐々田先生の指示を守って練習に取り組みました。「エンジェル・イン・ザ・ダーク」という、中学生には難しい曲を26人で見事に演奏しました。



中学生の集合写真



高校生の演奏

自分たちの活動に誇りを持つだけでなく、自主的に考えて練習するスタイルを大事にし、周囲を思いやり感謝を忘れないでほしいと願っています。そのことがクラブ活動の大きな財産として心に残るだろうと考えています。コンクールが終わった今、生徒達は、多くの来場者に喜んでいただけるような音楽を目指し、一層練習に励んでいます。

第42回全国高等学校
総合文化祭(信州総文祭)

日本音楽部門出場(箏曲クラブ)

女子中学校・高等学校教諭 羽倉由記

葡萄で彩られた塩尻駅に降り立つと、「とうとうここまでやってきた」と感慨深いものがありました。憧れだった全国大会、夢の舞台への第一歩です。

2018年8月10～11日、長野県塩尻市において開催された全国高等学校総合文化祭の日本音楽部門に、本校箏曲クラブが出場しました。前年の京都府高等学校総合文化祭で最優秀校に選ばれて、全国大会への切符を手に入れました。京都府代表に選ばれてから9ヶ月間、月曜日と木曜日の週2回という限られた練習時間の中で、仲間とともに真剣に箏に向き合い、腕を磨いてきました。

全国大会出場のため長野県を訪れたのは、高校3年生と2年生の13名です。1日目のリハーサルを無事に終え、2日目は松本市観光に出かけました。松本城を訪れ、歴史を感じながら、城下町歩きを楽しみました。3日目の8月10日、いよいよ本番です。全国から集結

した強豪校の前に、緊張が走りまします。後輩達手作りの応援カードに書かれたメッセージを心の支えにし、円陣を組み、気合いを入れて本番に臨みます。そして、大舞台で、心をついに合わせ、美しい音色を奏でることができました。長い期間かけて練習を重ね、本番で露できたクラブ員の笑顔は、明るく輝いていました。初めての全国大会は、仲間との絆を深め、一つのことを成し遂げたという達成感を得る、素晴らしい経験となりました。

全国大会では、アルプスの山々に囲まれた自然の美しさ、郷土の素材や料理をふんだんに使った工夫を凝らした大会弁当など、長野県の自然や文化との出会いが心に刻まれました。また、箏、三味線、尺八など、日本の伝統楽器の演奏に取り組み、これまで大切に継承されてきた文化を未来へ残そうとする高校生の姿に、希望と期待を

感じました。本校箏曲クラブも、これからも和やかなクラブの雰囲気大切にしつつ箏の演奏に取り組み、日本音楽の魅力を広く発信していきたいと思っています。



同志社国際学院初等部 オープンスクール ～PYP Exhibition 2019～

同志社国際学院校長 太田哲男

同志社国際学院初等部は、同志社の掲げる3つの理念「キリスト教主義、自由主義、国際主義」の国際主義の旗頭となる学校として開校し、バイリンガル教育と世界標準的教育プログラム「国際バカロレア（IB）のPYP（Primary Years Programme：初等教育プログラム）」に準拠した教育課程を実施して参りましたが、この度、国際バカロレア機構より、正式にPYP認定校としての通知をいただきました。これは、学校教育法に定めるいわゆる一条校としての小学校では、関西以西で初の認定となります。

このような特色ある本校の教育活動の一環として、従来おこなってあります6年生によるPYP Exhibitionが、折しも、1月29日（火）30日（水）に開催されました。本校保護者に加え、2日間で合計300名近くの教育関係者・受験希望者を迎え、6年生がこれまでの探究活動の集大成として各自が



追究を重ね、まとめた内容をプレゼンテーションという形で発表しました。来場者の方と近い距離で対話形式のコミュニケーションをとることを目標に、自分のトピックを深く説明しつつ、参加者からいただく質問にも自分の言葉で答えていました。

同志社国際学院初等部としては、



今後バイリンガル教育と探究型学習を通して、主体的に自分の課題を深く探究していく国際的な視野を持つ児童を育てていきたいと思っています。

ユースエンタプライズ トレードフェア2018にて 特別賞を受賞

女子大学学芸学部教授 関口英里

2018年12月2日（日）に開催された「ユースエンタプライズトレードフェア2018」にて、「プロジェクトブランニング演習I・II」の履修生が『特別賞』を受賞しました。

本フェアは、経済産業省、厚生労働省、文部科学省のほか、京都府や京都市なども後援し、アントレプレナーシップ（起業家的行動能力）を発揮できる若者の育成を目的に毎年開催されます。学芸学部情報メディア学科（2018年度入学生よりメディア創造学科に名称変更）の科目「プロジェクトブランニング演習I・II」からも毎年出展を行っており、特別賞を受賞した「HIKAnaker」チームは、京田辺市キララ商店街を盛り上げるユニークなイベント開催など、地域コミュニティへの高い貢献と企画の創造性が評価されました。

「プロジェクトブランニング演習I・II」の履修生は、春学期と秋学期の1年をかけて、仮想企業

や仮想NPOなどのプロジェクトチームを結成して実存企業や団体とのコラボレーションによる商品開発やイベント等の企画アイデアを提案し、社会に貢献できるプロジェクトを実践的に進めます。

2018年度は、情報メディア学科2・3年次生の22名が履修。4つのプロジェクトチームにわかれ、「HIKAnaker」以外の3チームも、地域理解や人的交流の促進、商業活性化に焦点をあてた活動を展開し、それぞれ、シルバー世代を役者に仕立てたお化け屋敷の開催、子供たちによる地元になんだクイズの謎解きイベント、京田辺市のご当地キャラ「キララちゃん」のグッズ開発・販売などを行いました。

「HIKAnaker」チームは、集客効果を狙い、キララ商店街で小学生以下がモデルを務めるファッションショー



ーをプロデュース。「子供たちにキラキラ輝く思い出を京田辺で作ってもらい、地元を誇りを持ち、いつまでも京田辺で暮らしたい、いったん市外に出て行っても大好きな京田辺に戻ってきたいと思える体験を提供する」という願いが多くの皆様に伝わったことが、今回の受賞をもたらしました。

表1 パラリンピアン認知度と競技正答率

氏名	知っている	聞いたことがある	知らない	競技名	正答率
国枝 慎吾	20.9	13.1	66.0	車いすテニス	79.2
上地 結衣	6.8	8.0	85.2	車いすテニス	56.4
成田 真由美	5.4	5.1	89.5	水泳	60.8
一ノ瀬 メイ	1.9	6.4	91.7	水泳	32.4
辻 沙絵	2.4	3.7	93.9	陸上競技	40.8

パラリンピアン認知度

リオパラリンピックに出場した競技者の認知度ならびに実施競技の正答率（前出調査）は表1のとおりです。国枝選手が34・0％で最上位となっており、2014年の同調査結果（19・1％）と比べ上昇していますが、他の競技者については前回調査と比べ認知度の上昇はほとんど

障害者スポーツへのまなざし

かわにし まさひろ
河西 正博

(大学スポーツ健康科学部助教)

「パラリンピック」を知っていますか？

東京2020オリンピック・パラリンピック開催まで2年を切り、各種メディアでのパラリンピックならびに各種障害者スポーツに関わる報道量は年々増加しており、それらの認知度は高まってきていると言われています。日本財団パラリンピック研究会の調査（2014）によれば、日本国民のパラリンピックの認知度は98・2％にのぼっており、アメリカ（71・1％）や韓国（74・7％）よりも高値となっており、「世界一パラリンピックを知っている国」と言っても過言ではありません。

では、皆さんはパラリンピックの競技種目（2020東京大会：22種目）、競技者の障害種別（肢体不自由・視覚障害・知的障害）、具体的な競技者の名前等をどの程度思い浮かべることができるでしょうか。以下ではパラリンピックのテレビ放送ならびに競技者の認知度に関わる調査から、パラリンピックや障害者スポーツに対してどのようなまなざしが向けられているのかについて考えていきたいと思います。

パラリンピックとテレビ放送

ヤマハ発動機スポーツ振興財団の調査（2017）によれば、2016年に開催されたリオパラリンピックの地上波テ

と見られず、低い値となっています。また、各競技者の実施競技の正答率を見ていくと、こちらは国枝選手が最上位（79・2％）となっており、他の選手の正答率にはかなりばらつきが見られます。これらの結果と前述の放送量増加の関係性について考えると、メディアへの露出の増加が単純にパラリンピアンや実施競技の認知度向上につながるものではなく、「どのように伝えるか」という質的側面も重要であると言えるのではないのでしょうか。

障害者スポーツを「見る（観る）」から「やる」「支える」へ

パラリンピックの観戦状況について、「テレビで中継番組を観た」が22・3％から30・3％、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」が6・5％から13・0％と前回調査から増加している一方で、観戦種目については、15・2％が「わからない」と回答しており（前出調査）、「受動的」に観戦している側面も示唆されています。また、観戦後の意識変容については、障害者スポーツを「直接観戦したい」（26・3％）、「体験したい」（21・2％）、「ボランティアをしたい」（21・0％）と低い値に留まっており、メディアを通じた観戦が具体的な活動レベルでの態度変容に必ずしもつながっていないことが明らかになっています。

テレビ放送時間は、前2大会に比べて大幅に増加しており、中でも大会開催後にメダリストを中心に情報番組やバラエティ番組等に出演する機会が大幅に増加したことが特徴的です（図1参照）。

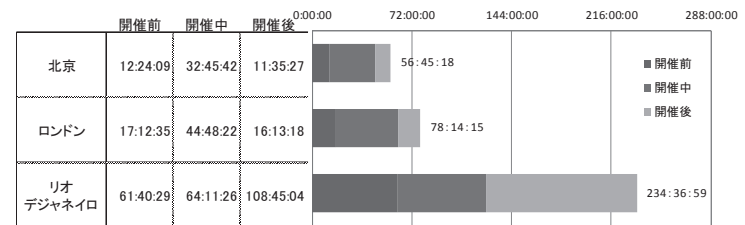


図1 過去3大会のテレビ放送時間

2020東京パラリンピックの開催は、障害当事者のスポーツ活動の推進のみならず、障害のない人々が障害者スポーツに触れ、理解を深めるまたとない機会となります。このチャンスを活かすためにも、発信する情報量を単純に増やしていくだけではなく、一方で、「障害者スポーツとは何なのか、誰のためのものなのか」「障害者スポーツをどのように伝えていくのか」といった根本的な議論も必要ではないでしょうか。

参考資料

日本財団パラリンピック研究会（2014）「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心調査結果報告」
http://para.tokyo/doc/survey201411_2.pdf
 （2018年11月23日アクセス）
 ヤマハ発動機スポーツ振興財団（2017）「障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究報告書―テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して―」
http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/008/pdf/ymfs-report_20170331p_full.pdf（2018年11月23日アクセス）

良心教育としての ソーシャル・イノベーション学



いまさと しげる
今里 滋
(大学政策学部教授)

「不純な動機」から研究者へ

九州大学法学部に入學したのが一九六九年。東大入試がなかった年である。大学に入るとすぐに「無期限バリスト」。一年ほど体育会蹴球部で運動三昧だったのが、やがて学生運動三昧に。機動隊との市街戦に敗れ、虜囚となり労働と読書で三年を過ごした。「同期」に新左翼のスターだった同志社出身の故・藤本敏夫氏がいた。幸い復学でき、教養部の語学の試験を受けた。獄中で英独仏の原書を読み込んでいたせいか、どの試験もほぼ満点だった。教師が言った。「君、学者になつたらどうだ。自由に生きていけるぞ。」「自由」という言葉が胸に響いた。数年して、憲法・行政法・行政学を往還して「西南学派」を領導する手島孝教授の大学院の門を叩き、比較的研究者が少ない行政学を専攻した。

アメリカ行政学研究

修士課程で取り組んだのは「アメリカ大統領府の発展と行政理論」。大統領職(Presidency)が拡大強化されたFDRからニクソンまでの歴史をトップ・マネジメントの視点から理論的に分析した。

そこで米国とのつながりができ、フルブライト留学生試験を受け、合格した。妻と共に向かったのはニューヨーク州北部にあるシラキュース大学のマックスウェル行政大学院。行政学・行政教育制度の濫觴とも言えるこの学舎でアメリカ行政学の耆宿・ワルドー(Dwight Waldo)教授の教えを乞うためだった。大学院に入ってから始めたラグビーを地元のクラブ・チームで継続できたのも嬉しかった。一九五〇年代に入つて、客観的にその妥当性を検証できない価値や規範を扱う学問は厳密な意味で科学ではないという行動論革命の波が社会科学に押し寄せた。ところが、一九六〇年代に入ると、アメリカ社会は、ベトナム戦争であるとか公民権運動といった政治問題が噴出する。このような問題は、当然に国家の存在意義や社会的公平とは何かといった価値的・規範的な争点を含んでいた。そこで、もつと社会の現実的課題に立ち向かう、新しい社会科学を打ち立てようという流れが出てきた。脱行動論革命である。わが国では「行政国家」等の名著で知られるワルドー教授の学問的問いは「行政学とは何か?」彼はその問いに「新行政学(New Public Administration)」運動を創

始することでの革命の旗手となった。私は、その潮流の洗礼を受け、五十万字に及ぶ博士論文「行政学方法論の一考察——アメリカ行政学における『一体性の危機』を手懸りとして」で法学博士号を取得した。社会改革というミッションが先にあつて、行政学がそれを理論的に後付けていった、つまり行政学はソーシャル・イノベーション学であつたというのがこの論文の新知見であつた。

市民公益事業の実践

一九八五年に一児の親となり、身近な生活社会を見る目が変わつた。子連れの母親、高齢者、障がい者が生きづらい社会環境。車優先の道路。住民を隷属させるタテ割り・無責任の行政システム。安心安全が危殆に瀕した食農の世界。怒りがこみあげた。社会問題を解説はできても解決できない社会科学にどのような存在意義があるのか?そう自問し、どれほど微力・非力であろうと社会的課題を解決する仮説を提示し、自らの行動的実践によつてその課題解決が可能であることを実証していく研究アプローチを自ら採ることとした。まず、自らの住区であり九州大学本部がある福岡市東区箱崎で、

消防団を含む数々の地域住民組織に参加するほか、地域のしがらみに縛られないNPO(非営利組織)管崎まちづくり放談会を有志で創立することから始めた。「酒を飲んだときの約束は守る」という放談会の不文律を守り、酒席で放談した提案が自己責任で次々と実現されていった。私自身が「三千万円出す!」と酔つて放言した勢いでできた民設公共スペース兼コミュニティ・レストラン「管崎公会堂」、まちなか劇場(株)テアトルはこぎき、日本初のカーシェアリング・ネットワーク、一般市民が有機農業を学ぶ「上山田農業学校」等々。果ては、要らぬ公共事業Ⅱ新福岡空港計画を粉砕するため、この弱小NPOが私を候補者としてほとんどの既成政党を敵に回して福岡県知事選挙を闘った。二〇〇三年四月のことである。

ソーシャル・イノベーション学へ

空港計画を白紙に追い込んだものの選挙に敗れた私は幸いにも同志社大学に職を得た。やがて文科省「平成一七年度魅力ある大学院教育イニシアチブ」事業に「ソーシャル・イノベーション・コース(SIC)」設立を掲げ採択された。「社会をリアルに変えていく行動的研究者を育成

する」というのがその趣旨である。このコースは、自ら社会的課題を発見しそれを解決する方策を自ら提示し自ら実践してその効果を実証するカリキュラムを特徴とする。「国家有為の人材を育成する」ことを目的とする旧帝大・九州大学と異なり、同志社大学の建学の精神は「良心教育」。私は同志社大学歌の「我等、我等、地に生きん」が好きである。世のため人のため、誰に知られずとも自らの信念を実践する人材育成こそ、新島襄先生の悲願ではなかったろうか。SICは良心教育を体現する教育研究の実践と自負している。すでにSICからは百名を超える修了生が巣立ち、社会変革の第一線で活躍している。一例を挙げれば、同志社大原農場で学んだ修了生の活躍で大原は若い就農者があふれる有機農業の里に変貌した。二〇一八年一月には日本ソーシャル・イノベーション学会も始動。残された二年間をディシプリンとしてのソーシャル・イノベーション学の確立に捧げていきたい。

生徒が主体的・対話的になる
授業への試みさかたに たかふみ
酒谷 貴史

(香里中学校・高等学校教諭)

はじめに

次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」がポイントに挙げられており、文部科学省は「アクティブラーニングの視点からの授業改善」を推進しています。私自身、大学生の頃から英国や米国の物理教育を研究してきたこともあり、十年以上にわたって日本の教育におけるアクティブラーニング型の授業を模索してきました。特に最近では、ICT機器が急速な発展を遂げてきたことで、自らの考えを発表したり、それに対して全体で討論したりすることが容易になってきました。

本校でも2016年度から生徒が使え、iPadを100台(50台×2セット)整備し、今年度の二期からは全ての普通教室に電子黒板機能がついたプロジェクトアークターが整備されたこともあり、それらを各教員が授業で使用しています。その100台のうち、10台のiPadを高校一年生の物理基礎の授業で使用するために、物理実験室に常設させてもらい、物理の生徒実験や生徒の意見集約、全体討論に活用させてもらいました。

高校物理の現状

多くの人にとって、高校の物理授業を振り返ってみると、「難しい」「わからない」「楽しくない」という授業だったのではないのでしょうか。また、多くの進学校では講義中心の授業が展開され、生徒実験よりも問題演習の解説が中心だったのではないかと思います。私自身も、高校の物理の授業ではほとんど実験は行わず、問題演習を行う日々でした。また、2009年に行われた全国規模の調査においても、高校生の時に生徒実験を経験しなかった大学生が調査対象の約2割もあり、高校の物理教育において実験が軽視されているように思います。しかしながら、17世紀にガリレオ・ガリレイが自然現象に対して、「仮説を立て、実験を行い、検証した」ことが科学のほんじまりだと考えられています。このことから、やはり物理の授業において生徒が主体的に実験を行い、自分たちの意見を活発に話し合える環境が大切だと考え、今年度の高校一年生で行った物理基礎の授業を組み立てました。

ICT機器を実験道具に用いた生徒実験

物理基礎の授業では、はじめに物体の運動について学習します。これまで、物体の運動に関する実験では『打点タイマー』という測定器具を用いて生徒実験を行ってきました。この実験道具は60年前に作られ、直線の運動(等速や加速、減速)を解析するうえで、当時とても画期的な実験道具でした。しかしながら、打点タイマーを用いた実験では運動を解析することに時間がかかりすぎ、測定した物体の運動について50分の授業で考察する時間がとれないという問題点がありました。そのため、どうしても多くの学校ではこの分野の生徒実験の回数が少なく、講義中心の授業展開となっていました。

そこで、今年度の授業では実験の測定時間を短縮するために、米国PASCO社が新たに開発した「センサー内蔵型の力学台車」を10台購入し、生徒実験で使いました。このセンサー内蔵型の力学台車は、iPadにインストールされている専用のアプリケーションと連動しており、測定したデータはBluetooth通信

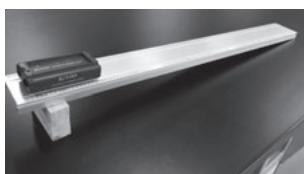
によって瞬時にグラフ化されて画面に映し出されます。そのため、実験の測定と解析にかかる時間が10分ほどに短縮することができ、残りの時間を物体の運動に関する予想や結果についての話し合い、学習単元の板書、授業のまとめの時間に充てることができました。また、自分たちの予想と異なる結果が出たときには、自分たちで実験を付け加えて行うことで、その結果の妥当性を確認する班もありました。生徒たちは時間と道具が与えられれば、実験に対して受動的な態度で取り組むのではなく、主体的な態度で取り組むのだと改めて感じました。

さらに、iPadにインストールされているロイロノートスクールというアプリケーションを用いて、生徒たちの予想や考えを集約して全体に提示をしました。これまでの授業では、生徒の意見を掘り起こそうと質問しても、生徒たちはなかなか発言してくれずに時間だけが過ぎてしまうことがよくありました。しかしながら、班での話し合いを行わせた後で、班の考えとして集約すると簡単に考えを聞き出すことができました。その集約された予想や考えに対して、私自身がファ

シリテーターの役割を行い、クラス全体の話し合いを活発に行わせることができました。

おわりに

センサー内蔵型の力学台車を実験で用いることで、運動学の授業のおおよそ3分の1の時間を生徒実験に充てることができました。今後は、生徒たち自身が実験を考えていくような授業展開をもつと考え、より生徒が主体的に実験を行い、生徒自ら規則性や法則性を考えいけるような授業展開にしたいと思っています。



(写真1)センサー内蔵型の力学台車



(写真2)授業風景

シェイクスピア研究の
現在つかだ ゆういち
塚田 雄一
(大学文学部准教授)

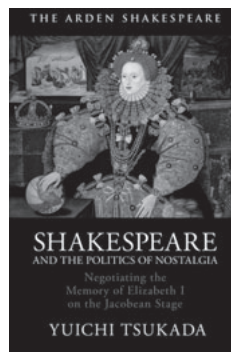
唆に富んだ作品論も少なくありませんが、往々にして、これらの作品研究からはシェイクスピアの時代に実際にどのような劇が作られ、受容されていたかという重要な視点が欠けていました。

シェイクスピアは自身の想像力や靈感のみに頼って作品を書いていたわけではありません。たとえば、シェイクスピアは観客の関心を常に意識しており、各作品を執筆する際に、当時流行していた詩、ロマンス、歴史書、他の劇作家たちの先行ヒット作を積極的に活用したり、人々の間で話題となっていた政治的・社会的な出来事を念頭において題材を選んでいきます。現代ではベストセラー小説や話題となった事件がしばしば映画化・テレビドラマ化されますが、シェイクスピアの仕事ぶりを現代のハリウッド映画やテレビドラマの脚本家兼演出家のそれに比することもできるでしょう。シェイクスピアが観客の嗜好や社会の潮流に敏感に応答した集団芸術の担い手であったことをふまえてその作品を紐解くと、作品がこれまでとは違った表情を見せ始め、さらに豊かな作品解釈の可能性が立ち現れます。

はじめに

イギリス文学・文化、特にシェイクスピア劇を研究しています。東京大学、東京大学大学院で学んだ後、ロンドン大学キングズ・カレッジに三年間留学して博士号（PhD）を取得しました。二〇一六年四月より、同志社大学文学部英文学科の専任教員として今出川校地の教壇に立っています。

二〇一九年七月、単著 *Shakespeare and the Politics of Nostalgia* が Arden Shakespeare (Bloomsbury) から出版されます。Arden Shakespeare は長い伝統をもつレーベルですが、ここから単著が出る日本人は私が初めてとのこと。世界各地の読者からのフィードバックを今から楽しみにしています。

Arden Shakespeare (Bloomsbury)
から刊行される単著

しかし、こうしたシェイクスピアの執筆過程や上演時の社会的背景が注目されるようになったのは、一九八〇年以降のことです。その意味でも、現在世界で行われているシェイクスピア作品研究の歴史はまだ浅いのです。

これまでの私の研究について

私が特に関心をもってきたのは、ジェイムズ一世の時代に書かれたシェイクスピアの一連の劇作品です。一六〇三年にイングランドの君主エリザベス一世が崩御し、スコットランド王ジェイムズ六世がジェイムズ一世として、イングランド王に即位しました。しかし、ジェイムズの政策への反発や懐疑もあり、治世開始まもなく、エリザベス女王へのノスタルジアという一大社会現象があらゆる階層の人々の間に拡がりました。詩、パンフレット、説教、議会の演説など、さまざまな言説がエリザベスを回顧する場となりました。当時の文化形成の中心地であった大衆劇場でもエリザベスを主人公とした劇作品が人気を集めました。

前述したように、シェイクスピアは人

シェイクスピア研究の歴史は意外と浅い？

シェイクスピア研究と聞いて「四〇〇年以上も前に登場したシェイクスピア作品は世界で長年研究されてきた。もう新たに研究することは何もないのでは？」という素朴な疑問をもつ方もいるかもしれません。実際、これまでにシェイクスピア作品について膨大な点数の研究書や論文が出版されています。

しかし、研究し尽くされているどころか、彼の作品についてまだわからないことが無数にあります。知の増大に比例して、無知の領域も増えていくもので、シェイクスピア劇のように複雑で奥深い世界は、知れば知るほど、無知であることさえ理解していなかったことが新たに現れてくるのです。

二〇世紀後半にいたるまでのシェイクスピア研究には、シェイクスピアの劇作品を、孤高の芸術家が当時の社会や文化の影響を受けることなく個人の天才的な想像力と靈感をもって生み出した独創的な創造物と見なし、社会的・文化的背景から切り離して分析する作品研究が多く見られました。現在もよく参照される示

気劇作家として同時代の観客の関心や社会の風潮にきわめて敏感でしたが、彼の劇作品については、この一大社会現象と切り離されて考えられてきました。エリザベスを回顧した膨大なノスタルジア言説を読み解く中で、シェイクスピア作品との密接な繋がりを発見していた私は、前掲の単著において、シェイクスピアとノスタルジア現象の複雑な関係を提示・分析し、『マクベス』や『アントニーとクレオパトラ』をはじめとしたジェイムズ朝劇作品について、これまでになかった新しい解釈を展開しました。

もちろん、私のシェイクスピア作品論はあくまで一つの新たな読みの可能性を提示するものにすぎず、これらの作品に対する唯一の解釈を掲げるものではありません。また、研究成果を単著の形で世界に向けて発表することによって、私のこれまでの研究が完結するわけでもありません。むしろ、本を完成させたことで、もつと知りたいこと、研究したいことが次々に出てきています。

私にとっても、シェイクスピア研究はまだ始まったばかりなのです。

カルチャー・インフラと
しての学校をめざしていぐち かずゆき
井口 和之
(中学校・高等学校教諭)

学びのスタイルの多様化と、「拒否」という意思表示をする子ども

これまで本校の「教科センター方式」をいかした学び(『同志社時報』133号)や、「ソーシヤル・デザイン」という、学外へ発信していくことを目指した学び(『同志社時報』140号)について述べる機会をいただいた。今回はそうした学びを継続していくうちに気づかされた、子どもたちの学びに対する「困り感」にふれながら、それを乗り越えていく新たな学校空間のあり方を模索する授業について紹介したい。

数年前から「アクティブ・ラーニング(以下AL)」という言葉がもてはやされているが、そうした時流の影響もあって子どもたちにとって学びのスタイルは多様化し、さまざまなバリエーションが生まれている。しだいに子どもたち自身が自分にとって「しつくりくる学び方」というものを意識するようになってきた。

グループ学習や発表など、いわゆるAL的授業に対して、他者との交流や対話を苦手と感じている子どもたちが、その「困り感」となんとか折り合いをつけないが、やりすごすのではなく、明確な「拒否」を示すようになってきた。そういう子どもたちを無視して「コミュニケーション・

スキルが大事だ」とか、その子どもたちの成長のペースに配慮せず授業として強制していくと、その子どもたちは耐え切れなくなってしまう。どうすれば「拒否」という意思表示してる子どもたちの気持ちをくんだ授業ができるか。

輪の外にいることの安心感
居心地の良い授業

写真1は私が担任したクラスの子たちが、学園祭について話し合っている風景である。話し合いの方法など何も言わなかったが、机・椅子をどけ、昼食もとらずにこのような情景をつくっていた。そこであることに気づいた。

左上の丸の部分にいる子どもたちは、いわゆる活発に意見を言うタイプではない。

しかし「拒否」を示しているわけでもない。クラスの中にいて、なんとなくその場の空気を共有しながら、



写真1

あるべきか。子どもたちが円になって座っているときに、その雰囲気や空気を共有しながらも、ちよつと離れたところで安心していられる場所がある、つまり「開かれていて」と同時に、一人や、少数とのほうが落ち着くという子にとつては「閉じている」ような、相反する要素が両立している空間が必要だということだ。

新築やリフォームではなく、必要に応じて常に変化し続ける、そういう要素を教室空間に持たせたい。だからといって家具というわけでもない。家具というと、空間そのものを変化させるには影響力が小さい。そこで、建築と家具の両方の要素を兼ね備えたような、いわゆる「アーキファニチャー」というような概念を取り入れたい。

これからの新しい学びのスタイルに合ったアーキファニチャーを、企業に協力を得ながら、中学生と一緒に作ってみようという授業を現在進めている。

学習の場である教室とは別にくつろげる空間を作っていくような従来の学校建築では、「この空間では勉強」「この空間ではくつろぎ」というような目的別の空間を作ることになる。それは子どもたちからすれば、空間ごとに使い方が決まっ

ていて自分の主体的な利用ができるものではない。このような目的別の空間というのでは、先ほど述べたような、学びに対する「拒否」を意思表示した子どもたちのニーズに応えられない。授業中の、学びの空間そのものにくつろぎのスペースが必要なのである。教室の空間自体が集中とくつろぎの両方を同時に実現しなければならぬということだ。

今、某大手企業と子どもたちとで、そのような「開く」と「閉じる」を両立させる空間づくりをめざして特別授業を展開している。目的別の固定的な空間をたくさん作るのではなく、テレビ番組の撮影スタジオのように、ある時は個別学習に、ある時はプレゼンに、ある時はくつろぎに……というように気軽に可変的に使える空間として教室を作り直そうというものである。

先日、いよいよ実物大の試作品が届けられた。2020年の商品発売を目標に、新たな価値観を発信するカルチャー・インフラとしての学校を目指して、子どもたちとともにがんばっている。



写真2・3 学びの空間づくりのワークショップ

アーキファニチャー
企業とコラボする授業から

すこし引いたポジションにいる。そんな彼らをクラスの他のメンバーもやわらかく受けとめている。この空気感、緩やかな一体感が大切なのではないかと思う。授業中に居心地が悪かったり、居場所がないと感じている子どもたちがいる。その現実を無視して「ALだから意見を出そう」だの、「心を開いて」みんなで楽しく、明るく、元気に!というのは、思春期の子どもたちの抱えている心の問題や、成長のスピードの違いなど、当たり前にあるそれぞれの子どもたちの違いや個性を無視したことになる。

グループ活動や発表がない従来型の、黒板に何か書いて教員が一方的に説明するスタイルのほうが良いと言いつつ、子どもたちさえいる。だからといって、そうした授業スタイルが子どもたちの個性を尊重してきたわけではない。ただ「棚上げ」にしていただけなのだ。教育改革が進められていく中で、もう一度丁寧に個性の違いを許容しつつ、「居心地が良く、すべての子どもたちに居場所があつて、安心できる学校空間」というものをつくっていくことが必要なのだ。

では、具体的にどういった学校空間で

Songs, Culture and
Communityフェリシティ グリーンランド
Felicity Greenland
(大学グローバル地域文化学部)

どのくらいの方が、歌や歌う経験から学んだことについて考えたことがあるだろうか？子どもの頃は歌う機会が多くあり、歌うことで、言葉や数えること、動物の鳴き真似、人と人のつきあい、社会について学ぶ。また、無意識にリズム、呼吸の持続方法、皆との協調性、声のコントロール、母国語の正確な発音等も学ぶ。

コミュニケーション・イングリッシュ授業等において、歌や歌うことを組み込むことは、楽しみながらリスニング&スピーキングスキルの上達にとっても有効である。歌を歌うという行為は、リスニング、発音、構文など学ぶという明らかなもの以外に、脳への隠れた効果があるところまで読んだことがある。エンドルフィン、セロトニン、そしてオキシトシンなどの不安を少なくしたり、リラックスを助ける効果があり、またグループの中では、お互いに気心を解放し、絆を作ったりする事を助ける神経伝達物質をリリースする作用があるようだ。これらは第二言語を学ぶ学生と教師の隔たりを短くすることにも有益である。

また、歌にはたくさんさんの地理、歴史ま

たは社会的内容が込められており、言語学習の目的だけではなく、文化的バックグラウンドの要素としての重要性にも気がついた。イギリス文化を伝えるために、ブリティッシュ・ソングを選び研究を始めた。同時期にふと思ったのは、日本のことを日本の伝統音楽を通して学べるだろうか、ということであった。そして、これが私の新しい研究を始めるきっかけとなった。

最初は、明治唱歌など、英語にも日本語にもある歌を調べてみた。明治維新以降のグローバル化により、世界の歌が日本語に訳され、書き直されてきた。この中で、日本語版と英語版の同じ歌を比べることで、日本人の考え方が明らかになり、日本人と西洋人の思考方法の違いからくる歌詞表現の難しさも露わになった。

2009年、私は歌の集い“Singing Around The Table”を始めた。ポピュラーな英語と日本語の歌を歌い、その後、このグループを基にウクレレのセッショングループであるKyoto Ukulele ClubとKansai Shanty Crew (シー・シャンティー 舟歌の会)を立ち上げた。これらの中で、参加者の異なった歌とアクティ

ヴィティーへの反応について調べることができた。参加者が一緒に、各々の母国語で歌を歌うことの有益さと難しさについても研究することができた。また、これらの会でレパートリーとなった曲が、50年代中頃からじまった歌声喫茶や、ウディ・ガスリーやピート・シーガーなど、アメリカを機に起こったフォークソング・リバイバル期のフォークソングについて興味を持ち、研究するきっかけとなった。さらに、社会史、政治史、日本の国内外との関係などについても学ぶことができた。当然、こういったムーブメントは日本にも影響があったため、高石ともや、中川五郎などの政治的背景の歌についても必然的に研究の対象となった。日本に来る前から、シー・シャンティ(船上、陸上での船乗り、漁師などの作業歌。仕事をしながら体で覚える歌であり初心者やお互い見知らぬ人々によって多人数の多国籍グループで歌われたため繰り返し部分が多く、歌の内容を知らずとも歌に参加できる)については深い興味があった。日本にもシー・シャンティはないものかと思っていると、すぐに伝統漁漁にかかわる歌の集成を見つけた。

これらの民謡は江戸時代のもので、私にとって歌うことは難しいものではあるが、たくさんさんの興味深い内容が含まれているように思えた。日本全土で歌われた鯨歌をさらに解析することにより、これらは土着の捕鯨に関連しており、現代の議論の論題になる南海洋での調査捕鯨以前のものの人々の生活維持のための必然的な漁であることを知った。この研究により地理学的に伝統捕鯨がおこなわれた集落の場所の地図を起し、当時の地域別の捕獲した鯨の種類、歌にある共通の歌詞が促す共同作業の存在、当時の捕鯨への考え方、技術等が解るようになった。学会でこの内容について数回発表したところ、大変好評で、江戸期の鯨漁に関わる歌を含む日本の古来捕鯨の態様と実践についての論文掲載も数誌から受理してもらった。

昨年より、同志社大学IIAで“Song Anthropology”というコースを受け持せていただいているが、このコースでは歌について色々な国籍の学生と価値観や学生の各出身地の親しみある歌の意味合い、広い意味での問題提起の役割など、歌の世界の情報媒体としての認識も論議して

いる。また、学生たちはリサーチプロジェクトSoundscapeと題して身近な環境の音源を学習してもらっている。イギリスからはシャンティ歌手のアラン・ウィットブレッド氏が来校して世界の交易の歴史、シー・シャンティを通しての世界旅行ワークショップを行なった。彼は12人のラゲッド・ロビン・モリス・ダンスーズをつれて当大学に訪れ、ブリティッシュ伝統音楽とモリスダンスを紹介してくれた。

文学者、人文学者、また民族音楽学者は、歌の文化への重要な役割を認識しているが、歌自体は必ずしもその文化を正確に、または文字通り表現するものではない。歌は理想主義的、ロマンチック、ノスタルジックになりがちで、時には現実以上に清く、イノセントである。例えば、悲しみを伝える英語の歌はたくさんあるが、むしろ歌そのものは楽しいに歌われる。こういった思考への反映が文化の一つなのである。歌や歌う行為がどう人々が自己または社会を表現し、何を学び、そして、どのように人から人への絆が広がるか?ということに深い思いを込めて研究を続けていきたいと思う。

「研究者は薬剤師でなくても良いが、薬剤師は研究者でなければならない」をコンセプトに据えた研究と教育の実践



もり た くにひこ
森田 邦彦
(女子大学薬学部教授)

はじめに

標題の言葉は、筆者が医療現場に身を置いていた当時、薬学部からの実習生や卒後の研修生に対して投げかけてきたフレーズです。目の前の患者さんの容態推移に潜む薬物療法にまつわる問題点を察知して、その解決策を懸命に模索し提案する姿。薬剤師に求められるのはこのような「まさに臨床の場での研究者としての姿勢である」と説いてきました。

2005年4月、130年の伝統を誇る同志社女子大学の京田辺キャンパスに産声をあげたばかりの薬学部に縁あつて赴任した筆者は、狭義には「臨床での薬剤の適正使用に向けた科学的根拠に基づく投与設計法の構築」を、また広義には「薬剤師の臨床的な活動の礎となるコミュニケーション能力の醸成」を、それぞれコンセプトとした臨床薬理学研究室を立ち上げました。

臨床での薬剤の適正使用に向けた科学的根拠に基づく投与設計法の構築

筆者の研究室では、この課題のもとに全国のいくつかの医療機関と共同研究を展開しています。チームの根本にあるのは、「患者体内での薬物動態 (pharmacokinetics, PK) と薬力学

(pharmacodynamics, PD) の関係 (PK/PD) 解析」で、一つは重症患者さんに投与される機会の多い抗菌薬などの感染症治療薬を、もう一つは造血幹細胞移植の前処置に欠かせないいくつかの抗悪性腫瘍薬を、それぞれ対象にこれらの患者個別化投与設計法の構築を目指しています。意外に思われるでしょうが、薬ごとに定められている「1回○mgを1日○回服用」といった「用法用量」が科学的根拠に乏しい単なる経験則のみで決められていて、結果的に患者さんの多くに満足な薬効が期待できなかったり、逆に副作用に見舞われるケースが、実は少なくないのです。

図に示すように、一般に薬物がある用法用量で投与すると患者さんには何らかの反応 (薬効もしくは毒性) が発現するわけですが、両者の間には当該薬物の血中濃度、さらには作用部位濃度が介在します。これらをグラフ化すると、 C_{max} は血中濃度と時間との関係 (左のグラフ)、PDは薬物の反応性 (薬効や毒性の強度) と血中濃度推移曲線下の面積 (AUC 生体への薬物の曝露量) もしくは標的部位での薬物濃度との関係 (右のグラフ) で表されます。多くの薬物の反応曲線は、右のグラフで示されたとおり、まず目的とする薬効の曲線が立ち上がり、次いで毒性

(副作用) の曲線が立ち上がり始めます。すなわち、薬効が発現し始めてから毒性発現の直前までが臨床的に望ましい領域であり、この領域が各薬物の有効安全域と位置づけられます (左右の図中の $\hookrightarrow$)。この濃度域に入るような用法用量を患者個々に求めることが研究のネライです。現在までに、重症感染症に頻用されるカルバペネム系の抗菌薬の点滴時間を患者さんの容態に合わせて変化させることで治療効果の改善に至ったケースをはじめ、近年世界的に懸念されている薬剤耐性菌の蔓延に歯止めをかけることをも念頭において感染症治療薬の適正使用の向上に貢献してきました。

同様に、急性白血病などのいわゆる血液のがん患者さんに対する造血幹細胞移植領域でも当研究室は大いに貢献しています。移植の1週間ほど前から腫瘍細胞の減少と、造血幹細胞の生着のための免疫抑制を目的として抗悪性腫瘍薬の投与等の前処置が実施されます。この抗悪性腫瘍薬が過量投与されると激烈な副作用を引き起こしますし、逆に少なければ移植後の生着が望めないため、投与開始後できるだけ早い段階でのPK解析の結果に基づいた用量調節が必要となります。患者さんごとの至適用量をどう決定するかは未だに世界中で模索が続けられてい

る段階ですが、国内の多施設共同研究においてPK解析を一手に引き受けている当研究室では、メンバーの一人である松元加奈准教授がその中心的役割を演じてくれており、我々の研究成果は全国の血液内科医の先生方からの熱い視線が注がれています。

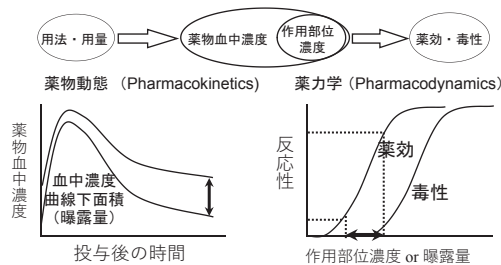


図 薬物動態と薬力学の概念図
両矢印 ($\longleftrightarrow$) は有効安全濃度域を示す。

薬剤師の臨床的な活動の礎となるコミュニケーション能力の醸成

ここでは、模擬患者 (simulated patient, SP) を教育資源として実習に導入した取り組みをご紹介します。京田辺キャン

パス近隣住民の方々や同志社大学および女子大学の卒業生の方々に働きかけて、現在までにボランティアとして約30名のSPさんを養成し、4年次生の学内での模擬病院・薬局実習のほか、薬学共用試験 (objective structured clinical examination, OSCE) 5年次の学外の実務実習に向向くに先立って全国の薬学学生全員が受験する客観的臨床技能試験) 時の標準模擬患者として活躍いただいています。これらのSPさんには筆者らが用意した患者シナリオに沿って患者の視点・感性で学生と「応対」してもらい、学生は多角的な問診を通してその患者 (SP) さんが抱えておられる薬物療法にまつわる問題点を洞察し、必要があれば処方の変更を医師に提案する、といった臨場感ある実践的な教育を展開中です。

おわりに

研究能力とコミュニケーション能力に長け、高い専門性と女子大学の建学の精神である *liberal arts* に則った幅広い視野を持つて医療に臨むことができる次世代の薬剤師の養成を今後とも進めてまいりたい所存です。

京都国際調停センター始動 「始動の瞬間」

大学法学部教授 瀬領真悟
せりょうしんご

2018年11月20日、ニューバーガー英国最高裁元長官、寺田最高裁元長官、川村日本仲裁人協理理事長、門川京都市長、そして松岡学長、その他来賓・関係者が、寒梅館ハーディーホールの上でオープニングテープに手を進めました。同志社大学を本拠とする「京都国際調停センター」(Japan International Mediation Center in Kyoto, JIMC-Kyoto) (以下「センター」とする) が始動し、第一歩を踏み出した瞬間でした。

「センターとその発足をめぐって」

センターは、同志社大学を本拠とし、「公益社団法人日本仲裁人協会」(JAA) で国際的に活躍する弁護士等を中核とした組織が運営します。日本初の国際調停組織で、日本企業と外国企業間はもちろん、外国企業間も含めた各種紛争の円満な解決を目指し、世界的カバレッジを有する機関です。センターは、裁判所などの国・地方公共団体設置組織とは異なりますが、紛争が生じた場合、当事者間での法的処理を含め、第三者的な処理を可能とする組織です。法学部・法学研究科と司法研究科は、2017年に運営に協力し、センターや調停に関する教育・研究活動の実施などを内容とする協力協定をJAAと締結しました。

「国際調停とは」

調停とはどんなものでしょう。紛争を処理・解決する手段として、裁判、仲裁があり、それぞれ優れた面もありますが、短所として費用・時間がかかる、金銭的心理的に満足が得られない、相手との関係が破綻してしまう(例…相手との取引や交流が断絶する)等々問題も指摘されます。調停は、その課題に対応する特徴を持ちます。調停は、秘密を守る第三者(調停人)が紛争当事者の間に入り、お互いの本音(秘密を含めて)を打ち明けてもらい、双方の納得できる解決策を見つけていくという方法です。従って、調停は、最後まで当事者間の友好関係を維持した解決を図り、仲裁などと比べて桁違いに安価で迅速な解決が可能です。双方納得しているので、解決策を互いに守りますから、尾を引くこともなく、取引等も友好的に継続でき、紛争も秘密裡に処理されます。

「なぜ、京都、同志社なのか」

なぜセンターは、東京等ではなく、京都で、同志社を所在地としたのでしょうか。実は京都が「調停」の特徴から最適条件を備えているからです。友好的な解決を調停で図るためには、行われる場所の雰

囲気環境も重要なのです。ハワイでの調停が有名なのですが、誰も行きたがる観光地、自然に恵まれ穏やかな雰囲気等が調停成功率を高めると言われます。京都は、この条件を満たしており、歴史的落ち着いた雰囲気はもちろん現在世界的著名観光地であり、より良い紛争解決を導くことができるのです。

ではなぜ同志社だったのでしょうか。第一に、センターの物理的・費用的条件があります。調停施設としての十分性と適切性、運営のための費用のバランスという点です。第二に、質的条件です。第三者から見た公正性はもちろんプレスステージの高さなどのブランドイメージが確保できる本拠地が必要です。

京都の中心(御所隣)に所在する同志社の施設は、アクセス、外観、利用者のイメージの観点からみて、最適で、外国に所在する同じ施設と質量ともに比肩します。また、同志社大学に所在することで、中立・公正・清廉なイメージを与え国際的なブランド力を向上させることができます。大学の提供する調停用施設が、内容や費用面でも現時点でのセンター運営に十分かつ適切であることも関係者から評価されました。

同志社大学にとっても、センターを置くことで、紛争解決という公益目的に資する社会貢献ができるという点で望ましいものです。国際調停が、自律的・友好的・平和的紛争解決方法であることから、自由主義・国際主義という大学の理念に適合し、良心教育の理念にもかなうということから、同志社大学での調停活動は適切なものと考えられます。

「大学、法学部・法学研究科、司法研究科、各方面の協力」

センターの発足により、大学は運営に協力していくことになります。具体的には、調停案件が発生した場合、施設を提供し、準備等で便宜を図ることになります。次に、センターや調停活動の適切な展開

のため必要なソフト面での活動を支援したり、主体的に行うたりすることになります。信頼性の高い調停人育成教育活動、よりよい調停を可能とする研究活動、調停の社会的普及を図るプロモーション活動等です。これらは研究教育機関としての大学の本領発揮の場です。また運営協力協定は、法学部・法学研究科、司法研究科が締結しましたが、調停自体は法律関係のみならず、それ以外の学問研究分野との協働関係によつて、よりよく行われるという理解は周知確立されたものです。法学以外の様々な学問分野、文系のみならず理科系をも主たる対象とした共同研究、教育の共同化が必要不可欠となります。その点で、総合大学・研究教育大学としての同志社の強みが活かせる場面です。

「今後の展開…日本・世界に貢献する大学として…国際主義の強化・拡大に向けて」

センターの発展は、同志社大学のみで図られるものでも、そうすべきものでもありません。発足に至るまでも同志社以外の国内外の大学人、国や京都府市などの公的団体、経済界や法曹界、シンガポール・香港や欧米の諸組織など、国内外から多くの方々への支援を得ました。また卒業生ネットワークにも協力を仰ぎました。また国内外各社会の多方面との協力網を構築し、その中で、センターの活動を支援し、その為の研究教育を充実していくことが重要です。センターに最も関与が深い同志社大学としては、より広く様々な協力関係を構築していく試みを続けることでセンターと国際調停の発展に寄与し、それによつて大学の国際主義の強化・拡大にもつながっていくべきところ です。



パイプオルガンがもたらす新たな可能性

同志社中学校・高等学校教諭

佐川 さがわ

淳 じゅん

2017年11月4日、宿志館グレイス・チャペルでパイプオルガン奉献記念礼拝と第一回演奏会が開催された。オルガンの設計・製作、チャペルでの設置作業から整音まで、その全ての工程を担ったのはドイツ中西部アイフェル地方に工房を構えるヴァイムス社である。オルガンには2つと同じものはない。社長のフランク・ヴァイムス氏は建物の雰囲気、音の響き、物理的な特徴などを把握するために実際に何度かチャペルに足を運び、数えきれない打ち合わせを重ねてオルガンの設計及び仕様決定に長い時間をかけた。ドイツの工房で2年半の時間をかけて作られたこの楽器は、解体され部材として日本に運ばれたのち、チャペルでの組立と整音にさらに4カ月を要して完成した。35のストップ（音栓のこと）。パイプの音色の種類を表す）は3段の手鍵盤と足鍵盤に配され、共鳴体でもある木製の胴の中には約2200本のパイプが美しく並んでいる。学校に到着したコンテナからのオルガン部品の積み下ろし、組立や整音作業の現場を生徒と見学し、楽器の内部構造を間近で眺め、ときに職人と協働しつつ楽器が完成していく様を目のあたりにできたことは、得難い貴重な体験であった。



楽器のコンセプト

チャペルの中で建物の一部として圧倒的な存在感を示すオルガンであるが、フルオーダーで作られるオルガンは、仕様決定が最も重要なプロセスと言える。楽器の仕様がチャペルでの音楽的な営みを左右し得る。オルガンの構想を練る際に私が強く意識したのは、現代において「私たちの音楽」を考えさせる時事性を持ち、なおかつ国際的な発信力を持つ楽器にすることだ



った。オルガン音楽の宗教的背景や伝統との結びつきが希薄な日本で、しかもこれから生きる中高生が集うチャペルで用いられるのには、ヨーロッパの伝統的なオルガンをそのままモデルにした楽器は不釣り合いである気がした。そこでドイツのオルガン製作の伝統をベースにしつつ、現代オルガン製作の先端的なアイデアの数々にヒントを求め、世界でもここにしかない新しい楽器の可能性を模索することにした。

現代音楽の豊富な知識と演奏経験を持つドイツ人のオルガニストから多くの助言を得て、独創的なオルガンの機能の数々が具体化した。マリンバやカリヨンといった打楽器、インターバルカブラーや風量調整装置などがその例である。オルガン内上部にはマリンバが取り付けられ、鍵盤を弾くことでマリンバが打鍵され発音する。打鍵の強弱や連打のスピードも調整可能で、他のストップと自由に組み合わせて演奏することもできる。風量調整装置を使用すると、ときに邦楽器を思わせるような音色さえ生まれる。2017年度には三回のパイプオルガン奉献記念演奏会が実施されたが、三回目の演奏会（2018年3月17日）には先述のオルガニスト、ドミニク・ズステック氏が自ら作曲した作品を披露し、こうした珍しい機能を大いに活かして、オルガンの新しい可能性を私たちに示した。この演奏会と第一回の演奏会の収録は2018年10月に完成したCD、



チャペルコンサートシリーズ

「MUSICAL CALLIGRAPHY 音の筆致」の中で聴くことができる。

2018年度は「チャペルコンサートシリーズ」というタイトルでオルガンのソロコンサートを中心に四回の演奏会を開催した。シリーズの中には高校ホザナコーラス部員達がプロの音楽家達と一緒に出演した公演があり、実践を通して本格的な宗教音楽を体験したことは、生徒達には大きな刺激となった。生徒の中には、このシリーズに高い関心を持って演奏会の楽曲解説文の執筆に挑戦したり、演奏会当日のサポートスタッフとして毎回のよう運営に協力してくれる者もいる。楽器調律や演奏の補助を生徒に依頼することもある。礼拝の他にも授業でのオルガン見学、クリスマスの音楽礼拝など様々な場面で、生徒のオルガンに対する強い興味を感じる。音楽の豊かさと懐の深さに改めて感慨深いものをおぼえる。

次年度以降のシリーズでは、より幅広く多くの人に訪れてもらえる企画に成長させていきたいと考えている。ヨーロッパでは街の中心に教会があり、日常の礼拝だけでなく演奏会をはじめとした多くの催しが行われ、それらを通して教会内外の人々の交流が生まれ、その時代の街の文化が創造される。グレイス・チャペルもそのような場であって欲しいと思う。音楽を通して地域に開かれ、多くの交流を生み文化を創り出す場所が学校の中に存在し得るということは、非常に贅沢な教育環境であるように思う。

2019年3月をもちまして、学生として10年以上、教員として40年以上過ごした同志社（香里）を去ることとなりました。同志社香里との出会い、学生時代のこと、どのようにして教員になったのかは、入社時に学校新聞である「香里の丘」に新任ご挨拶で書きました文章を一部掲載させていただきます。

『昭和52年に同志社大学英文科を卒業しましてから母校に戻り、昨年まで2年間講師として教えてきましたが、本年より正式に母校で教鞭をとることとなり、大変うれしく思っています。私と同志社香里のとの出会いは、14年前の冬、小学校6年生の時に本校を受験しようとして下見に来たときに始まります。その時、香里のあの坂を登つてくるときに、当時中学生ぐらいの先輩達が同志社のマークの入った体操服を着て、活発にグラウンドを動き回っているのを見て、羨望と憧れでじつと見つめていたのを今でも覚えています。中学時代は器械体操部に在籍していましたが、足を痛め、ふとしたきっかけからESSの門を叩く事となりました。今から考えるとこのことが現在の仕事に就く一つの方向付けになったように思えます。そして高3の時、今では

多くの後輩諸君が毎年後を継いでくれているわけですが、当時としてはあまり先例がなかったアメリカ留学を、先生方の理解と援助を得て実現することが出来ました。このように同志社香里という学校は、他の受験校のように平均点主義にとらわれず、好きな科目は伸び伸びと、とことん出来る環境にあります。生徒諸君はこの「自由」な雰囲気の中で、自由という意味を取り違えることなく、六年ないしは三年の学生生活の早い時期に自分を取り組む物を見いだし、その事に関しては他の誰にも負けないという自信がつくぐらいまで努力してほしいと思います。』

このようにして教員生活が始まりました。

英語科の話をしたいと思います。私が教え始めたとき、同志社香里には源河先生、大黒先生が中心になられて編集された同志社香里の自主教材がありました。PATTERNS&DRILLSと呼ばれ、中1から高3まで6冊あり、名前の通りやさしいPATTERNから徐々に難しくPATTERNまで、発話及び記述

等のDRILLSを通して学習するというものでした。毎年改訂され、後にリーディング教材も自主作成したので、毎年年度終わりには英語科全体で改訂作業や材料集めを行いました。英語科教員として、授業では生徒の発話の時間を十分に確保し、それを中心に授業を組み立てていく事の重要性をたたき込まれた時代でした。当時大学・女子大学の先生方を中心に、学内各中・高校の英語科教員が定期的に集まって同志社英語連絡協議会が開かれており、議題は様々で各学校の授業紹介や、使用テキスト等の情報交換、10年間の一貫教育の実現など多岐にわたっていました。近々このような連絡協議会が新しい形で再開されることを望んでいるところです。その後仕事をしながら大学院でTESOLを専攻する機会をいただき、卒業後、コミュニケーションイブティーチングやタスクベースアプローチなど新しい教授法に取り組んで来ました。時代の流れもあり、英語科の中心に置くべき教材も何度か推移してきました。PATTERNS&DRILLSから、中高一貫校向けの教科書、海外出版社のテキスト、検定教科書等です。現在は検定教科書を各学年のコアに置き、学年で独自にいかにかそれを膨らませていくかという最低枠を決め、プラス学年独自の物をプラスするというカリキュラムです。各学年のコアとなるコミュニケーション1から3に加え、英語表現、英語講読入門・応用、時事英語、コミュニケーションライティング、各種検定対策等があります。本校の先生方は自主作成の流れなのか、授業ごとに独自のHANDOUTや冊子の作成をされていることが多く、同僚ながら感心させられることが多々あります。次年度以降は私の代わりに新しい戦力が加わり、益々同志社香里英語科が邁進することを期待しています。

英語教育の他に、同志社の三大主義（キリスト教主義・自由主義・国際主義）の国際主義の分野で長くお手伝いすることが出来ました。1960年代後半頃、同志社香里において毎年年間留学生を送り出していましたが、それ以外の国際的なプログラムはありませんでした。国際教育の充実が最優先課題の1つとしてあげられ、国際教育委員会の立ち上げから参加いたしました。現在は、海外修学旅行、海外クラブ交流、留学生の派遣・受け入れ、語学研修・交流校プログラム、国際交流イベント（講演会・スピーチコンテスト・留学発表会）など充実してきております。時を同じくして、オール同志社の国際主義教育委員会が設置され、第一期メンバーから加わらせていただき、長年にわたりお手伝いすることとなりました。幼稚園から高校における国際教育援助費の決定、国際主義講演会、エッセーコンテスト、スピーチコンテスト、プレゼンテーション大会等と、広がりをみせています。この40数年の間に、様々な事に参加させていただいてとてもうれしく思っています。おかげさまで同志社香里における半世紀はとても充実したものでした。DOSHISHA KORIは以下の頭文字(acronym)で表現される学校であり続けると確信しています。

Divine, **O**pen-minded, **S**ophisticated, **H**onest,
International, **S**incere, **H**umane, **A**thletic, **v**ery
Knowledgeable, **O**riginal, **R**espectful, **I**ndependent

1. はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間についても大きく改善が求められました。各学校での教育課程における位置付けを明確にすること。学習活動として中身をより充実させることが大まかな改訂の要点です。そのような考えのもと、本校では2014年度までに様々な検討を行いました。結果、学習指導要領に示されている内容を踏襲しつつ、多様化する生徒のニーズに対応するため、また、各教科の持つている可能性を枠組みにとらわれずに引き出すためにも、より多くの教科が総合的な学習の時間を担うべきではないかという結論に至りました。そのような中で、保健体育科として考案し、2015年度より実施しているのが、これより紹介する「トレーニング探究」です。

2. 授業の構成

学習指導要領における総合的な学習の時間の目標は、横断的、総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方、生き方を考えることができるようにするとされています。

これらを踏まえ、トレーニング探究の授業は次の3点を柱として構成しました。

1. 主体的な学習に結びつけるために、トレーニングの基礎的知識を学ぶ。試験も実施する。(生徒の興味関心やトレーニングへのモチベーションが高まるよう、また、自ら課題設定を行い、レポート作成や発表にスムーズに繋いでいけるように『知識の種』を蒔いておきたい。)
2. トレーニングメニューを自分で決めて継続的に実践する。(取り組んでいる競技種目の特性、自らの体力的な課題に目を向け、メニューを立案。それを一定期間取り組み、実際どのようにパフォーマンスが変化していくかを感じて欲しい。)
3. 自分でテーマを決めて探究型学習を行い、レポートを作成する。またその内容をみんなの前で発表する。(来たるアクティブ・ラーニングに向けて、積極的にこのような内容を

3. 授業の流れ

〔1学期初め〜2学期中間試験〕

にも取り組ませていきたいと考えた。教育的効果を確かめながら、今後、より一層内容の充実を計りたい。〕
すなわち、従来からある講義形式での学習だけではなく、トレーニングメニューの考案とトレーニングの継続的実施とそれに対する自己評価、アクティブ・ラーニング形式での探究学習を加えたハイブリッドな形で構成しています。

「1学期初め〜2学期中間試験」
トレーニングの基礎的知識を学びながらトレーニングを実践する期間。基礎的知識としては、生理学、力学、栄養学、心理学、トレーニング理論、怪我の予防と応急手当などのエッセンスを講義形式で学びます。2時間続きの授業なので、はじめの1時間目にこの内容を充て、場所はトレーニングルームで行います。講義の後、速やかに次の時間のトレーニング実践に移れるよう、あらかじめ体操服に着替えた状態で始めます。



司書教諭からのガイダンス



トレーニングの様子

4. 終わりに

生徒たちの探究型学習のテーマの一例を挙げますと、「筋肉痛は良いもの？悪いもの？」「アルペンスキーにおける体幹トレーニングの重要性」「トレーニングから見た障害者スポーツの可能性」「怪我をした選手と心のケア」「本番で最強のメンタルを引き出す方法」などがあります。本当に自由な発想で主体的に調べ、発表し、互いに学び合ってくれています。このような点から考えても、総合的な学習の時間における、教科としての体育の役割も、十分果たせるものがあると実感いたしました。また、今後、他教科との横断的な学習形態にも発展させていく可能性もあると感じており、より高い学習効果を求めて、新しいチャレンジもしていきたいと考えています。

また、1学期には背筋力計とレッグプレス・マシンを使って最大筋力を、2学期には自重でのプッシュアップとシットアップで筋持久力を測定する日を設定しています。〔2学期中間試験後〜2学期末・3学期〕



レポート執筆の様子

特別寄稿

同志社初の女性オリンピック —横田みさを(1932年LA大会)—

もと い やす ひろ
本井 康博 (元大学神学部教授)

東京オリンピック

東京オリンピックが迫る。同志社はこれまでオリンピックに多数の選手を送り込んできただけに、来年の活躍も楽しみである。

前回の東京大会（一九六四年）には五人の選手が出場した。そのひとり、フェンシングの田淵和彦選手はローマ大会（一九六〇年）に続く出場であった。六〇年当時、私は同志社高校の生徒であつたが、生徒間でも派遣支援のための募金運動が展開された。以来、同志社は太田雄貴氏（二〇〇八年北京大会銅メダル。現日本フェンシング協会会長）に至るまで、日本のフェンシング界を牽引し続けている。

田淵氏（本学名誉教授）は、同志社大学在職中は同志社体育の発展に貢献された。厳君の潔氏も、本学陸上競技部の監督・総監督を二十年間、務められたばかりか、前回の東京オリンピックでは競技場整備や競技運営にも尽力された（宮川勝也「田淵潔」、『同志社山脈』二一八〜二一九頁、二〇〇三年）。

京オリムピック「の主役だからである。『いだてん』にはもちろん、大森も欠かせない。彼の役は竹野内豊さんが演じている。大森の業績や略歴については、早くに拙稿「大森兵蔵」(『同志社山脈』二二二〜二二三頁)で紹介した。これが彼の同志社デビューとすると、今年の大河ドラマは全国デビューである。

一方、最初の選手団長は嘉納治五郎で、オリンピック参加に必要上、前年に大日本体育協会（現日本スポーツ協会）を立ち上げ、その会長を務めていた。ちなみに同協会の総務理事は三人であるが、うち二人を同志社人（大森と安部磯雄）が占めた。スポーツの領域で同志社が果たしてきた貢献度は、予想以上に高い。

初参加は大森兵蔵

ところで、同志社人でオリンピックに「初参加」したのは誰か。「日本バスケットの父」の異名をとる大森兵蔵である。日本が最初に選手団を送り込んだ時の監督である。同志社は日本のオリンピック参加に初発から絡んでいる。

大森がストックホルム大会（一九一二年）に同行した選手はふたり。マラソンの金栗四三と短距離の三島弥彦である。前者は東京高等師範学校（現筑波大学）、後者は東京帝国大学（現東京大学）の学生であつた。

彼らは今、まさに時の人である。NHKで放映中の大河ドラマ「いだてん」東



オリンピック・西貞一(同志社大学)
『大阪朝日新聞』(1932年5月31日)

そこで、東京オリンピックを前に同志社スポーツユニオンは、新しいユニオン史（体育会部史）の出版を準備中である。その序章で、私は「初期同志社は体育・スポーツの先進校」であることを立証してみたい。

西貞一と石田治子

次に選手としてオリンピックに初参加した同志社アスリートは誰か。ロス大会（一九三二年）の西貞一（陸上二六〇〇m）である。

ただ、一説には彼以前に代表がいたという。『我等ノ同志社』（一〇七頁、同志社校友会・同窓会、一九三五年）は、西よりも八年早いパリ大会（一九二四年）に入谷唯一郎（水泳）が出場したとするが、典拠不明であるうえに、オリンピック公式記録には彼の名はどこにもない。謎のアスリートである。

一方、スポーツユニオンによると、女性第一号はグルノーブル大会（一九六八年）の石田治子さん（フィギュアスケート）である。妹ふたり（あゆみ、ゆり）もフィギュアである。東京オリンピック



オリンピック・横田みさを(同志社高等女学校)
オリンピック・ロサンゼルス大会(1932年)
(Wikipedia.より、2018年12月1日)

のフィギュア界で言えば、本田三姉妹に相当する。が、石田三姉妹とて負けてはいない。そろってNHKの朝ドラ「てるてる家族」（二〇〇三年）のモデルとなった。おまけにドラマの原作『てるてる

坊主の照子さん』の作者、なかにし礼も石田ファミリーである。妻が石田ゆりだからである。

ところで石田治子さんが同志社初の女性オリンピックというのは、同志社大学に限定した場合のことで、女子部（同志社女子中高・女子大の総称）にまで広げると事情は変わってくる。

女性の第一号は 横田みさを

実は一九三二年ロス大会の参加者は、西だけではない。同志社高等女学校（高女）の四年生、横田みさを（十五歳）がいる。

同志社スポーツ史では隠れた逸材で、その生涯も起伏に富んでいるので、紹介する価値は十分にある。

同志社女子部には今も昔もプールがない。にもかかわらず、横田の在学当時、高女は水泳強豪校で、団体

優勝を何度も遂げている。練習はもっぱら京都踏水会である。同会は一八九六年に大日本武徳会遊泳部として、琵琶湖疏水（夷川ダム）で活動を始めた京都最古のスイミングクラブである。

横田が高女一年の時（一九一九年）、洛北・八瀬のプールで行なわれた第三回女子中等学校競泳大会で高女チームは団体優勝を成し遂げた。

横田は個人でも、同年の第八回日本選手権大会について翌年の大会で背泳二連覇を遂げた（所属は京都武徳会である）。

一九三一年の第五回女子中等学校競泳大会（大阪市立運動場プール）では、高女は団体こそ準優勝に終わったものの、横田自身は個人百m背泳で日本記録（一分二十九秒四）を樹立した。この偉業はさすがに『同志社百年史』の年表（資料編二、巻末二七頁）にも記録されている。こうして横田は四年生となった一九三二年に、オリンピックに選出された。

見送りに二千余人

横田の出場は、市内でも大きく盛り上がった。『大阪朝日新聞』（一九三二年六



壮行会での京都出身選手（京都市公会堂）
左から横田みさを、土倉麻、中西みち子、荒田雪江、西貞一
（『大阪朝日新聞』1932年6月15日）

月十五日）は、京都から出場する五選手のための激励送別会（同月十四日）が「大盛況」であったと報じる。見出しには「お

お！輝かしき晴れの門出よ」といった文言が躍る。

学内でも同月二十日に新築の栄光館で送別激励大会が開かれた。ほんの三日前に新島八重の学校葬が挙行された会場だけに、参加者はその哀しさを吹き飛ばすかのように、横田に大きなエールを送ったに違いない。

森一郎氏（同志社女子中高・元校長）によると、女子部の「教務日誌」（同年六月二十三日）には、横田の出発を見送るために「職員生徒一同、見送リトシテ京都駅へ出向ク」ことが決議されたところ。日誌に貼られた新聞の切り抜きには、もうひとりのオリンピック、荒田雪江（府立第二高女生。現府立朱雀高校）と共に汽車の窓から身を乗り出して、見送りの人たちに応える写真が掲載されている。

見出しは「真黒の顔は感激に輝く」で、彼女の出で立ちは、白のベレー帽と上着に、紺青のスカート、それに白のストッキング着用とある。

さらにこの記事中の彼女の談話が、なんとほほえましい。

「勝てるかどうかかわかんけれどーワシ公は連れてつてやるの。トランクの中にあるから、汽車に乗ったら出してやるの」。

羽生結弦選手の「プーさん」を想起させる。見送りの女子生徒から「横ちゃん、しっかり！」「荒田さん、勝つて来てよ！」の声援が飛び交う中、選手団は特急燕号で東京へと発った。

『京都日出新聞』（同年六月二十一日）の報道もヒートアップする。「行け！行け！オリンピックへ 必ず勝つて帰れと晴れの征旅」との見出しを掲げ、熱い言葉を連ねた。京都駅での見送りに、およそ二千人が駆けつけた。

ロス大会の成績

大会では、百m平泳ぎ（一分二十五秒一）は予選で敗退したものの、四百mリレー（五分六秒七）ではみごと五位入賞を果たした。同時に特筆すべきは前畑秀子（相山女学校生。現杉山女学園）で、二百m平泳ぎで銀メダルをとった。次の



いざロサンゼルスへ
燕号で京都駅を発つ横田みさを（右）と荒田雪江（左）の2選手
（森一郎氏提供）



横田みさを、松竹少女歌劇団へ
『京都日出新聞』(1933年4月7日)

で知り合い、ベルリン大会後に結婚した。オリンピック・カップル第一号であるが、実はふたりとも同志社とは意外な縁がある。

まず土倉であるが、新島襄の支援者(同志社大学設立募金運動では最初の大口寄付者)であった「大和の山林王」土倉庄三郎の孫である。彼には十一人の子ともがいたが、男女ともほとんどを新島に預けた。長男鶴松もそのひとりで、麻はその娘である(拙稿「土倉家の人びと」四〇頁、『同志社談叢』二五、二〇〇五年)。

庄三郎の孫には、ほかにも運動センスに恵まれた者がいる。四女の小糸が、佐伯理一郎(同志社病院院長)との間に設けた子どもの中から、ふたりのアスリートが育つ。次男・信男は、同志社大学陸上競技部初代主将として、四男・巖は第三高等学校(現京都大学)野球部の主将として活躍した(拙著『新島襄の師友た

ち』二六七頁、二〇一六年)。

田島直人と「五輪の木」

次に土倉麻の夫となった田島も、京大の卒業生ではあるが、陸上競技界での繋がりが、同志社の田淵潔とは深い親交を結んだ。

ベルリン大会優勝記念にドイツで田島に贈られた「ヨーロッパナラ」の苗は、京大農学部内のグラウンド脇に植えられ、「オリンピック・オーク」(五輪の木)として陸上ファンに愛好された。

この記念樹贈呈の発案者は、時のベルリン大会組織委員会事務総長、カール・ディーム氏(ケルン・スポーツ大学学長)であった。

氏はその後、来日した際に、記念樹再会のため京大を訪ねた。その時の案内人が、京都市長の高山義三(新島時代の同志社理事、中村栄助の息子)と田淵であった(『同志社山脈』二二九頁)。

ちなみにオークは二〇〇八年にいたって虫害被害のために、伐採された。以来、挿し木や以前採取したサンプルからクロインを育て、再植樹する試みが京大農学

研究科で進められていると聞く。

帰国歓迎会

さて、ロス大会の後日談であるが、帰国した横田たちの歓迎振りが凄かった。京都駅に帰ってくる横田を出迎えるために同志社女子部は教職員・生徒の代表者を差し向けることを決議した。

横田が京都に戻ったのは九月十日。五日後には、西、土倉、中西(府立第二高女)の三人も続いた。さっそく同日午後二時から栄光館で「横田みさをを歓迎会」が開催された(『教務日誌』同月十四日)。

その時のプログラム(印刷物)が今も女子部に保存されている。それによると、聖書、讃美歌、末光信三部長(校長)の祝辞のあと、女子部教員のM・F・デントンが「歓迎ノ辞」を英語で述べた。教務日誌に添付された新聞切り抜きによれば、その内容は、オリンピックを現地で見物したアメリカの友人から送られてきた手紙の紹介である。

一方、同志社大学でも西選手の帰国歓迎会が、同志社チャペルで九月二十一日に開かれた。地元紙はさっそくその模様



タカラジェンヌ・水尾みさを(左端)
「メキシコの薔薇」でメキシコ娘を演じる(『歌劇』177、1934年12月号)

『日新聞』一九三二年七月十四日)。

タカラジェンヌに変身

さて、横田は帰国後、大変身する。翌年、卒業を待たずに東京松竹少女歌劇団に入団して、世間を驚かせた。同団部長(蒲生十右衛門)の推薦があったという。

森一郎氏の調査では、彼女の名前は高女の卒業記録やアルバムにはいつさいない。同志社を中退しての芸能界入りである。

それだけに、新聞は「我らのヨコちゃん オペラの舞台へ」との大見出しで、「女子水泳の花形」の転身を大きく報じる。

彼女の兄によれば、この時、横田が直面した岐路は「悩みの二筋道」だったという(『京都日出新聞』一九三三年四月七日)。

今ならさしずめスケーター兼女優の「二刀流」をこなす本田望結選手(十三歳)である。

横田はまもなく宝塚歌劇団に転じ、タカラジェンヌとして「水

尾みさを名乗った。第二十三期生（一九三三年～一九三七年）として、娘役で活躍する。その消息は同団機関誌の『歌劇』に散見される。たとえば、同誌一六九号（六一頁、一九三四年四月）では、自身で在籍一年をこう振り返る。

「懐しいトウランドット姫の初舞台から夢の様に一年経つて了った。舞台から見た人生も又、素敵でした。〔中略〕現在ではダンス専科ですが、将来は御芝居も上手になれる様にと毎日、神様に御願ひして居ります」。

初舞台の演目は、一九三四年の三月（月組）と五月（花組）にそれぞれ宝塚大劇場で上演されたレビューである。

その後、「メキシコの薔薇」（同年十二月、星組、中劇場）には娘役として出た（『歌劇』一七七号、一九三四年十二月）。四年後に退団すると、名前を芸名から本名に戻した。

シンクロの開拓者

タカラジェンヌ時代の横田の特色は、ステージ以外にもある。シンクロである。



神宮外苑プールを背にするタカラジェンヌの水尾みさを（『歌劇』195、1936年6月号）

日本導入の始まり（一九三三年）に関わったのである。すなわち、シンクロが日本で普及した背景には、前年に競泳のオリンピックアンに選出された横田の働きが大きいとされている。

つまり、彼女の宝塚入団をきっかけに、彼女が浜寺水練学校の生徒たちといっしょに「楽水群像」という水上ページェントを始めたのが、発端となった。ただし当時の楽水群像は、水中パレエの無声映画を参考にしたため、音楽に合わせることを知らず、ただ号令と笛の音だけで演技をしていた（www.ftm.co.jp/garage「ビートのふしぎなガレッジ オンエア」。二〇一八年二月一日閲覧）。

シンクロがオリンピックの正式種目になったのは、一九八四年のロス大会。横田がかつてロス大会に競泳選手として出場してから五十二年後のことである。採用以後は、日本のお家芸とも言われ、何人ものメダリストを生んできた。

同志社に限っても奥野史子さん（一九九二年バルセロナで銅メダル二個）、立花美哉さん（一九九六年アトランタで銅メダル、二〇〇〇年シドニーで銀メダル

二個、二〇〇四年アテネで銀メダル二個）の二人がそうである。

奥野さんの場合は、戦績以外にも特筆すべきことがある。水泳を始めたのは、奇しくも横田と同じ京都踏水会である。さらに伴侶（朝原宣治さん）がオリンピック（二〇〇八年北京で銀メダル）、しかも陸上競技という点で土倉麻とまさに同調する。それに夫妻してメダリストであるうえに、同志社アスリート同士（ゼミの同期生）のカップルという点では、オリンピック・カップル第一号の土倉のケースをはるかに凌駕する。

一連のこうした事実をもしても横田や土倉が知れば、彼女たち先輩がどういう反応を見せるのか、興味津々である。

女優に転身

さて、宝塚以後の横田であるが、今度は映画界に雄飛する。女優（映画スター）への転身である。芸名は一時、「戸川純子」を名乗ったという。

最初の出演作は東宝映画で、成瀬巳喜男監督「禍福（前編）」（一九三七年）である。タイトルロールには主演の入江た

か子を始め、十九名の出演者名が出るが、横田の名はない。

続く清瀬英次郎監督「背広の王者」（日活、一九三七年）では、二人目に名前が出る。日活入社第一回作品で大抜擢されたのか。戦後も増村保造「恋にいのちを」（一九六一年、大映）に出演した。

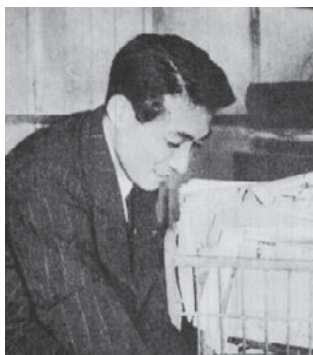
横田が現役であった当時の映画界は、小津安二郎監督「東京物語」（一九五三年）のヒロイン原節子を始めとする世を時めくミュージズたち（大女優）が銀幕を彩った時代で、横田自身は終始、マイナーであった。

そのため、引退を含めて晩年や永眠などの消息も不透明で、忘れられた存在に化した。小津研究で博士号を取得され、あまたの映画人にも通じられる宮本明子氏（同志社女子大学助教）にしても、横田は「圏外」であった。

二〇〇一年の『著作権台帳』最終版には、返子に居住とある。一九一七年生まれなので、当時すでに八十四才である。

結婚

一方で、横田の家庭生活は華やかだった。



作曲家・竹岡信幸
（Wikipediaより、2018年12月1日）

た。女優時代に作曲家の竹岡信幸（一九〇七年～一九八五年）と結婚した。

竹岡は横浜の出身で、明治大学マンドリン倶楽部では、作曲家・古賀政男の三齡下の後輩にあたる。卒業後は竹岡自身も作曲家となり、コロンビアレコードを中心に数々の作品を生み出した。

代表作は「赤城の子守唄」（一九三四年。作詞は佐藤惣之助）と「支那の夜」（一九三八年。西條八十作詞）。それぞれ東海林太郎と渡辺はま子が唄ってメガヒットしたので、一躍して囃される音楽家になった。

結婚に伴い竹岡みさを人脈は、それまでのスポーツ、歌劇、映画の世界からさらに音楽界へと押し広げられた。

中国山水画史研究

— 奥行き表現を中心に —

河野道房（大学文学部教授 著）

中央公論美術出版
12,500円（税抜）

山水画とは、中国や日本などの東アジア地域で、山や水辺を主題として描かれた絵画をいいます。英語では「landscape painting」と訳していますが、単なる風景画とは区別して山水画と呼ぶのは、山や水辺を描く主題に特別な意味を付与してきた歴史があるからです。そうした意味を、造形からさぐるのが美術史研究です。

美術史研究書である本書は5章で構成され、第1章は基礎的考え方、2―3章で山水画の奥行き表現の発生や進展を実作品の造形の分析から、4―5章では文献に現れる山水画に対する

見かたの考察から、中国山水画の展開を考察しました。

私は山水画に限らず、まず作品を見ると、何がどのようにして表現されているかを考え、感じようように心がけています。抽象画でも、その色や形状から何らかのイメージが脳内に想起されます。そうしたイメージの持つ意味や、作者が意図した、あるいは意図せずして表れた表現の要因を推理すること、そしてその証拠を探索して自分の推理を論証することは、とても楽しいことです。

本書は学術論文として書かれたもので、予備知識が必要かもしれませんが、小難しい注や漢文をすつ飛ばして読んでいただいても、全体の流れや山水画をどのように見ればよいのかがある程度分かるように配慮しました。本書から、山水画という東アジアに共通する主題の絵画に多少なりとも親しんでいただき、絵を見て考える歓びを少しでも感じてもらえれば、筆者の望外の歓びです。

著者より

苦難と心性

— イタリア・ルネサンス期の黒死病 —

石坂尚武（大学文学部名誉教授 著）

刀水書房
8,400円（税抜）

黒死病などの苦難で人びとが受けた心のあり方とその反応は、把握することはなかなか容易ではないように思われるだろう。

そのためヨーロッパにおいても、これに正面から立ち向かった研究はあまり（あるいは全く）ないように思われる。内面的変化を把握するのがむずかしいと考えられているからである。しかし、イタリアの14世紀の都市社会に始まる「文字の市民化」によつて、疫病による苦難と心性の関係、その心と行動の関係は――

第一に「私的文書」、すなわち、手紙や生活記録などの史料

第二に「公的文書」、すなわち、法令の条文・議事録・判決文などの史料

を有機的な読み込みによつて、ある程度まで解明することができると考えた。本書は、2017年に出版した私の『イタリアの黒死病関係史料集』（刀水書房）の51点の史料と、その他の同時代史料を活用して、ペスト期の苦難と心性の関わりにアプローチし、近世世界が『峻厳な神』によつて支配された側面が少なくないことを新たに主張・論証している。

同様の視点は、宗教改革の原因についても光を照らししてくれる。この『新刊紹介』のコーナーでは扱われていないが、拙著『どうしてルター』の宗教改革は起こったか―ペストと社会史から見る―（ナカニシヤ出版、2017年）では、本書『苦難と心性』と同じ主張をずっとコンパクトに展開している。新書版なので合わせて紹介したい。

著者より

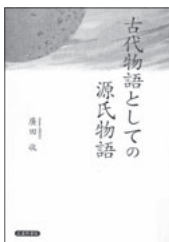
慈学社出版
13,000円（税抜）信託取引と
信託課税の法理

占部裕典（大学司法研究科教授 著）

平成19年度信託税制の改正において、改正信託法のもとで認められた多様な信託を受けて信託税制に係る所要の整備が行われ、あわせて改正前に指摘されていた（民事）信託税制における問題点の解決も一応図られ、税制からも民事信託の幅広い活用が期待されていた。確かに、信託法や信託税制等の改正を受けて、多様な信託の利用が動き始めたといえようが、家族信託・福祉型信託などの民事信託の利用は広がりを見せているもの、なおその他の領域での利用は期待したほどのものではない。今後は、信託の具体的な利用を踏

まえながら信託法理論や法解釈にもとづき、信託の利用に中立的でかつ公平な信託税制を再検討し、課税の枠組みを再構築することが必要となる。信託税制が信託による租税回避を警戒するあまり、行き過ぎた税制により信託の利用を萎縮させることがあってはならないであろう。本書は、（1）我が国の信託課税の理論が立法当時より基本的に変わらず現在まで引き継がれていることを明らかにし、（2）その後の信託法改正に向けての議論の中で旧信託税制に係る問題点を明らかにし、（3）信託法改正後の下での新信託税制がどのように変容し、旧信託法の下での信託課税の課題は解消したかを検証し、（4）信託法改正により改正された新信託税制の特徴を明らかにし、なお残されている課税を明確にし、（5）今後の多様な信託の活用を踏まえた上で、なお積み残されている信託税制の立法論的、法解釈論的課題や今後の信託税制の展開について検討を進めるものである。

著者より

武蔵野書院
11,000円（税抜）古代物語としての
源氏物語

廣田収（大学文学部教授 著）

私のような「忘れ去られた」ようになつてゐる研究者に、重ねて著書を紹介する機会をいただき、心から感謝しています。前著『文学史としての源氏物語』（武蔵野書院、二〇一四年）では、『源氏物語』それ自体が一つの文学史として構築されたテキストであるということを論じました。

本書は、『源氏物語』が西暦一〇〇〇年前後に書かれたという事実から考えると、『源氏物語』の本質を古代物語であるというところに求めることは、必ずしも世界的古典遺産としての評価をおとしめることにはならな

いだろうという理解から出発しています。表現者の側に寄り添って言えば、物語が書かれる現在としての古代とは、「古代における草深く遙かな古代」と「近代としての古代」とがせめぎ合う瞬間であると想定できます。それは無意識の世界と意識的な世界、伝統的な精神と外来の知識、類型と個性、かな書きと漢詩漢文、などといった対立に置き換えることができます。時の権力者である藤原道長がわが娘彰子を、一条天皇の後宮に入内させるにあたり、中宮教育のために女房としての出仕を要請され、物語を書くように求められたとすると、『源氏物語』は帝王学というよりも中宮学のために書かれたのではないかと推測できます。それはおそらく漢詩漢文よりも和歌を重視する物語が求められたと思います。さらに、中宮のために書かれたとみえて、紫式部がみずからのために書くという営みを仕込んでいるということも予想できます。

著者より



現代図書
2,600円(税抜)

A Passage to Self in Virginia Woolf's Works and Life

臼井雅美(大学文学部教授) 著

人生の出会い

——ウルフ研究を通して
本書は、同志社での研究生活におけるウルフ研究をまとめたものである。広島大学から同志社大学に移籍した時に二歳だった娘は、今春大学を卒業して社会人となった。

それ以前、卒論、修士論文、博士論文とウルフがテーマであった。私にとって、ウルフは生涯のパートナーのような存在である。アメリカにおいてフェミニズム理論の洗礼を受けた時もウルフを通してであったし、国際学会での発表やアメリカでの出版もウルフ研究に関してであ

った。ウルフが研究者としての私を育ててくれたとも言える。

そのような中で、本書はウルフが随筆『自分自身の部屋』と『三ギニー』において論じた女性の自立、創作、そして思想を考察する上で、私がウルフを通して出会った人物に焦点を当てて書いた論文集である。ウルフの恋人でもあった作家ヴィタ・サックヴィル・ウエスト、病から劇的に回復する詩人エリザベス・バレット・ブラウニング、絵画を芸術に高めた肖像画家ジョシュア・レノルズ、新たな時代を記録した写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン、ハンセン病患者と寄り添った精神分析医神谷美恵子、そして日本を去り英語を創作言語とした作家キョウコ・モリである。ウルフの人生のように、彼らの人生そのものが革命であると思う。私はウルフと出会い、自分自身の世界を持つことができた。人生の中で、一つでも大切なものに会えることが大切だと思う。皆さんにも、それを探してほしいと思っている。

著者より



見洋書房
3,200円(税抜)

EUにおける政策過程と行政官僚制

原田徹(元大学政策学部助教授) 著

こんにちのヨーロッパは、EUの存在を抜きにして語ることはできません。EUに通貨ユーロを使用していることや、お互いに関税をかけあわずに一つの巨大市場を形成していることなど、経済的な側面はよく知られていると思います。しかし、案外、EUの政治的な側面はご存知でない方が多いのではないのでしょうか。このEUの政治的な側面にこだわったはなしを本書では展開しています。

では、EUのどこに政治的な側面があるのでしょうか。ドイツ首相とフランス大統領の駆

け引きなど首脳外交的なところでしょうか。それもEUの政治的な側面です。しかし、本書では、もっと日常的なEUの政策過程に目を向けています。

そこでは、いろんな国のいろんな政党たちが、自国の利益や理想やイデオロギーの違いを抱えて、静かながらも激しく意見をたたかわせている様子が浮かび上がってきます。そして、激しい意見の違いを、EU官僚がいかにハンドリングして乗り越え一定の合意に導こうとしてきたのか、このEU官僚の政策技術に特に読者の注意を誘います。その上で、EU官僚による政策技術は、2010年代に入るまでは成功してきたものの、その成功ゆえにもたらされた歪みが、今日のヨーロッパでのポピュリズム勃興やブレグジットの国民投票結果となつて表出したとの見立てを提示しています。知られざるEUの政治的側面の醍醐味をご提供できていますと幸いです。

著者より



ミネルヴァ書房
6,500円(税抜)

電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか

技術とジェンダーの日独比較社会史

石井香江(大学グローバル地域文化学部准教授) 著

「電話交換手」というと、座っているものばかり思っている

したが、表紙の絵では立って仕事をし、しかも男性と一緒に、服装もお金がかかっている。そうだと、献本させていただいたある研究者の方からコメントをいただいた。表紙紙に使用した絵は、電話交換手がまだ「男の仕事」でも「女の仕事」でもなかった時代に描かれたものだ。歴史をたどれば電話交換手は男の仕事であった。電話の技術革新以前は、電話一台で扱える回線数が限られていたために、時に他の交換台に移動するか、拡声器で要件を伝えるかしなければならなかった。

ればならなかった。一か所に座ってなどいられず、男女とも忙しく立ち働いていたのである。表紙の絵は19世紀末のベルリンの電話局の様子を描いたもので、技術革新を一つの契機として、電話交換手が男性から女性市民層の仕事に移り変わっていく瞬間をとらえた貴重な一枚である。この絵がA面であるとすれば、電信局で働く男性の電信技手の姿を描いた裏表紙の絵はB面である。本書では電話交換手が女の仕事になっていく過程を、電信技手が男の仕事なっていく過程と表裏一体のものとして捉えている。

電話交換手が女の仕事であった事実についてはよく知られているが、その理由や経緯について、必ずしも説得的な説明がなされてきたわけではない。本書では文献・聞き取り調査を踏まえ、男女の「違い」を前提とせず、「違い」が制度・実践・言説によって下支えされる(一)历史的な枠組みでは見えてはこない)過程や仕組みに注目している。現状を変える道筋をたどろうとしている方に、本書が何らかのヒントを提供できれば幸いである。

著者より



有斐閣
1,900円(税抜)

金融商品取引法への誘い

川口恭弘(大学法学部教授) 著

「ゴーン日産会長逮捕・金融商品取引法違反の疑い」との見出しが、各新聞の朝刊を飾り、連日、テレビで報道されたことは記憶に新しいところだと思います。これによって、「金融商品取引法」(略して「金商法」といいます)は一躍有名になりました。

「金商法」は、「金」(ゴールド)の商売に関する法律ではありません。「金融商品取引法」はかつて「証券取引法」という名前の法律でした。証券の代表的なものが「株式」です。株式会社は事業資金を調達するために株式を発行します。我々も、資金の運用として株式に投資を行っています。

す。このような証券取引を円滑かつ公正に行わせるために「金融商品取引法」が存在しています。

「金融商品取引法」は、日本経済を牽引する株式会社の経済活動を支える重要な法律です。しかし、条文数は多く、内容も技術的…。そのため、その「門」の前で立ち止まってしまいう人も少なくありません。本書は、このような初学者を対象として、「金融商品取引法」の面白さを伝え、学びの第一歩として、これに興味をもってもらうことを主眼としています。このような趣旨から、随所に図や表を配置しました。また、「同志社物産株式会社(新島襄次郎社長)」という架空の会社を登場させ、ストーリー仕立てにした章もあります(不真面目!と怒らないでください。内容は極めて真面目です)。本書を契機きっかけとして、「金融商品取引法」の世界の訪問者が少しでも増えれば、これに越した喜びはありません。

著者より



ベレ出版
1,700円(税抜)

生き物はどのように土にかえるのか

動植物の死骸をめぐる分解の生物学
おだのりたかし
大園享司(大学理工学部教授) 著

あらゆる生き物は、死を迎えます。緑起の悪いはなしだと叱られるかもしれませんが、われわれ人間も例外ではありません。では、動物が死んだり、植物が枯れたりしたあと、それらの遺体はどのように分解されて「土にかえる」のでしょうか。

この本では、自然界に暮らす動物や植物の「死後の世界」を、遺体となった生き物と、遺体の分解にかかわる生き物の両方に注目しながら、丁寧に順を追って紹介していきます。

分解は、生き物の遺体が「なくなっていく」プロセスです。その

プロセス自体は、動物や、肉眼では見ることでできない菌類や細菌などの微生物が、生きるために、その遺体を利用することで進行します。この遺体の「分解」という大役を担う生き物たちは、まとめて「分解者」とよばれます。

この本では、生き物の分解のプロセスの理解を通じて、分解者とはばれる生き物たちの暮らしや営みについても紹介していきます。「分解」とは、その字面とは違つて、別の新たな「いのちを生み出す」となみ」でもあるのです。

「生きる」とことと「死ぬ」とことは両輪をなして、地球の生態系を動かしています。この二つの車輪をつなぐのが「分解」である、ともいえます。

普段、ほとんど語られることのない「分解」の世界。この本が、「生」の向こう側に広がる、多様な生き物の豊かな世界に興味を持つきっかけになれば、著者にとって望外の喜びです。

著者より



法政大学出版局
3,000円(税抜)

始まりの知 —ファノンの臨床—

とみやまいちろう
富山一郎(スタグロイバール研究科教授) 著

同書は、沖縄の近現代史を考えることと、フランク・ファノンの著作を読むということが私の中でどのように関連してきたかを再考し、学知自体への問いとして明示しようとしたものです。またそこには、これまで私が大学という場について考えてきたことが、この『始まりの知』の通奏低音としてあります。

前に勤めていた大学では、法人化や法人化に伴う大学合併の渦中にあり、またこうした大学再編とセットにして国が打ち出した最悪の文教政策である21世紀COE、グローバルCOEに振り回されていた。ビル・レディングズの『廃墟の中の大学』ではないのですが、こうした中で大学はもう終わりなのかもしれないと感じざるを得ない場面にもたびたび出会いました



見洋書房
2,200円(税抜)

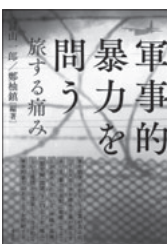
新編同志社の思想家たち上

おきたゆくじ
沖田行司(大学社会学部教授) 編著

和田洋一篇『同志社の思想家たち』上巻が出版されたのは1965年である。日本経済の発展に伴い、大学が大衆化し始めた頃である。執筆には鶴見俊輔を始め同志社大学を代表する研究者が名を連ねている。戦中の苦難の歴史を振り返りながら、私学同志社の創立の理念とその継承者の思想の軌跡を辿ることによって、同志社の現在と未来を考えようという試みである。それから半世紀の歳月を経て、創設の理念が色褪せ、私学の存在が曖昧になっていく状況に危機意識を募らせた若い人た

ちが勉強会を始めた。いずれも同志社で学んだ新進気鋭の研究者である。鶴見俊輔を始め、旧著の執筆者と交流があり、半世紀にわたって同志社大学の歴史を見てきたという理由でこの書物の編者となった。二年間の勉強会を経て出版にこぎつけたが、編者にとって、それは学び直しの機会でもあった。新島襄の時代から、同志社で学んだ人々が、それぞれの時代の課題を担いながら、同志社建学の精神をいかに継承したかという問題は、同時に現在の同志社人に突きつけられた課題でもある。荒削りの叙述もあるが、建学の精神の継承がどのように描かれたかは、執筆者自身への自己問答でもある。同志社の歴史を理解する上で重要と思われる事象をコラムで取り上げた。旧著では扱っていなかった人物も新たに取上げた。とりわけ下巻では新たに田畑忍を加えた。すでに下巻の入稿も済ませ、近々上・下巻が揃って書店に並ぶ予定である。

著者より



青弓社
3,000円(税抜)

軍事的暴力を問う 旅する痛み

とみやまいちろう
富山一郎(スタグロイバール研究科教授) 著

「すだ」について

そろそろ「すだ」をしませんか。いつの頃からか、ともに本書を編集した鄭柚鎮さんからこういわれることが、定例になりました。「すだ」とは、ハングルで、「おしゃべり」という意味ですが、そこには学会などでおこなわれる議論というよりも、日常のなかで交わされる言葉たちの領域という意味が、込められています。しかしこの柚鎮さんの「すだ」は、単なる日常的言語や慣習的行為ということではありません。むしろ意識的に、自らの日常や身体性に引きつけて言葉を探し、語るということです。ですが他方でアカデミアの学知においては、知を語る者の感情

が、学生、院生、研究員、同僚、職員の人たちとの議論が、踏み止まる支えになっていました。また2000年代に入ってからクローズアップされてきた、職員や研究者の有期雇用問題も、大学を考える重要な契機になりました。本書の補論として所収されている文章は、こうした現状の報告のようなものです。

2012年に同志社のグローバル・スタグロイバール研究科(GS研究科)に来てからも、大学という大枠に対する崩壊感はありませんが、ここでももう少し頑張ろうと思うようになりました。前の大学時代からはじめていた対面関係での議論を軸とした場ということの意義も、GS研究科で出会った人々の中で改めて考えることになりました。そんな同志社での展開も、この本には含まれています。本全体がそうなのですが、とりわけ終章は、GS研究科での大学院教育はもとより、教授会、部長会、組合、さらには同僚や職員の方々とのお話など、様々な出来事や場面を念頭におきながら書いたものです。

私の文章は、悪文だと自分でも思います。たぶん一気にはいろいろなことを書くことができないので、拾い読みで読んでいただければ、と思います。

著者より

や身体感覚は、直接的には見えませんが、むしろそうしたことを表出することは、禁じられていると言つてよいでしょう。ですが、言葉にすること自体が耐え難い苦痛であり、忘れることによってようやく生き延びることができるようになる出来事、やはりあります。こうした出来事においては、それが言葉として言及されるたびに、押さえがたい怒りと痛みを伴う身体感覚が湧き上ります。歴史を構成している個々の出来事は、まずもってこうした苦痛や怒りの中で言葉を獲得するのではないのでしょうか。そしてまさしく本書で扱った軍事的暴力とは、こうした言葉たちにより表出されてきました。

本書に所収されている文章は、私のものも含め、すべて鄭柚鎮さんのこうした「すだ」において生まれたものです。そしてこの「すだ」をへて、私たちは痛みに関わる言葉の輪郭を手に入れています。軍事的暴力が蔓延する世界のなかで、痛みに関わるこうした丁寧な言葉の在処を確保していく試みこそが、求められているのではないのでしょうか。本書はこうした試みとして誕生しました。

著者より



岩波書店
1,500円(税抜)

良心学入門

小原克博(大学神学部教授)他著

同志社大学 良心学研究センター編の本書は、宗教・民族対立やグローバル化、科学技術の進歩と人間の尊厳の問題など、私たちが、今直面する課題を「良心」から考えるための書物です。良心概念の歴史背景から良心の実践可能性まで、同センターによる研究成果のエッセンスが、わかりやすくまとめられています。

全体は「思想・信条における良心」「社会生活における良心」「科学の時代における良心」の三部から構成されています。各章では、キリスト教、イスラーム、哲学、法、社会福祉、経済学、

環境問題、ビジネス、スポーツ、科学技術、医療、脳科学、心理学、人工知能の視点から良心にアプローチし、全体として「良心」が文理融合の最良のプラットフォームとなり得ることを示しています。

本書刊行の背景には、良心学研究センターを中心とした日常的な議論の蓄積があります。京田辺および今出川を拠点とする先生方の間に、これまでなかったような議論と交流の場を生み出すことになったのも、「良心」という共通のキーワードのおかげです。

同志社は日本社会や世界に對し、どのようなユニークな貢献ができるでしょうか。本書は、今後の同志社の方向性を共に考えていくための素材を豊富に含んでいます。良心に対する理解を深めるために、本学卒業生始め、多くの方に手に取っていただき、それぞれの場における議論に活用していただきたいと願っています。

著者より



ミネルヴァ書房
3,800円(税抜)

政治家はなぜ質問に答えないか

インタビューの心理分析

Ofer Feldman

(大学政策学部教授)他著

本書では「なぜ政治家が質問に答えないか」という問題について、政治コミュニケーションの観点から実証分析を試みた。政治は複雑であり、また政治家と一般の有権者には直接的なコミュニケーションがないため、複雑な政治過程を理解することは難しい。有権者に代わり政治家に質問を投げかけ、重要な問題の争点に対する政治家の立場を明らかにすることがインタビューの役割である。

政治家の話し方は独特であると言われる。時にインタビューの質問をはぐらかしたり、明確な答えを示さない。本書では様々な政治家へのインタビュー番組を分析対象とし、「どっちつかず

理論を用いて「なぜ質問に明確に答えられないのか」「どのような状況の時に起こるのか」「逆に明確に答えられるときはどのような時なのか」というような疑問を分析した。その結果、政治家の曖昧な発言は、政治家の置かれている状況や環境に起因する傾向が判明した。

日本では断定的な物言いを避ける傾向があり、分析結果は文化的な影響を受けていると一見感じられるかもしれない。しかしイギリスや台湾でも同様の分析傾向がみられていることから一般的に政治家に共通する特徴であると言えるだろう。

インタビューでの政治家の発言や態度は有権者の判断に影響を与え、時に政治権力の構造が変わりうる。政治における言葉とは非常に重要な役割を担っている。だからこそ、政治家がはつきり答えられない質問にこそ政治的に重要な論点が含まれているのではないかと有権者は常に注意を向ける必要があるのではない。

本書を通して政治家の発言の本質を理解することで、読者が政治とは何か、政治家とはどのような存在であるかを考える一助となれば幸いである。

著者より



岩波書店
1,300円(税抜)

いま大学で勉強するということ

「良く生きる」ための学びとは

松岡敬(大学理工学部教授)

佐藤優(大学神学部客員教授)著

2020年に迫った戦後最大級とされる教育改革。この大改革を目前にして、いま高等教育の意義が問い直されています。人口の減少、少子高齢化社会の到来などを見据え、大学は未来を拓く人物の育成に取り組まなければなりません。

本書では、目前に迫った改革を前に、OBで同志社大学特別顧問(東京担当)の佐藤優氏に協力いただき、「どのような人物を育て、社会に送り出そうとしているのか」について対談を行い、その内容を一冊の本としてまとめました。構成は「2020年学習指導要領改訂の意味」「なぜ

教養教育が必要なのか」「大学で作る『総合知』」「私立大学の存在意義」という4つの章から成っています。

各章において本学の取り組みを紹介しながら、随所に佐藤氏の深い見識と知見が示されています。変動する未来社会を担う高度職業人には専門分野の学びに加え、文・理にとられない幅広い教養を身に付けなければなりません。今回の対談では、変動の時代にこそ求められる教養、「学びの本質」について佐藤氏と多いに語り合いました。

1875年の設立以来「良心」と「自由」を教育理念に掲げ、京都を地盤にキリスト教主義を中核に置いた教育を展開してきた同志社大学。日本有数の歴史を有する本学は、変動する時代に、またグローバル社会において、どのような貢献ができるのでしょうか。本書は、今後の同志社の方向性を「同志社モデル」として示し、合わせてこれからの大学教育を考えていくための素材を豊富に含んでいます。本学卒業生のみならず、多くの方に手に取っていただき、これからの大学教育における議論に活用していただきたいと願っています。

著者より



KADOKAWA
1,500円(税抜)

古典歳時記

吉海直人(文学文化学部教授)著

大学で古典を教えていると、どうしても四季の移り変わりや年中行事について話すことが多くなる。それをコラム風に書きとめてみたところ、あつという間に一冊の本になる分量を超えてしまった。そこであらためて内容を吟味し、「古典歳時記」というタイトルにふさわしいものに仕立て直したのが本書である。まずは季節を正月・春・夏・秋・冬の五つに分類し、興味の持てそうなテーマを順に並べてみた。最初の正月の部では、総論の意味を含めて旧暦について解説している。旧暦と新暦のずれが大事だと思うからである。春の部

には、唱歌のコラムも書いてみた。また古典として『枕草子』や『源氏物語』の話題も入れている。学校行事としての卒業式・入学式についても書いてみた。夏の部には動植物の話題が多い。それだけでなく、葵祭・夏至・水無月祓い・梅雨などもある。祇園祭の保昌山についての新説も書いてみた。秋の部は話題に事欠かない。立秋・七夕・大文字があるし、「ばたもちとおはぎ」「松虫と鈴虫」「きりぎりすとおろぎ」のコラムもある。冬の部には時代祭・古典の日・七五三はもちろんのこと、藤原道長の「この世をば」の歌についても触れてみた。それに続いて京都文化という部を設けた。ここには京都駅0番ホームのこと、「あがる」とさがるのこと、鴨川と大堰川のことなど、京都特有の話題を集めてみた。本書は古典入門書でもあり、また現代版『枕草子』でもある。是非ご一読下さい。

著者より

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を、資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、長らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【常設展】ギャラリー内には6つの常設展示室が設けられています。1階には「新島襄の人と思想」、「同志社のあゆみ」、「世界の中の同志社」、「同志社の今」、2階には「J.N.ハリスと同志社」、「京都の中の同志社」と、部屋ごとにテーマがあり、創立以来の歴史と共に、京都や世界と共に歩んできた同志社の足跡をたどることができます。

【企画展】年3回程度開催される企画展は同志社に関わるテーマだけにとどまりません。新しい文化を発信する施設としてふさわしい企画展も適宜開催しています。

※常設展（2か月に1回程度の展示替え有）は随時開催中、企画展は詳細が決まり次第、ホームページでお知らせします。

【入場料】無料

【開館時間】10:00～17:00（最終入館16:30まで）

【閉館日】日曜日、月曜日、祝日、ゴールデンウィーク、夏期休暇中の一定期間、年末年始。ただし、企画展開催中は日曜日も開館します。

※開館日等を変更する場合があります。お越しになる前にホームページ等で確認ください。

【場所】同志社大学 今出川キャンパス

※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。



入場無料

お問い合わせ先

ハリス理化学館同志社ギャラリー事務局（日・月・祝日は閉室）

ホームページ：https://harris.doshisha.ac.jp/

TEL：075-251-2716 FAX：075-251-2736

E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

同志社大学古本募金 同志社女子大学DWCLA古本募金 ご協力をお願い

かつて新島襄がグレイス教会で献金を訴えた際、多くの聴衆から多額の寄付の申し入れがありました。その中で、年老いた農夫と寡婦がそれぞれ手渡した2ドルは、殊更に彼の心を打ち、そしてこの2ドルこそが同志社の核となった、と新島は書き記しています。この時に集まった5000ドルの献金はもちろん、それと同時に、多くの人々から頂いた善意によって同志社は設立されました。

同志社大学・同志社女子大学では、「古本募金」プロジェクトを開始いたしました。古本募金とは、皆さまのお手元にある不要となった書籍等（CD・DVD・ゲームソフトを含む）の買取金額が大学に寄付される仕組みです。その寄付金は、同志社大学では学生の奨学金に、同志社女子大学では図書館の図書購入費用に充てられ、これからの社会を担う学生の未来に繋がります。2ドルの精神をお持ちの皆様からのご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

期 間：随時

寄 付 方 法：下記をご参照ください。

同志社大学（https://www.furuhon-bokin.jp/doshisha/）

同志社女子大学（https://www.furuhon-bokin.jp/dwc/）

寄付の流れ：

- ①まずは寄付者ご自身で本・CD・DVD・ゲームソフトの梱包をお願いいたします。
- ②各大学のウェブサイト（上記）からお申し込みください。
宅配便の集荷日時を指定できますので、あとは集荷を待つだけです。
※合計5冊（5点）から送料無料です※
- ③集荷を指定した日時に宅配業者がご指定場所まで取りに来ます。送り状もウェブサイトから申し込んだ内容を印刷して持ってきますので手間がかかりません。
- ④上記①～③の3ステップで手続き完了です。
後日お手元に届く「寄付受領書」でご確認ください。

FLOW 古本募金の流れ



お問い合わせ先：同志社大学 学生生活課

TEL：075-251-3280

E-mail：ji-kosei@mail.doshisha.ac.jp

同志社女子大学 図書館

京田辺キャンパス TEL：0774-65-8481

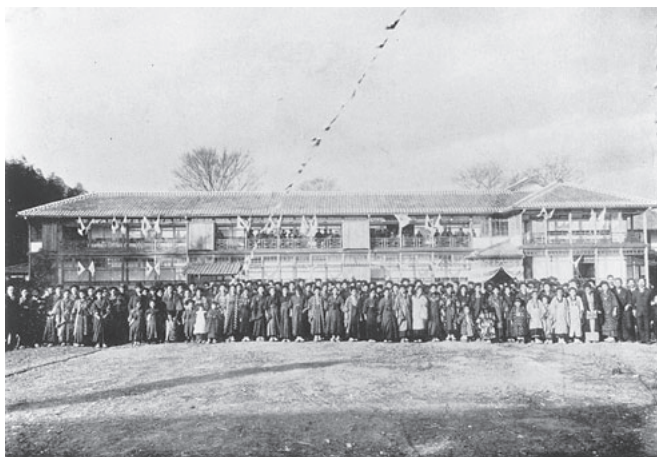
今出川キャンパス TEL：075-251-4145

E-mail：tosho-i@dwc.doshisha.ac.jp

学寮140年のあゆみ

同志社女学校が今出川の地に校舎をもったのは、1878年のことで、一階が教室、二階が寄宿舎になっていました。爾来140年、キリスト教主義のリベラルアーツ教育にとって不可欠の学寮生活がいとなまれてきました。今回は、同志社の女子教育における学寮の変遷をあきらかにするために、寮生や寮務主事による文書、写真、生活用具などを展示します。

- 期 間：2018年11月23日（金・祝）～2019年7月31日（水）
時 間：10:00～16:00
閉 室 日：土・日曜日、祝日（ただし、2019年5月6日（月・振）、7月15日（月・祝）を除く）
場 所：同志社女子大学史料センター
（今出川キャンパスジェームズ館1階展示室）
主 催：同志社女子大学



平安寮落成記念（1909年12月4日）

お問い合わせ：同志社女子大学史料センター

〒602-0893 京都市上京区今出川通寺町西入
TEL：075-251-4200 FAX：075-251-4201
E-mail：shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治8）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒8名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開します。

- 【公開期間】①通常公開
2019年4月1日～7月30日、9月3日～11月30日、2020年3月3日～31日
毎週 火・木・土曜日（祝日は除く、2019年4月29日～5月6日は閉館）
②特別公開
2019年4月1日～5日（春の特別公開）
7月28日、8月4日（オープンキャンパス・予定）
10月1日～5日（秋の特別公開）
11月10日（ホームカミングデー）
11月29日（創立記念日）
2020年3月20日～22日（卒業式）
※公開日の詳細はHPをご覧ください。https://archives.doshisha.ac.jp
【公開時間】10:00～16:00（入館受付は15:30まで）
【見学対象】①通常公開
旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）
②特別公開
旧邸周囲及び建物内部（母屋1階と附属屋）に入場できます。
※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。
【入 場 料】無料
【場 所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。
【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の1週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10:00～16:30）。



入場無料

お問い合わせ先

ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
TEL：075-251-2716 FAX：075-251-2736
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp

本号の特集は「学生ボランティアの本質」と同志社が果たすべき役割を考える」であり、近年の自然災害が多発する中での災害ボランティア活動への関心の高まりや、小中高におけるボランティア活動の教育課程への編入などの背景を踏まえたものとなっている。

ボランティアとは、無報酬の奉仕活動という意味ではあるが、自己の自発的・主体的な意思によって労働力や技術、知識を提供することと同時に、社会問題の解決や社会に必要な活動について理解し

共感することにつながり、教育的意義は大きいとされている。

「自由意思」を意味するラテン語のボランティアが語源で、スーパーボランティアとして話題になった大分県の尾畠春夫さんが、「自己完結するのが真のボランティアだ」として全ての生活資材を軽ワゴン車に積み込んで被災地に向かう姿がそれを体現しているのではないだろうか。

本号では、小学校から大学までの教育の場でのボランティア活動について記事を掲載することがで

きたが、座談会の中では本学において明治中期にも災害支援の救助活動の記録があることや、視覚障害学生を支援する学生団体が古くからあり日本の視覚障害学生の3分の1は同志社にいとされていることなど、本学全体でそういった活動が脈々と受け継がれていることも紹介されている。一方で、学校側がボランティアについて支援組織やプログラムを作ることによって、学生や生徒が受け身になつてしまふという問題も指摘されている。さまざまな現状を踏まえ、

建学の精神である、「自由」と「良心」を具現化するものとして、ボランティア活動をさらに発展させていくことが必要と思われる。

特集記事のみならず、本号にも多くの方々からの玉稿をいただいた。紙面を借りてお礼申し上げたい。短い期間での原稿の執筆、真にありがとうございました。

●同志社広報委員会小委員会委員

ABC順・〇印委員長

〇大学商学部教授	青木 真美
大学経済学部教授	東 良彰
大学理工学部教授	平山 朋子
大学広報部広報課長	今西 覚行
女子中学校・高等学校事務長	磯田 信行
大学広報部長	岩田 喬彦
女子大学学芸学部教授	鎌田 貴伸
中学校・高等学校事務長	鎌田 伸一
大学法学部教授	川嶋 四郎
国際中学校・高等学校事務長	貴志 浩行
大学神学部助教	木谷 佳楠
女子大学表象化学部教授	北尾キスリン 耕太
大学生命医科学部准教授	小林 真理
大学政策学部准教授	小谷 啓太
大学スポーツ健康科学部助教	松倉 幸子
女子大学看護学部准教授	光木 子子
女子大学現代社会学部教授	三宅え 清子
幼稚園教諭	森田 真理
大学文化情報学部助教	中安 和正
女子大学薬学部准教授	成橋 昌典
大学心理学部准教授	及川 道子
大学グローバル地域文化学部教授	ROBERT JOHN CROSS 齋藤 道子
小学校事務長	田中 裕一
法人事務部校友同窓課長	唐谷 芸秀
大学グローバル・コミュニケーション学部助教	山口 隆雄
国際学院事務長	塚田 雄一
大学文学部助教	内山 栄造
香里中学校・高等学校事務長	内山 孝一
大学社会学部教授	鵜飼 渡邊
女子大学広報部広報室広報課長	山本 寿望
女子大学生生活科学部教授	柳井
法人事務部長	

●編集協力 アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：1冊236円）のみのご負担でご購読いただけます。

・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。

・宛先 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報 第147号

編集人 青木真美

発行人 八田英二

発行 学校法人同志社

同志社大学広報課同志社時報係

電話 (075) 251-3120

印刷所 株式会社 石田大成社

2019年4月1日発行